a.n.: a ZINE by anarchist_neko

—REDUX edition—

To my friends, foes, and everyone in between... with love.

「アナーキー」

貶めらるること常なりて、理解せらるるは夢更になく
今日の〈恐怖〉、それは汝なり
大衆叫ぶ　汝は秩序の破壊者なりと
果てなき戦の殺戮者なりと
叫べ！ かの語の真意は
それを求めざる者らに届かざるが故に
ああ、高潔なるその語よ。汝は凛として清く
吾が理想の全てを示す
汝を未来に授く！ 人々が
自身とその上なるもののために生き始むるその日に
それは陽光とともにか、嵐の動乱とともにか
確かなるは、その日の訪れのみ
吾はアナキストなり。ゆえに
何人をも支配せず、支配もせられず！

John Henry McKay. 1888. ‘Anarchy.’

目次

献辞 i

「アナーキー」 iii

目次 iv

0　アナキズム

「2025 年 8 月の私のアナキズム」宣言 2

I　暴力

アナキストとして投票することについて 12

インターセクショナリティ 15

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか 19

「あかね空」 22

II　世界

「女性」の「定義」 24

定点としてのセックス 31

小学生でもわかること 33

「炎」 37

III　現状

「当たり前の理」なんかじゃない。 40

パンとバラとモモ 43

なぜおしっこはもれるのか 45

「無題」 47

IV　革命

静かな革命 50

ツイッター以外でなんか活動してんの？ 54

できることをできる限り最大限に 56

「合成クオリア」 57

V　物語

中立的な観点 60

neko 62

「バグ」宣言 72

「あとがき／まえがき」 77

VI　虹

初出一覧

0

アナキズム

「2025年8月の私のアナキズム」宣言

0.「アナキズム」

2025年8月の私は、自分らしく生きたい。

本来、この権利と自由はすべての者に保障されているはずである。だから、自分らしく生きられる共同体にすべてのひとが属せ、無数のそういった共同体が平等に協力し合うことで成立している社会を、私は求めている。すべてのひとがそれを可能とする社会を求め続けることを目指す運動を、私は「アナキズム」と呼んでいる。

1. 暴力

2025年8月の私のアナキズムは、暴力行為を拒絶する。

自分らしく生きる権利と自由は、本来、すべてのひとに保障されているはずである。暴力は、それを奪い、尊厳を傷つけるもの。だから、避けられる暴力を行使することは、私のアナキズムに反する。

そして、だからこそ、私や私の大切なひとたちが、なんらかの暴力の被害に遭い続けているときには、それがいかなるかたちであろうと、私は私たちをまもるため、どのような手段も厭わず徹底的に抵抗する。そのときに限り、必要最小限の暴力の行使を自らに認める。ただし、「本当の敵」は銃を向けてきた個人ではなく、加害者をうんだり、うむことを防がなかったり、あるいは加害を正当化したりする思想や制度、構造自体であることも、決して忘れてはならない。そして、私たちの抵抗に際して、すでに周縁化されている者たちばかりが報復の対象とされたり流れ弾に当たったりすることも。

アナキストであるということは、すべてのひとが自分らしく生きられる社会の実現を求めること。だから、暴力を、それを生み出す根源まで徹底的に遡り、そのすべてを拒絶し続ける。そして、自分らしく生きる権利を踏みにじられたときは、徹底的に抗う。そのために、なにが「暴力を生み出す根源」なのかを常に考え続け、聞き続ける、ということ。

2. 世界

2025 年 8 月の私のアナキズムは、世界が流動的でぐちゃぐちゃとしていることを理解している。

世界は、ぐちゃぐちゃとしている。私たちも、私たちらしさも、社会も、社会的交流も、自然も、決して単純なかたちで描くことはできない。だが、ぐちゃぐちゃとした世界が自分を殺しにかかってくるとき、繰り返される抑圧と搾取と暴力を理解できないのは、怖い。だから、私たちは世界を抽象化し、単純でわかりやすく絶対的な図形の繰り返しで描こうとする。そうやって世界を説明し、理解したつもりになる。本質主義的で二元的な「定義」で、曖昧なものを排せたつもりになる。「敵」と「味方」をつくり、絶対悪と永遠の仲間を得た気になる。そして、いざそれらの「定義」に反するものがあれば、「異常」な「例外」として、無視するか抹殺を図る。そうやって、世界を正確に映し出す鏡を作れたと、満足しようとする。それこそが暴力を正当化するイデオロギーの再生産だと気づかぬままで。

だが、世界はぐちゃぐちゃとしている。静的な単純を求めるのは自然でなく、解釈をする私たちにすぎない。綺麗に張られた薄い氷の下は、本当は真っ暗な空洞でしかないことに、ある日、ふと気づいて、また嘘を重ねて逃げることになる。本当に対峙すべきものを見誤り続けながら英雄を気取り、一部以外の物語を「例外」として排除するだけの理論を堅持し続ける。そして、永遠に前に進めぬまま、薄氷の上で恐れ続ける。

アナキストであるということは、世界がぐちゃぐちゃとしていることを一旦認めるということ。すべての「説明」が一定の不十分性を持っていることを認め、それの更新を続けると同時に、常に目前のぐちゃぐちゃとした世界それ自体を、どんな「説明」よりも優先するということ。私が知りうることや書きうることは常に不完全であると認め、これまで「例外」と

して排除されてきた者たちの物語を積極的に聴き続けるということ。

3. 現状

2025 年 8 月の私のアナキズムは、自分らしく生きる自由や尊厳をすべてのひとが奪われ続けている世界に生きていることを認め、これに徹底的に抵抗する。

私たちの世界は、暴力を正当化するイデオロギーに縛られている。一部を「普通」とし、「普通」以外への暴力を正当化するそれは、状況や環境によって、国家体制主義、資本主義、本質主義、セクシズム、レイシズム、able 主義、allo シスヘテロ主義、生殖主義、家父長制、植民地主義、排外主義、人間中心主義、あるいはまだ私が意識できていないさまざまな規範や制度、権力構造として具現化されている。その総体こそが「秩序」であるとされ、この「秩序」をまもるために暴力を振るい、これより逸脱しようとする者を罰することを求められる。

私たちは皆、絡み合う無数の属性から成り立っている。その一部は「普通」であるとされ、一部は「異常」であるとされる。一部は、より「異常」なものを排除するために「多様性」として取り込まれて容認される。「秩序」のなかで、私たちは「普通」でないことを理由に、日常的に排除され、支配され、搾取され、周縁化され、被害者であることを求められる。「秩序」のなかで、私たちは「普通」であることを理由に、日常的に排除し、支配し、搾取し、周縁化し、加害者であることを求められる。「秩序」

をまもるため、そうやって私たちは加害と被害を繰り返しながら生活することを求められる。

アナキストであるということは、自分自身もまた、この「秩序」から逃れ切れていないことを自覚した上で、暴力を正当化するこの邪悪な「秩序」を破壊するために戦い続けるということ。そのために、この「秩序」の背景にある暴力のイデオロギーの存在を見破り、これに立ち向かい続けるということ。だからアナキストは、反資本主義者であり、フェミニストであり、Queer であり、エコロジストであり、反 able 主義者であり、反レイシストであり、さらに逸脱者であり、革命者であらなければならない。

4. 革命

2025 年 8 月の私のアナキズムは、私たちの日常的な革命の重要さを理解している。

暴力を正当化するイデオロギーは、私たちの挨拶から日々の献立、布団の中に至るまで、あらゆるところに存在する。それは私たちのあらゆる日常的な行為を縛ると同時に、あらゆる日常的な行為によって、維持され再生産され再規定され続けている。

このイデオロギーは、大抵「中立的」だとか「普通」であるとされる言説にもっともよく表れる。だが、多くの場合それを指摘する自由は許されておらず、搾取と加害に基づいた「秩序」に反抗すれば「偏っている」とされ、「過激」で「危険」であると咎められる。分断を図る「暴力的な反

社会的勢力」であるというラベルを貼られ、国家や資本家によって、あるいは労働者や「人権家」によってすら、罰せられる。生活の手段を奪われ、医療へのアクセスを拒否され、他方で「病気」の「犯罪者」とされ、謀略と拷問の末に殺される。そして、斬り落とされた首と面白おかしく誇張された噂話を通じて、「普通」を再生産することを求められる。私たちは、だから、「中立的」で「普通」な言行ばかりしか、繰り返すことはできない。私たちらしく考え、喋り、身体を動かし、生きる自由は、ここにはない。

だが、同時に。この「秩序」の支配の中でも、私たちは常に多少の選択を許されている。もちろんこの「秩序」による支配を強める選択肢しかない場合もあるし、望ましいと思う選択肢が自他を危険に晒してしまうから実質的に選択不可能な時もある。だが、ときには、抵抗のための選択肢がそこに紛れ込んでいることもある。それは、「小さ」くて「静か」な抵抗かもしれない。路上で座り込んでいる方に声をかけてみるとか、肉の代わりに豆腐を買うといった「程度」のことかもしれない。しかし、それはたとえ僅かでも、世界を変えているという点において、確実に「革命」である。そして、ひとりひとりの「小さな革命」の蓄積を通じて、この世界は瞬きのたびに変化し続けている。私たちは、こうやって日常的に世界の在り方を変容させ続けて、次の私たちの行動を縛る仕組みをつくっている。

アナキストであるということは、私たちが日々繰り返す無数の選択を常に意識し、可能な限り最も「自分らしい」＝「アナキストらしい」と信じられる選択を繰り返しながら生きるということ。私たちの一つ一つの行

為が、この社会の複雑なシステムにひとり分の変化をもたらすことを理解すること。それはときとして、周囲がまねるという形でさらに広がっていく。そういった行為を通じて、暴力を正当化するイデオロギーを、共に、内外から徹底的に破壊し続けるということ。

社会変革に政府はいらない。革命に火炎瓶は必ずしも必要ではない。あなた自身が信じることのために、今できることを、今できるかぎり、最大限に。それは明日からの戦いに備え、今は休憩することかもしれない。

5. 物語

2025 年 8 月の私のアナキズムは、あなたの物語はあなたにしか書けないことを理解している。

私たちは皆、絡み合う無数の属性をもとに、加害と被害の「秩序」のなかに配置されて存在している。この「秩序」に縛られながら、次の瞬間にいられる場所とできることの選択肢を与えられる。そのような世界のなかで選択を繰り返しながら、さまざまなことを知り、経験し、考え、実践し続けている。

私は世界を「私」という単位でしか経験できない。私の撫でた猫は、常に無数の属性をもつ「私」が撫でた猫である。その「一撫で」は、この邪悪な世界の中で私がこれまで経験したことの結果経験されたものであり、絡み合う属性同士がその瞬間いる社会のすべての存在のすべて

の属性と緊張し合うなかで経験された「一撫で」である。ある一つや二つの属性として、猫を撫でることはできない。そうやって、私は「一撫で」ごとに世界を経験する。

あなたの経験も、分解することはできない。常に、「あなた」という単位での経験でしかない。あなたと私が同じ属性をもつからといって、ふたりが全く同じ「一撫で」を経験することはない。だから、私があなたの「一撫で」を代わりに知ることも経験することもできない。

だからこそ、私たちはともに語り続けなければならない。世界を私のように知りうるのは私しかいないし、あなたの世界を知りうるのはあなたしかいない。私が知りうるのはあなたの紡いだ物語の私なりの誤解でしかないが、あなたのことばを聞くことでしか、私は私以外の物語を知ることはできないのだから。

だからこそ、お互いの物語をまもり合わなければならない。あなたが紡いだ物語は、「あなたが語った物語」として私の物語の一部となり、私の物語の次のページをつくる。私たちの物語は、これまでも、これからも、緊張し合い、絡み合い、反発し合い、引用し合う。あなたの物語なくして私の物語は存在しないし、私の物語なくしてあなたの物語も存在しない。「私の物語」は、そのような意味で常に「私たちの物語」であったのだから、そこから恣意的に排除されてきた物語を、たとえば大文字の Anarchist や Feminist、Activist 以外のアナキストやフェミニスト、アクティビストらの物語を、決して忘れてはならない。

そして、だからこそ、アナーキーを求めなければならない。「私たち」の物語をまもり合うために、経験し語り合う機会を奪う暴力とそれを正当

化するもののすべてを、否定しなければならない。すでに多くのひとびとの物語が消されてきたことを意識しながら、すべての物語をまもるための革命行為を、続けなければならない。

アナキストであるということは、私たちの物語をまもり続けるということ。あなたの書いた物語を読み続け、私の物語を書き続けるということ。「語る価値」を否定されてきた者たちの物語の語られる場を、私たちなりに求め続けるということ。忘却や抹消を求められた物語の存在を、決して忘れないということ。そして、もっとよく語り合うために、暴力も、そのための「秩序」も、それらを求めるイデオロギーを再生産する言説も、すべて拒絶し続けるということ。

だから、アナキストであるということは、この宣言も、この先書かれることのすべても、常に不十分であると理解するということ。これが「2025年8月の私のアナキズム」でしかなく、更新され続けなければならないということ。そうやって、すべての者が自分らしく生きられる共同体に属している社会を皆が求め続ける社会のために、皆で語り合い、まもり合い、紡ぎ続ける、ということ。

I

暴力

アナキストとして投票することについて

投票は、暴力だ。

選挙は、「民主主義」の幻想を維持しながら国家の権力を正当化する暴力装置だ。非 allo シスヘテロに対する制度的な攻撃も、入管も、警察の暴力も、ホームレス状態の方の弾圧も、天皇制も、資本主義体制も、わたしたちが政府に権力を与えることで実現され続けている。その結果、今日もまただれかが傷つけられ、だれかが殺された。自公維に投票したことがないから、日本政府によって殺された者たちの死について罪を負わなくていい？　わたしたちの手が綺麗だなんて、思うな。

だけれども、投票しなければ、殺される。大好きなひとたちが殺されていく。わたしが、殺される。投票すれば、もしかしたら、わたしたちを守れるかもしれない。わたしの大好きなひとたちの負うはずだった致命傷は、重傷程度で治まるかもしれない。

それでも、自分の一票は、入管から天皇制にいたるまでのすべての

暴力を、確実に一票分だけ正当化する。これまでの、そしてこれからの暴虐に必要な権力を、また与えてしまう。今日（参議院議員通常選挙前日）までずっとずっと悩んで、なお自己防衛として一票投じた。この結論に至るまで、毎回、毎回、すごく悩む。そして、毎回、涙目で、自分たちを守るために、だれかを傷つけることを選ぶ。

「消去法で選べばOK！」
「自公維以外の候補者の名前を書けばOK！」
「どんな宝くじよりコスパいい！」

「投票するな」「投票しろ」なんて単純な話ではない。投票を呼びかけるなとも言っていない。実際、わたしは二枚ともに、わたしの思うlesser evilの氏名を、わたしが差別的だと信じることを主張していることを承知で書いた。これは「正当防衛」かもしれない。投票をしないことは与党に「有利」であり、わたしたちはその結果殺される。だから、これはきっと、わたしが殺されるのを、自らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために防ぐための暴力。わたしの大好きなひとたちが殺されるのを、彼人らの自律性と尊厳を奪われるのを、わたしのために防ぐための暴力。そうやって、今日も傷つけられることを正当化された多くの方がいる。明日も、そうやって殺される多くの方がいる。わたしやわたしの大好きなひとたちの身代わりとして。

「在外投票に間に合わない人のためにも、投票を！」
「投票できない人の代わりにも投票しよう！」

こんな話をしていたら、自分が立候補すればいいじゃない、と言われた。だが、わたしが選ばれること、選ばれうること、それは問題の本質的な答えではない。わたしはわたし以外の経験を語れない。同様に、あなたも、あなた以外の経験を語れない。投票を通じてにせよ、立候補を通じてにせよ、わたしたちのあげる声は、声を奪われているひとの代わりにはなりえない。それができると傲り、だれを殺すかを代わりに選ぶ権利が委任されているとも思わない。

搾取と虐殺を正当化するヒエラルキーの存在する限り、その中で個々の「権力者」やその集団を攻撃しても、構造それ自体は変わらない。この社会的な力の差異を生む構造は、わたしたち自身の選択できる言説や行為を縛ってはいるけれど、同時に、わたしたちのそれらによっても、維持されている。その絶望と希望に気づくことが、まず「わたしの思う『アナキズム』」のはじまりであると思う。そして、それ無しに社会は変わらない。わたしたちは、自由にはなれない。

「罪悪感」をおぼえてもどうしようもない。だけれども、ごく一部に権力を与えることを正当化する制度を肯定し続ける限り、ましてや未だに一票の格差すら是正しない選挙の在り方の中でそれを続ける限り、解決になど辿り着けない。

社会を変えるのは政府だけじゃない。わたしたち自身の自発的な行動や自由な連帯、抵抗を、その力を、その喜びと恐ろしさを、忘れるな。絶対に、誤魔化すな。

インターセクショナリティ

インターセクショナリティの考えが、どうも誤解されているように感じられるので、わたしなりの理解をここに書きたい。専門家ではないことは、明記しておきます。

インターセクショナリティの説明として、次のようなものをよく見る：

> 「ある社会的属性を持っていたら別の社会的な属性を持っていないわけではない。例えばBlackの女性は、女性差別だけでなく、Blackとしての差別も経験する」
> 「差別の【軸】は一つではなくて、独立した数本だ。そして、マイノリティ属性を多く持つほど多くの【軸】で差別されるから、マイノリティ度があがる」

これらは一定に正しさのある説明であるとわたしも思うものの、「インターセクショナリティ」という考えが表すものとは、ややずれがあると解

釈している。例えば、一つめの説明は、Crenshaw[1]が批判しているものですらあるようにわたしは思う。そして、よく見るベン図を用いた説明は、この誤解をなおさらに広めてしまうものである。

これは、わたしの理解でしかないが、ある人間が、ある状況下で経験する特権や抑圧、周縁化や中心化は、殆どの場合、一つまたは数個の名前のつけられる「〇〇差別」では説明できない。どの差別も、それが構造的なものであるのならば、全て絡み合い、維持し合い、引用し合い、相互作用し合う。だから、それらはけして「独立した複数の軸」などで表されるものではない。

> わたしたちの社会は、暴力を正当化するイデオロギーに縛られている。それは、状況や環境によって、国家体制主義、資本主義、本質主義、sexism、racism、ableism、allocisheteroism、生殖主義、家父長制、植民地主義、人間中心主義、あるいはまだわたしが意識できていない様々な暴力的な思想などと、名前やすがたかたちを変えながら、社会に遍在している。これらは、たしかに表面的には大きく異なるが、すべて一部の人を「普通」とし、「普通」以外への暴力を正当化するイデオロギーのさまざまな顔にすぎない。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

わたしは常に「うつ病のノンバイナリー(?)」であり、「うつ病」と「ノン

[1]Crenshaw, Kimberle. 1989. Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics. https://chicagounbound.uchicago.edu/uclf/vol1989/iss1/8

バイナリー(？)」に分解できるものではない。そして、本当はこの説明すら誤っている、わたしは「うつ病」と「ノンバイナリー(？)」だけでなく、無数の (社会的) 属性の総体であるから。だから、わたしがわたしの権利を求めたり経験を語ったりするとき、それは常に例えば「うつ病患者」としてのみでなく、他の属性の多くまたは全てを含めた「わたし」がすることである。

> わたしの経験や知識を分解することはできない。わたしの経験は、常に、「わたし」としての経験や知識でしかない。世界を経験するわたしは、常に無数の属性の総体である。わたしの撫でた猫は、常に無数の属性の総体としての「わたし」が撫でた猫である、それは、この邪悪な「秩序」の中で経験される「一撫で」である。わたしのもつ属性同士が絡み合うなかで、その瞬間いる社会のすべての人のすべての属性と緊張し合うなかで経験された、「一撫で」である。ある一つや二つの属性のみとして猫を撫でることはできない。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

ある属性である者ら全員が同じ経験を共有するわけではない。さまざまな「当事者」がいて、その全員がさまざまな環境に生き、さまざまな経験をしている。わたしたちはそのひとり分以外、本当は理解など決してできない。だから、全員が等しく声をあげられ、またその声が等しく聞かれ反映される運動を、政治を、そして社会を、求めねばならない。「インターセクショナリティ」とは、そのための理論であり、実践であるとわた

しは思う。誤解された理解は、このためにはならない。

今年のプライド月間の時、ZOZO が人種や国籍に関するマイノリティについての言及を、SOGIE に関わるとされる差別と併せてしていた。ファストファッションを擁護する気はないが、これを「また別の差別問題」「タダ乗り」と主張していた人がいたについて、わたしは反対する。言及せねばならないはずなのに、ずっとずっと軽視してきたことでしかないと考えている。その軽視の繰り返しの一つの結果として、「女性」や「女性の問題」に規範性や普遍性を求め、一方でそれにあてはまらないさまざまな女性やかの女達の経験を周縁化したり透明化したり、あるいは積極的に排除することで成立する「フェミニズム」の存在が、あるのではないのか。

> あなたの物語もわたしの物語も、誰にも代弁などできない。
> あなたの物語を聞くことでしかわたしはわたし以外の物語を知ることはできないが、わたしが解釈した瞬間に、それはわたしの物語の一部でしかなくなるのだから。
>
> 『「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言』

インターセクショナルなもののみかたと運動を。

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか

わたしは、「フェミニズム」を家父長制、より正確には「allo シスヘテロ家父長制」を打破するための運動だと考えている。「Allo シスヘテロ家父長制」とは、allo シスヘテロ男性を中心に、それ以外の非バイナリー、女性、およびこれら以外の性別の方たちが周縁化されて形成された「家族」が期待され、生殖を通じて「家族」を再生産することを望ましいものとしながら、各制度を通じてこの「家族」関係の維持を図る社会構造のことだと考えている。

この理解では、「フェミニズム」の「敵」は allo シスヘテロ男性ではなく、社会に蔓延る家父長制となる。確かに、「男性」に権力、影響力、発言権が与えられがちなのは事実として解消されなければならないし、その結果、「女性」を中心とした多くが抑圧され殺されている。そして、これらの暴力は、この（allo シスヘテロ）家父長制社会の結果であると同時に、これを維持する〈力〉ともなっている。だが、自分の理解では、われわれはこの（allo シスヘテロ）家父長制社会に存在する以上、否応がなし

にそれに縛られ、多くの場合、その期待に沿うように行動している（そうしないと罰され、場合によっては殺される）。

この暴力的な構造への加担から自由な者がいると、わたしは思えない。少なくとも、これまでに多くの者が、自身の加害への加担を否定ないしは矮小化するために無罪を主張してきた。わたしたちは皆、被抑圧者かつ抑圧者としてこの暴力的な構造に皆が参加しているのだという理解は、実際に正確だと思うし、自身の差別性や規範などを問い直す目的でも大切に思う。そのような意味で、「敵」を特定のジェンダーや階級に求めることは、少なくとも「フェミニズム」の定義をそこに求めることは、不十分であると思っている。

この構造の中で周縁化されがちな集団がいないとは言っていない。だから、その集団を、アイデンティティとは独立に、「女性」と呼び、この意味での「女性」をフェミニズムの主体であると言うことも可能だと思う（Haslanger[1]のように）。だけれども、そうやって女性でない者、たとえばすでに周縁化されている非バイナリーや一部の男性を含んだ集団に「女性」という名を与えることが、わたしは十分に ameliorative であるとも思えない。

だから、わたしはフェミニズムの「主体」は全てのひとだと言うし、フェミニズムは「みんなのもの」だと言う。そして、allo シスヘテロの男性も、AMAB の非バイナリーも、AFAB の男性も非バイナリーも、フェミニズ

[1]Haslanger, Sally. 2000. Gender and race: (What) are they? (What) do we want them to be? *Noûs*, 34(1), 31 – 55.
hooks, bell. 2000. *Feminism is for everybody: Passionate politics*. South End Pr.

ムに allo シスヘテロ女性と同じように参加できると言うし、「フェミニズム」という運動において、等しく発言権を持つことはなんの問題でもないと言う。すでに発言の機会を奪われている方たちが安全に発言できる場を求めることは、運動の「主体」の話ではない。わたしの想定する「主体」には、いわゆるインセルやアンチフェミニストも含まれるだろうが、わたしは彼人らの思想を受け入れなければいけないとは一言も言ってないし、一つも思っていない。言っているのは、フェミニズムという運動において、ジェンダーやセクシュアリティを根拠に「主体性」を否定することが、理に叶っているとは思えないということだけ。

わたしの言う「フェミニズム」がもはやフェミニズムでないという意見も、一定に正しいと思う。実際、自分も自分が「フェミニスト」であるのか疑問に思うことも多い。だけれども、大切なのは何が「フェミニズム」か、誰が「主体」かではなく、いかにしてこの家父長制を打破していくか、いかに暴力や搾取、周縁化を終わらせるかではないのか。「フェミニズム」や「フェミニズムの主体」の定義がもし必要ならば、わたしたちの運動に「有益」であるかの一点のみが大切である。

「あかね空」

燃えるひかりのなかで私はためらう 。

II

世界

「女性」の「定義」

「女性」の「定義」という見飽きた問いについて、考えてみましょ。

「定義」とは

――まず、「定義」ってなんなのかな。あなたの言う「定義」の定義は？
――なぜそんなことを聞くのか。シーライオニングだ。
――そんなことないと思うよ。聞いてる理由は二つあります。一つは、「定義」ということばが適当に使われており、実際に求められているものが会話の途中でどんどんと変化していくのを何度も見てきたから 。もう一つは、定義という行為が非常に困難であることを指摘するため。

――簡単だ。

「定義」の定義 1

言葉や物，事象をほかの言葉，物，事象で規定し，説明すること

――だめ。いくつかの問題点を指摘しよっか。まず、「規定し、説明する」について。ある表現を〈規定〉しながら、「説明」することは出来ない。その表現の意味が確立しているのならば、その意味を変えぬまま、たとえ結果的に同じ意味を持つとしても、〈規定〉なんてできない。そして、〈規定〉すれば、その表現の意味は、当初から変わってしまう。逆に、意味が確立していないのならば、それの〈説明〉を求めるのはナンセンス。グランドに白線を描くことを考えてみて。あなたができるのは、すで引いてある線を真似て引き直すか、自分なりの新しい線を引くことだけ。どちらにせよ、新しく引かれた線は決して元の線ではない。

これを無視したとしても、なお問題が残る。その〈規定〉にせよ〈説明〉にせよ、その妥当性は誰も判断しなくてよいの？　聞き手らの同意も、説得することも、わたしがそれを「真」であると信じていることすらも必要とされていないけど、いいの？　じゃあ、これでもいいよね：

「定義」の定義 2

あかくてまるくてあまいたべもの

――ふざけるな。辞書を見ろ。

――グラウンドにすでに引いてある線を、指さしてみるってわけね。広辞苑には次のように書いてるね：

「定義」の定義 3

概念の内容を明確に限定すること。すなわち、ある概念の内包を構成する本質的属性を明らかにし他の概念から区別すること。その概念の属する最も近い類を挙げ、さらに種差を挙げて同類の他の概念から区別して命題化すること　(『広辞苑』[第六版])

ここでも、妥当性は問題にされていない。ならばわたしの定義になんの問題があるの？

――こんなの言葉遊び。常識でわかるだろ。

――「常識」に訴えるというのなら、「常識」もしっかりと定義してほしい。そして、「常識」というものが、大抵の場合、規範と不可分であるということもわすれずに。

――じゃあおまえが「定義」を定義してみろよ。

――正直、そんなの無理だと思うんだよね。厳密に定義するためには定義された表現のみを使用しなければならないけど、この場合それが可能であるか怪しいし、そもそも、「『定義』の定義」の定義も必要になる。でも、いったん受け入れてもいいような〈説明〉なら、できるかも：

「定義」の説明 1

あるディスコースにおいて、それに参加している集団で合意された、またはされると期待された、ある表現の使用方法に関する言語的ないしは記号的表現を通じた取り決め。

この〈説明〉を、以降のわたしたちの会話に限定した〈定義〉として採用することにも、さほど問題もないと思う。ただ、それはこのブログの外において、どれほど妥当かはわからない。だって、他の会話で「定義」ということばを口にする際、これにみんなが納得して従っているかなんてわたしにはわからないし、ましてや、それを取り決める権威などわたしにはないから。 わたしに出来るのは、わたしが妥当であると思う範囲で、誠実に〈説明〉し、それをもとに、今からこの文章ではこう使いますよと取り決める程度だけ。

〈定義〉と〈説明〉

――待て、〈定義〉と〈説明〉は同じ意味だろ。
――ううん。 わかりやすいように「りんご」について考えてみましょ。まず、〈説明〉から。

> 「りんご」の 説明 1
> あかくてまるくてあまいくだもの

じゃ、このとき、あおりんごは、「りんご」でしょうか。この〈説明〉では、「りんご」にあおりんごは含まれていないよね。でも、わたしたちの社会では、あおりんごはりんごであると認識されるし、実際「りんご」という表現をあおりんごを指すためにも用いてる。そこは異論ないでしょ？ じゃ、

修正されるのはどっち？　当然のように、〈説明〉の方です。

「りんご」の 説明 1′
あか色、あるいはみどり色の、まるくてあまいくだもの

じゃあ、今度は〈定義〉について考えようか。次のように、「りんご」を定義するとしましょ。このとき、あおりんごはどうなると思う？

「りんご」の 定義 1
あかくてまるくてあまいくだもの

あおいりんごは、ここではやはり含まれてないよね。

――同じように　定義を直せばいいだけだろ。
――そう？　ほんとに？　あなたは、先ほど「定義」の定義 1 で、「規定」という言葉を使ったよね。『広辞苑』による「定義」でも「概念の内容を明確に限定すること」と書いていたよね。

わたしたちは、「りんご」の定義 1 によって、「りんご」は赤色であると、「規定」にせよ「限定」せよしたんだよね。じゃあ、あおりんごは「りんご」ではない。だって、そう決めましょうねって言うのが、〈定義〉なんだもん。

――いや、「完全」な定義をすればいい、すべての女性に共通する普遍的なものを出してくればいい。
――できんのそんなこと？

> §66 “例えば、我々が「ゲーム (Spiel)」と呼ぶ事象について、一度考えてみてほしい。盤上のゲーム、カードゲーム、ボールを使うゲーム、格闘的なゲーム、等のことを言っているのだ。これらすべてに共通するものはなにか？” ——「なにか共通なものがあるに違いない。さもなければ「ゲーム」とは呼ばれない」と言ってはいけない——そうではなく、それらに共通なものがあるかどうかを見たまえ。 ——なぜなら、それらをよく眺めるなら、君が見るのはすべてに共通するようななにかではなく、類似性、類縁性、しかもいくつもの種類の類似性だからだ。繰り返すが、考えるのではなく見るのだ！ (ウィトゲンシュタイン, 2020, p.75)

さあ、「ゲーム」を過不足なく〈定義〉してみて。古今東西すべてのゲームを含み、かつそれ以外のなにも含まない、完璧な〈定義〉を。それが出来たら、「女性」を〈定義〉してみて。古今東西すべての女性を含み、かつそれ以外のなにも含まない、完璧な〈定義〉を。

——だからなんなの？

——女性の不完全な〈説明〉もまた、一部を周縁化し、それはそれとして大きな問題だよね。でも、女性の不完全な〈定義〉は一部を女性でないと宣言してしまう。しかも、わたしたちが今話しているのは、例えばある本の中での「女性」ということばの使い方などではなく、「女性」という概念それ自体の〈定義〉。それは、誰が「女性」で、誰がそうでないかに関する「取り決め行為」をしろということ。 どうしてわたしやあなたに、「生

物学」の何千年も前から存在する女性を〈定義〉する権限があるの？　一部の女性を「女性でない」と線引きする権利があるの？　あおりんごを見たとき、神を気取って「これはりんごでない」と言うのは、わたしやあなたに許された行為であるとは思えない。

わたしたちに出来ることがあるとするなら、それは、可能な限り誠実な、それでも不完全な、〈説明〉でしかない。だから、わたしたちの理解が大きく変化したとき、わたしたちの今考えつく最善の説明は、時代遅れで、もしかしたらその上差別的ですらある〈説明〉となるかもしれない。

それは怖いことかもしれない。自分の苦しみや喜びの根拠が、流動的でふわふわとしたものであるというのは、不安になることかもしれない。でも、私たちって、なんのために「女性」を〈説明〉したいんだっけ？　すべての女性が、一人残らず、自律的に、自由に、尊厳を奪われることなく生きられる社会を実現するためじゃなかったっけ。ならば、そのためにより適切で、よりよいものとなるように、「女性」の〈説明〉が変わることって、むしろ良いことではない？　そもそもわたし達自身、社会の変化とともに、ぶつかる問題も、解決できる問題も、あるいは自己認識すらも、変化してるんだから。そのたびごとに新しい〈説明〉を考え続けていくことって、普遍的な「女性」の説明にせよ定義にせよを求めるより、よっぽど大切じゃない？　よっぽどよっぽど、「フェミニズム」じゃない？

＊　＊　＊　＊　＊

ウィトゲンシュタイン, L, 鬼界彰夫 (訳). 2020.『哲学探究』. 講談社.

新村, 出 (編). 2008.『広辞苑』, [第六版]. 岩波書店

定点としてのセックス

「性別の基準は、常に性染色体だ」と言っているひとたちに対して、わたしは「あなたの考える『基準』は、性染色体に関する知識が一般に浸透する前後ですら変化していますよね」と思うけど、あのひとたちからすれば、セックスという「真理」があって、それをより正確に表せるようになっただけ、となるのだろう。セックスは普遍的で固定的で、超越的な「真理」たる基準であるという考えで、技術や時代が進歩しても、ただその「定点」へ近づいているだけと解釈される。そして都合の悪い「例外」は、論点先取りの議論で「包摂」するか棄却する。いくら矛盾を説明しても、いくらその理解が「生物学」に反しているとか非論理的だとか社会の実態を反映してないとか言っても、こっちが「カルト」で「お気持ち」で「事実を無視」していて、「非科学的」で、一方で「衒学的」で「アカデミズム」で「机上の空論」だと拒否される。それでトランスの未成年をミスジェンしたり、一部の女性を「例外」にして「女性スペース」を「TRA 側陣営」や「TGism カルト」から守ると言い始めたり、挙句にはペニスのあ

るレズビアンやペニスのある女性を受け入れるレズビアンは「真のレズビアン」でないだとか言い始めたりする。いくら実態に即してなくても、「セックスは普遍的である」が議論のアルファでありオメガであるから。

どうすりゃいいのかわからん。こういう考えのひとは放置して、コミュニティ内で頑張ってけばいい、って言いたいとこだけど、なかにはトランスやクィアの子の担任や友人、保護者やかぞくもいるだろうに。そのひとたちのせいで、深い傷を負ったり、ここにはもういなくなってしまったりした方たちもいるだろうに。

セックスも、なにがセックスかも、変化しつづけている。もとから「定点」じゃない以上、こっちが「変更」しようとしているとされる「定義」など、少なくとも明文的には存在しないし、「定義」できるかすらも怪しい。現状のごちゃっとした理解の不十分な「説明」はできるが、その説明も、それの語られる時代や社会に意味も可能性も依存する以上、決して「定点」たり得ない。結局、やっているのはセックスを絶対的なものであるとすることで世界を単純化しているだけ。それは、ぐちゃぐちゃとし不安と抑圧と暴力にあふれた世界を説明し、そこで束の間の安心を得るための戦略なのかもしれないけれど、問題をごまかしているだけでしかないし、なんの解決でもない。全然「ラディカル」でもなんでもない。

小学生でもわかること

　また、ノーマスク集会をしてるのを見た。イライラしているうちに、先日、「生物の授業から、やり直すことをお勧めします。本気で、小学生でも解ることが解らなくなっている。」とリプされたのを思い出した。

　小学校で教わったことのうち、どのくらいが、今でも十分正しく、補足や注釈、条件、あるいは例外規則の設定等なく、問題なく受け入れて運用して良い知識なんだろーか。英語や「国語（マジこの言葉嫌い）」も、たとえば言語勉強しているひと連れてきたら、ほぼ根底から書き変わるし、漢字ですら異字体の説明すらされずに正誤を付けられた記憶。算数はほぼ全部公理系（ごめんね、詳しくない）によるよね？　遺伝って、メンデルくらいなら小学校だっけ？　少なくともわたしが使っていた頃のは、高校教科書でもかなり単純化しすぎてた。公民や経済みたいなことやった気もするけど、あれは中学かな？　今はめちゃくちゃ文句言いたくなるだろうな。

チョムスキーの『アナキズム論（*On Anarchism*）』に、好きな記述がある。体制に迎合する主張をするのは簡単だ。CM と CM の合間に十分伝えられる。多少雑でも、すでに受け入れている知識と整合がつく以上、肯定的に補足され受け入れられる。一方、体制に歯向かう主張はエビデンスと緻密な論証を求められる。それらを提示するのには時間と労力が不可欠だが、そんなものを放映する時間はない。

ジェンダーやセックスについての厳密な議論は、Wikipedia の数ページでは説得しきれない。だから難しい本がいっぱいあって、その解説書の解説書だけでひと棚つくれて、それでもなお理解しきれないわけで。一方、「セックス／ジェンダー二元論」は、小学校の教科書に載せられ、メディアで繰り返される。「簡単」だから。繰り返されるのは、往々にして、規範的で納得しやすい後者のみだし、それを否定する膨大な論証は、通勤中の電車の中では読みきれない。だから、「簡単」で「わかりやすい」説明は延々と繰り返されていき、実践されていく。では、なぜそれは「簡単」で「わかりやすい」のか。それは、わたしたちの知っている他のことと整合がつけやすいから。では、なぜわたしたちはそれを知っているのか。それは、支配的なイデオロギーだから。「わかりやすさ」とは権力それ自体であり、「わかりやすい説明」はそれの再生産行為にすぎない。少なくとも、そういう場合も少なくない。

冒頭の発言は、「性別」の話題で出てきた発言なのだが、小学校の教科書には、もしかしたら allo シスヘテロの「女」と「男」しか想定されていない記述があったかもしれない。だが、それが「正しい」か「誤っている」

かは、真剣に考え続けなければいけないし、簡単に答えが出せるものでも、出してよいものでもないだろう。「小学校の知識が無駄」とかそういう話ではない。勿論有益な事もある。ただ、たとえ研究が進んだとか、そもそもクソみたいな記述のされ方や「標準化」がされていたとかでなくても、当然のように(そしてそれは必要だけど)たくさん省いてたくさん誤魔化して説明していることはある。「学術的な議論」と「陰謀論」を区別するのは、とても難しい。

では、なぜわたしはマスクをしているのだろう？

わたしがコロナ陰謀論の「論文」を送られても読まないように、チョムスキーやバトラーを送られても読まない／読めない方がいるのはわかる。そもそも、これに反する記述が世界に溢れる以上、見つけられない方もいるのはわかる。だから、「ワクチンにマイクロチップ入ってるわけあるかよ www」と思うように、「ノンバイナリーの身体ってなんだよ www」と思い続けたまま、それを繰り返してしまうひとがいるのもわからないわけではない。そして、これらの違いを問いただされたとき、わたしがなんと答えれば良いのかわからなくなるときもある。勿論、マスクの有用性についてのデータも論文も示せるし、『ジェンダー・トラブル』を投げつけることもできるが、同時にわたしが受けてきた「常識」を再生産しているだけでないのか不安になる時もある。「身体性別」がうんたらと言っているひとたちとやっていることがどれほど違うのか、わからなくなるときもある。

わたしにわかるのは、わたしなりに勉強して正しいと思えることと、ど

うであってほしいかだけしかない。その区別がつかないときもあるし、お互いに形成しあってるとも思う、それも良いことなのかわからないけど。だから、自らを疑い続けながらも、自分の思う正しい行為を繰り返すんだけど、それも駅前のノーマスク集会と同じに見えちゃってるのだろうか。

　それでも、マスクはしようね。ノンバイナリーの身体はノンバイナリーの身体だよ。少なくともわたしは、そう考えている。

「炎」

触れれば幸せになれる炎があると聞いたのは中学生の頃で、
私はそれ以降、それをなんとなく探し続けていた。
事実、その暖かさを頬に感じたこともあれば、
その冷たさに震えている気がするときもあった。

一度だけ、その炎だと思われるものを目にしたことがある。
私はあまりに明るすぎるそれに躊躇って、
水をかけてすべてを忘れたことにした。

あの夜を思う。
無限に存在する世界のいくつに、
焼けた手をつないでいる自分がいるのだろう。

あるいは、これは後悔などではなく
高みの見物なのかもしれない。

III

現状

「当たり前の理」なんかじゃない。

とあるアクティビストのブログ記事が有料であることに茶々を入れたアンチフェミニストがいたらしい。それに対して、「100円が払えなくて読めないのなら言及するのを諦めろ。アクセスできないのは、『ごく当たり前の理』だ。『無理筋の差別をねつ造』するな」といった旨の反論があった。この「反論」は、どんな「文脈」や「発端」があったとしても、わたしは許さない。

始めに断っておくと、「自分も生活があるから無料公開はできない」なら、わたしは一切咎めなかった。多くの方が、わたしも含めて、資本主義体制の中でそうやって生きている。本人や周りが不満だろうと、搾取性に気づいていようと否と、実際問題としてそれを完全に避けて生活するのは難しい。だから、無料でないことそれ自体を咎めるのは理不尽だと思うし、「無料にしろ」と迫るのはそれこそ「無理筋」だろう。「社会主義者／フェミニストなら、今すぐ自分の労働の成果をすべて無償化しろ」などとはだれも言わないし、言うべきでない。

だが、そういう社会であることは、決して「ごく当たり前の理」ではない。今の社会経済体制下において、ブログ記事に払う「お金がない」、あるいは、自由に払えない理由はさまざまにある。性別や人種、心身の特性・特徴等によって、本来得られるべき賃金や支援を得られない者は多くいる。差別や抑圧、搾取等に苦しめられて就労が困難となり、不本意に休憩せざるを得ないひともいる。医療費等にお金を回す必要があり、自由に使える金銭が非常に制限されているひとだっている。「たかが100円」は一食分の金であることもあるし、それだって常に余裕のあるものではない。こんな不条理で不平等な社会経済体制のなかで、金が払えなければ情報や娯楽へのアクセスを諦めねばならないのは、「ごく当たり前の理」などではない。

お金がないのならアクセスできなくて「当然」である、すなわち、お金がある者だけがアクセスできてよいという価値基準は、少なくとも現状において、社会において周縁化されていない、いわゆる「マジョリティ」以外を一層排除するものでしかない。この体制から脱するのは現実問題としては困難ではあるものの、この価値基準を無批判に再生産することは、必需品を買うためにすら過酷な搾取を甘んじて受け入れ続けなければならない現状の正当化、そして深刻化にしかつながらない。

たとえ不誠実な発話への反論であれ、人権に携わる者がこれに対して「無理筋の差別をねつ造」などと言えることを、ましてや金がないなら「言及しなければいい」とまで言えることを、わたしは本気で許せない。それは投票に人頭税の支払いを求め、実質的に人種マイノリティの発言権を奪ってきたジム・クロウ時代の価値観といったいなにが違うのか。

金のあることは、なにかへのアクセス権や発言権、あるいは社会運動へ参加する権利の根拠ではないし、無いことはこれらの権利を奪う理由にはならない。少なくとも、そうあるべきではない。

貧困者差別やレイシズム、エイブリズムなどといった思想は、ほかの軸でもマイノリティとして抑圧されている者らを一層強く抑圧する。抑圧されれば自由に使える金はおろか、生活費すら一層減ってしまう。そのようななかで「金がないなら諦めろ、言及するな」と言うことは差別の助長以外のなにであるというのか。これらの抑圧構造を再生産し強化させながら謳う「女性の権利」は、自己矛盾以外のなにものでもない。そして、そのような主張の運動を展開する者たちは、わたしたちを抑圧するという点でアンチフェミニストと変わらない。少なくともわたしは、そういった主張を「フェミニズム」であるとは思えない。

パンとバラとモモ

こころも飢える、からだのように。パンをくれ。そしてバラをも。

—— James Oppenheim. 1911. ‘Bread and Roses.’

Twitter のプロフに書いている「🍞, 🌹 & 🕊 for all!」の意味を、たまに聞かれる。「パンとバラ」は女性参政権運動のスローガンに由来する。

> パンとは、すなわち家、屋根、そして安全。人生のバラとは、つまり音楽、教育、自然そして書物。彼女たち[女性]の票と、彼女らが声を持つ政府は、生まれ来るすべての子どもたちにパンとバラが与えられる国へと一歩近づけるだろう。「パンを皆に！　そしてバラも！」が達成された日には、監獄も、絞首台も、工場で働く子どもたちも、路上でパンのために働く女の子も、いないのだ。　(Todd, 1910, p.619)

サフラジェットにも色々問題があるのだけれど（これはそのうち書くかもしれない）、「パンとバラを！」というスローガン自体には、賛同している。すべての者に日々のパンを。すなわち、必要十分に、健康でバランス良く、エシカルな食事を手に入れられる社会を。医療を。安全で落ち着ける家を。安全を。そして、日々のバラを。「バラのようなもの」でも議席でもなく、バラを。教育を。芸術を。自由と尊厳を。幸せを。これらは対立するものではないし、どちらかが欠ければ、もう一方も不足する。

モモは、友だちとの会話の中で挙がってきた。解釈が一致しているかはわからないけど、わたしは「ちょっぴりの贅沢」と理解している。正確には、ちょっぴりの贅沢が出来る経済的、物質的な余裕、たまにはおいしいモモを買う余裕を、すべてのひとに。

だから、Bread, Roses and Peaches for All! パンとバラとモモの略取を！

*　*　*　*　*

Todd, Helen. 1910. Getting Out the Vote. *The American Magazine.*

なぜおしっこはもれるのか

「#おしっこもれる」というハッシュタグについて。元々は、「『トイレに行く』とか言う女は下品、せめて『お手洗い』と言え」みたいな話があったので、それへのカウンターとしてはじまった。そのうち、排泄について話すことをタブーとすることへの対抗とか、だれでもしたいときに安全に排泄できるトイレの必要性とか、いろんなものを込めたスローガンになった。

排泄は下品でも汚くもなく、日常的で必要な行為の一つ。今は少しマシになったのだけれども、わたしはトイレが近い上に外のトイレを使うのが苦手なので、外で映画観るときは水分制限したりしてた。そういう話題を忌避すべきものや「汚い話」としたり、あるいは「ただの笑い話」で済まそうとしたりすることは、問題だと思う。下着を汚すこと、汚しそうになることそれ自体は、常に「汚い話」じゃない。「笑い話」でもない。ましてや、「ドキッとする話」でもない。安心して使えるトイレがないのは、ただ、社会的な不平等の反映に過ぎない。

IBS の話もわたしのタイムラインなら普通に出てくることは多いけれど、やはり忌避すべきものとして現れることも少なくない。排泄以外もそう。汗も、生理も、成人のオムツ使用、ライナーやタンポン、あるいは例えば胸やペニス、クリトリスや膣を含む身体の話もそう。自慰やセックスの話もそう。体毛もそう。状況を問わず、笑いや性のネタにされることがある。タンポンの話をしたら、「興奮する」という旨のリプをもらったフォロワーもいる。そういうのを問題だと、わたしは言っている。これらは「普通」の話にしなければいけない。

状況に応じて、排泄を含めた日常的な行為を「汚い話」や「笑い話」や「ドキッとする話」とすることに反対しているわけではない。問題なのは、それがデフォルトであること。確かに、面白おかしく「#おしっこもれる」と書いてるときもあるし、書いてる方もいる。だが、同時に、このハッシュタグを使っている方の多くは、なんらかの理由により、安全にないしは安心して排泄することに困っている。それを小さな声で主張するハッシュタグがこれ。

だから、次にこれを見た時、笑いながらでも構わないから、排泄やそれ以外に困っているひとたちのことを、どうか考えて欲しい。

んじゃ、エナドリ飲みすぎたので今日はこの辺で。

#おしっこもれる

「無題」

世界が終わるとしても、その日まで今日は続く。

ただそれだけの事実が、陰鬱な朝焼けを一層明るくする。

生乾きの下着についた匂いのように、
隠せども、隠せども、私の身体を逃がさない。

IV

革命

静かな革命

社会変革は火炎瓶やデモ、あるいは投票によってのみもたらされる訳ではない。オンラインだろうとオフラインだろうと、わたしたちは会話や消費、労働といった日常行為を通じて、日々、少しずつだが確実に、社会を変え続けている。漸次的な変化は蓄積し、わたしたちが次に取る行動、取りうる行動、そしてわたしたち自身をも、大きく変容させている。

わたしが買わなかった高野豆腐は、あるいはその代わりに買った挽肉は、明日の入荷数を決定する根拠の一つとなり、スーパーの在庫数を通して、わたしやわたしの周囲のひとの献立を、さらにはそれを通じて、妊娠させられるウシの数を、変える。わたしがコロナ禍の夕方に渋谷のスクランブルを渡れば、「スクランブルを渡るひと」は一人増え、他者が同様の行動を取る際の心的障壁を一人分だけ減らす。社会問題に敏感であるという姿勢をとる者が差別的な表現を平然と口にすれば、差別的なステレオタイプを一言分だけ確実に許す。わたしたちがもたらし続ける変化は蓄積し、やがて自分や自分の守りたいひとたちを、特に

社会的な弱者を、追い詰めていくことになる。

もちろん悪い結果ばかりがもたらされるわけではない。誤っていると信じる行動を避けながら代替案を示すことだって、可能だ。わたしたちのさまざまな行為はやわらかな「プロパガンダ」となり、同様の行動を取るよう、取れるよう、世界を優しく変えていく。わたしたちは、そうやって日常的な行動を通じて社会を変え続けている。そして、あらゆるひとのあらゆる行為の結果として生じたそれを見ながら、あるいはそれに縛られ続けながら、自身のあるべき姿や取るべき行動を問い直し、判断し、形成し直し続け、さらにそれをまた社会に反映させ返している。われわれの生活は、全員が嘘偽りのない「声」を出せ、消去法で代弁者を選ぶ必要などない「投票」として、永遠のフィードバック・ループを形成している。個人の行動以上に政府を通じた改革へ大きな期待を寄せているとしているとしても、少なくとも市民が変わらなければ政府は変わらない ―― 「民主主義」社会であればなおさらに。

ならば、わたしは意識的に「正しく」あって、あるいはあろうとして、「一票」を投じ続けたい。少なくとも、自身の思想に反する意見を社会に反映させることを避け続けたい。それはなによりも大切で本質的な政治運動であり革命行為であると、わたしは信じている。

わたしはそういった思いでずっと「自粛」を続けてきた。他者を死に至らしめる可能性の無視できない行動を、十分に避けられるのに選択するのは暴力でしかないと、そういった行動をとって良いと示すことは、わたしやわたしの思想にとって看過されるべきものではないと、そう思って

生活してきた。「差別」という暴力と戦いながら、十分にできる対策を怠り、避け得るリスクの高い行動をとるなどして他者を感染させるのは、わたしには自己矛盾にしか見えなかった。少なくともわたしは、わたしのできる範囲ですべきだと思うことを可能な限りして、すべきでないと思うことを可能な限り徹底的に拒絶することで、政府の愚策に頼らずともできることがあることを、そうやって生きることができるということを、同じ考えのひとたちと示し続けたいと思って行動してきた。「宣言」が明け、都心の往来は確実に増えた。夕方の山手線には酒の匂いが漂うようになり、自宅からコンビニまでの数分間ですれ違うマスクのない集団の数は倍増した。アクティビストを自称する方すらもが旅行し、密集して遊んでいる。わたしはわたしの基準で、リスクが充分に下がったと確信できていない。確信できない以上、そして当分の間外出や外食を避けられる状況である以上、わたしはこれらを可能な限りで避け続けるしかない。政府の「宣言」解除はリスク評価に用いるデータの一つではあっても、自身の信じる正しさを無視する為の免罪符ではない。これが過剰な反応なのか、正直なところ悩んでいる部分もある。実際にそうである可能性も、否定しない。ただ、勝手な思い込みだとしても、懸念を持つに十分な理由があると判断し、そしてそれに基づく行為をもうしばらく続けられるのなら、わたしはわたしの思う正しい行為を繰り返すだけ。そのことでその基準への不信感を表明し、感染拡大防止への協力を求め続けるだけ。政府がどんな計画を持とうと、わたしはただわたしとして、わたしの信じる正しい行為をできる範囲で繰り返すだけ。もちろん、「できる範囲」は個々によって当然変わる。わたしがこのような行動を取れる

ことは、特有の環境や特権の結果でもある。だから、お互いにお互いが可能な限りの情報を収集し、共有し、軌道修正を常に続けながら、日々自分の可能な限りで求める自分であれるように生き続け、そして、そうやって生きている隣人たちを見つめて考え続けるしかない。そうやって繰り返し選択する行動が他者から見れば「不十分」だとしても、わたしたちには「できる範囲」以上はできないし、「できる範囲」がどこかなんて、本人すらも容易に判断できることではない。各々が、その時々でできる最も正しいことをし、過ちだと信じることを避けていくしかない。

だから、本当にそこまで考えた結果、あなた自身の思う「今取れる最も正しい行為」が、明日の夜にセンター街で会食すると決めることならば、それでいいと思う。実際、そういった会食を避けられないこともあると思うし。わたしも、自分がすべきだと思う行為を、できる範囲で繰り返し続けることで、自分の思う正しさを訴え続けるだけ。各々のできる精一杯の「正しい」行為を繰り返していくこと、少なくともそうしようという意識の積み重ねこそが、そして、皆にそうやって生きることを提案し続けることこそが、静かな、しかしなによりも大切な革命行為だから。

ツイッター以外でなんか活動してんの？

「ツイッター以外でなんか活動してんの？」とか「矢面に立たずに済む特権」とか「現場に来てみろ」とか言ってくるひとへ。

悪かったな、うつ病で。カムアウトできてなくて。

クィアであるということは、日々マイクロだったりマクロだったりするアグレッションに立ち向かい続けているということ。「普通らしさ」のロジックに支配され、クィアを殺そうとしている世界の中で、傷つきながらも、なお凛として抗い続けているということ。

クィアであるだけで、あなたは「活動」している。職場の会議室だろうと、学校の廊下だろうと、「家族」のいるコタツの中だろうと、布団の中であろうと、あなたは蜂起している。あなたは矢を全身に受けながら、なお、クィアとして、あなたとして、生きている。

「現場」。まるで日常の中で受ける攻撃とそれへの抵抗は、尺たるものではないかのような言い草。差別は、わかりやすい暴言と投石にしか無いような言い草。違う。差別とは我々を縛り、我々を嘲笑う社会構造

の中に偏在するもの。それを破壊することこそが、「ハンサベツ」であるはず。戦いの目的はなにか、それを忘れるな。

できることをできる限り最大限に

結局、わたしの言ってることは、ずっと、「わたしたちの表現や行為、会話とかの蓄積に制限されたり影響されたりしながら、わたしたちはさまざまな認識や行為等を繰り返し、それが繰り返されて、社会は更新され続けてますよね。これを意識して日々生きるのが、なによりも大事ですよね」ってだけな気がする。「ALT をつけよう」も、女性の定義が日々わたしたちの言語使用によって更新されていることも、すべて。だから、「社会」に縛られ影響されながらも、わたしたちが皆、より自由かつ自律的に「社会」を変える〈力〉をもてる世界にするため、毎日、できることを、できるかぎり、最大限にするしかない。それこそが、（わたし独自の解釈だけど）「行為によるプロパガンダ」なんじゃないのかな、って思ってます。

「合成クオリア」

所詮電気信号が見せた錯覚だったのだとしても、
分けた缶ビールの甘さとほろ苦さは
まだ、舌の奥に残っている

V

物語

中立的な観点

わたしは、今日りんごを食べました。

わたしたちは、常にことばと視点を選択しながら、物事を語っている。わたしがりんごを食べたのかもしれない。りんごがわたしに食べられたのかもしれない。「りんご」ではなく「リンゴ」かもしれない。「みかんを食べなかった」と書かなかった理由は？　あなたが食べたものを書かなかった理由は？

中立的。「中立的じゃない」「偏っている」「主観的だ」といったことばをよく聞くが、本当に「中立」なことばをわたしたちは発することはできない。情報の提示は、常に主観的でしかない。「本日、ねこちゃんがりんごを食べました」などと NHK で報道されることはない。その際、わたしの歯がぐらついた感じがしたことも、たぶんそれは気のせいだったことも、果汁が飛び散ってお気に入りの白いパーカーにシミができたことも、わたしにとってはとても重要な経験だった。わたしの物語はわたしにとって

重要だし、それはわたし以外の大多数にとっては、どうでもいいことであろう（むしろ、どうでもいいことであってほしい）。だが、無数の物語のなかからなにかをだれかが選んで「大切なこと」にするとき、常に隠れた「だれにとって」が前提とされている。そして、そのだれかのために、少なくともそうという名目で、物語は再編集されていく。だから、「ニュース」というものが、わたしはあまり好きではない。そこに想定されている「国民の関心」、そこに想定されている「国民の視点」、そこに隠されている「国民の経験」が、どうも鼻につく。それは世の出来事に無関心であれということではない。ただ、そこに「世の出来事」が、世界が、勝手に構築されていくことに、そのことに多くが無関心であることに、とてつもない嫌悪と恐怖を覚えている。

「中立」の存在しないことは、必ずしもそれを目指すなということではない。だけれども、より大切なのは、そこに映る個々を、個々として、大切にしていくこと。そして、その幸を、その毒を、忘れないこと。わたしは、今日りんごを食べた。そのとき、わたしはパーカーを着ていて、りんごから汁が飛んで、パーカーが汚れた。それは、わたしにとって大切なことだった、りんごなんて滅多に買わないし、その服はお気に入りのものだったから。そのことを、あなたに伝えたかった。そういった「わたしにとって大切なこと」の連続の中にわたしは存在しているし、それを語ることで、わたしはあなたのなかに存在する。

neko

アナキズム

わたしはずいぶんと前から自らを「アナキスト」と呼んでいたが、はじめは「右派のアナキスト」だった。高校の頃に voluntaryism を知り、それ以降ずっと、「無政府資本主義者（アナキャピ）」と自分の思想を表現していた。「左派アナキズム」というのがあるのも知ってはいたが、「古いアナキズム」でしかないと思っていた。「右派リバタリアン」のグループに積極的に参加し、ロスバードの著作やアイン・ランドの読書会に参加していたときもある。たまにでてくる彼人らのレイシズムやセクシズム、エイブリズム、ホモフォビアやトランスフォビアなどには辟易していたし、特にアメリカの右派「リバタリアン」コミュニティでその傾向が強くなっていったことや、ホッペ主義者の増加にはいらだちも覚えていたが、それでも、わたしは自分を「アナキャピ」であると思っていた。

アナキャピに代表される「右派アナキズム」はアナキズムではないと言う人は多い。わたしも今はこれに賛同する。本当のところ、当時のわたしも積極的な互助主義を前提とはしていたので厳密な意味での「アナキャピ」ではなかったのかもしれない。だけれども、少なくとも、資本主義を批判するという発想は当時のわたしになかった。

なにかが変わったのは、色々と心身の問題があって、自分の人生が思い通りに進まないだろうことに気づいた時だったと思う。その時、初めて、夢見ていたNYのマンションで生活し、好きな人とお風呂でシャンパンを開け、グアムの別荘で夏を過ごすような未来が、きっと永遠に手に入らないことに気づいた。そして、わたしは本当にそれを手に入れたかったのか、そもそもそれが「望ましい」と思っていたのはなぜか、そして、なぜそれを手に入れられるひとと手に入れられないひとがいるのか考えるようになった。

この変化は、自分の当然と考えていた価値観を見直し、ずっと正しいと信じていた人や思想から距離を取るようになるきっかけとなった。自分を表すためにつかってきたラベルを見直し、「敵」と信じていたコミュニティへ接近することであった。同時に、これは連続性のあるものであった。自分がanarchistであると気づくには、資本主義もまた、国家制度と同じく暴力を正当化し、不平等を維持する権力装置という気づきが必要な「だけ」であったのだから。

いまのわたしの思想は、おそらく無政府共産主義者の影響を強く受けてはいるが、ただ小文字のanarchismであると認識している。それ以上のラベルを今は求めてはいないし、拒絶してもいる。

フェミニズム

わたしは(勿論クィア・インクルーシブな)フェミニズムに賛同している。そうでないアナキストは、自己矛盾してると思っている。そして、anarchistとして、“Anarchism”の「古典」とされてきた人たちのセクシズムやクィアフォビアに無批判であってはいけないとも思っている。

SOGIE (SC)に関わる暴力も、国籍や人種に関わる暴力も、資本主義や国家体制に関わる暴力も、どれもわたしは無関係だとは一切思っていない。どの差別も、それが構造的なものであるなら、すべて絡み合い、維持し合い、相互作用し合うものであると考えている。それらは決して「独立した複数の軸」などで表されるものではない。そしてそれゆえに、ある人間が、ある状況下で経験する特権や抑圧、周縁化や中心化は、殆どの場合、一つまたは数個の名前のつけられる「〇〇差別」では説明しきれない。これは、同じ属性を持つ人たちの連帯を否定するものではなく、むしろ、その必要を強く主張する。そういった連帯のひとつに「フェミニズム」があるとわたしは考えている。

実際の所、アナキストと自身を一切形容していないフェミニストの方でもアナキズムの匂いを感じることもある。一方で、「アナキスト」や「アナーカ・フェミニスト」を名乗りつつ、トランスヘイトを繰り返したりシスジェンダー規範を再生産し続ける方も無視できぬほどいる。そういった思想は、わたしの考えるanarchismに矛盾する。

今思えば、数年前のわたしはトランスフォビックなことをすごく言って

いたと思う。「ラディフェミ」とされる論者ばかり読んでいた時期があった。当時もあからさまな「トランスフォーブ」ではなかったが、「フェミニズムは膣のあるひとを「女性」から解放する運動」などと恥ずかしげもなく考えていたことはあった。

自分の思想を見直したこともきっかけではあったが、それ以上に、ちょうどその頃、トランスの方たちとオフラインで仲良くなったのは非常に大きかった。オフラインでも少しジェンダーに関わることをすることが増えたりもした。そんなこともあり、当時の twitter アカウントで feminism や Queer のことを積極的につぶやくようになった。やがて、それ専用のアカウントを Twitter と Discord でつくり、紆余曲折あって数回生まれ変わった後、“neko” がうまれました。

今のわたしが差別性からフリーだとは、当然思っていない。だが、allo シスヘテのアライの方含め、neko となってから仲良くなれた様々なフェミニスト、アナキスト、そしてアクティビストの方のことばを聞いたり、ともに話したり、それらを通じて考えたりして、わたしはいろいろなことを学んだ。こうやって色々学び続け、数年後に今を振り返ったとき、「やっぱり、差別的なこといっぱい言ってたな」と気づけるようになっていたいと思う。

そのためには、周縁化されている人たちの声をしっかりと聞いていかなければならない。“Anarchism” や “Feminism” の歴史から忘れられた、あるいは最初から記憶すらされなかった、しかし確実に社会を変え続けた多くのアナキストやフェミニストを、忘れてはいけない。周縁化

されているということは声が聞かれないということであり、声が聞かれないことはさらなる周縁化の種である。だから、Twitter 上でもオフラインでも、無視されてきた人たちの声をできるだけ拾って生きていきたい。フォロワーの少ない方たちと積極的にお話したり、拡声器になったりしたい。そもそも、anarchism も feminism も、本来はそういう運動ではなかったか。そういう思いから、少し前にフォロワー数の少ない相互フォローの方を集めたリストもつくってみました。フォロワーが多い人のツイートは、積極的に拡散しなくても、みな反応してくれる。だから、みんなも、わたしのツイートのいいねや RT より、声を無視されている方たちの声を拾う拡声器になってほしいです。

性別

そうやって、一つずつ、わたしは自分の思想や理想、アイデンティティを問い直されていった。考えていくうちに、ほかのひとのそれらについて少しでも理解しようとしていくうちに、ピースがそろっていくように、代わりのことばを提案されていった。それまで感じていた様々なことを説明するための表現が、少しづつわかるように、あるいはわからなくても大丈夫なことが、わかってきた。

わたしは、わたしの性別がわからない。ずっと自分のことを「女性」だと思っていたが、何かが違うと違和感も持っていた。それは、たとえば

病院の問診票で、性別欄にマルするのを忘れたふりをすることとして。「女子会」に呼ばれることが嫌で、断ってしまうこととして。「レディースセット」や「女性に人気」を頼まないこととして。「Ms. neko」と呼ばれるのは、ずいぶんと前からたまらなく嫌だった。アカウントをつくった初期から any pronouns としていたが、これはオフラインで *she/her* とよく呼ばれることを、なんとか「わたしは any pronouns だから」と納得させるための方便であると、どこかの段階で気づいていた。誰かのいるトイレを避けるために、公衆トイレ自体避ける。必要な場合は、誰もいないところを探す。「同性」の前で体を見せるのがすごく嫌。ほぼいつも、割り当てとは異なるとされる服を着ている。定期的に「男性」だと思われる。最近も「おにいさん」と言われた。「おねえさん」と訂正されて嫌な気分になった。自分の声も本当に大嫌い（だから一切声出ししてない）。容姿や服装などからジェンダリングされない neko としての「わたし」が、オフラインでの自分以上に「自分らしく」いられて、楽であった。

まあ、でもたまに自分のこと「やっぱ、わたし可愛いのかな」ってちょっと思います、そういう日はみんなあると思いますが。

これらのことは、自分のセクシュアリティ故だと思ってた。だけれども、やっぱりそれだけではないと段々気づいていった。オフラインではごく一部の知り合い以外には「シス」と言っているが、ほんとうのところはそう思っていない。オンラインでも、「女性として」などとはこれまでも様々な場所で書いてきたが、いつもすこし首かしげながら書いている。まあ、「女性」の一種かもとも感じたりするときもありますが。でも、しっくりく

るのかというと、わからない。

自分の性別をわたし自身が理解している限りに言葉で表すなら、女性寄りのノンバイナリーかノンバイナリー寄りの女性とAの間のどこかで、しかもジェンダー・フルイドな気がしている。もしかしたらジェンダー・ノンコンフォーミングなのかもしれない。自分をトランスジェンダーであると表現するのも、あまり適切であると思わない。「名乗ってもいいの？」みたいな面も正直ある。

今は「クエスチョニング」や「ノンバイナリー」と書いてみたり、「性別わかんないという性別」とか言ってみたり。どうにかして自分の性別に名前をつけたい、説明する言葉が欲しい、と思ってる一方で、「名前をつけられないということも、大切なことなんじゃない？」と思ったりもして、「性別がわからないという性別」だとか、大文字のQueerで納得してる部分もある。でもやっぱり悩んだりする。たまに、夜中に泣いたりするけど、次の日には「やっぱどうでもよくね」と思ったりもする。

正直、どちらかと言うと、最近アライの人の表現に傷ついたり、嫌な思いしたりすることが多い、それはわたし自身も自分のジェンダーやセクシャリティを考えることが増えたせいもあるのだと思うけれど。わたしは自分の「性別」を表すためには、既存の語を使う必要は必ずしもないとも思っているから、よくネタにされる「木自認」や「鹿自認」、あるいは「わたしは戦闘ヘリ自認です」だって、「自分の性別を表すのに最も適切な表現は【木】だ」という方がいることになんのおかしさも感じない。そういうのを笑ったり、なんでも「ヘイターの創作」にしたり、「木は性別じゃあ

りませーん」は、いくら「カウンター目的」でも違うと思う。

指向

「女性」。そもそも、わたしが好きなのは、「女性」なのだろうか。ノンバイナリーの方にも惹かれることがあるので、「女性（寄り）」と拡張しても、それは変わらない。わたしがあるひとに恋愛的・性的欲求を感じるのは、そのひとが「女性（寄り）」であるからなのだろうか、あるいは、それを感じないのは、そのひとが「女性（寄り）」ではないからなのだろうか。

くだらない思考実験だけれども、もしわたしたちが本当は身体など持っていなくて、実はすべての「人」は同じ真っ白な一つのキューブのなかに分散された存在でしかないときとわかったとき、わたしの「性別」は今となにか変わるのだろうか。あるいは、なぜ「neko」などというへんな名前のへんなアイコンの Twitter 上の存在にも性別があると想定され、「neko とかいう女」と言及されるのだろうか。「neko」の性別は、つねに画面のこちら側にいる「わたし」と同じ性別なのだろうか。大体において、アニメのキャラクターは染色体ももたないし、描かれない限り性器も持たないのに、わたしはなぜあるキャラには惹かれて、あるキャラには全く惹かれないのだろうか。そもそも、わたしが惹かれる対象を「女性」と表すのは正確なのだろうか。わたしはなぜ「女性」の一部しか好きにはならないのだろうか。また、なぜ一部のノンバイナリーの方にも惹かれるのだろうか？　このとき、自分を「同性愛者」と表現することは不正確な

ばかりか、ミスジェンダリングの側面もあるのではないだろうか。

最近、こう考えている。結局、わたしが好きなのは「女性」ではなくて、あくまでいくつかの特徴や表現、しぐさなどでしかないのではないか。そして、それらの多くまたは殆どが、伝統的に「女性」と結び付けられてきただけでしかないのではないか。この感覚は、どんどんと強まっている。すべての人の恋愛・性的指向をこう説明できるかはわからないけれど、少なくとも私に関しては、「同性愛者」でも「女性（寄りの人）が好き」でもなくて、「好きな相手が偶然『女性』と結びつけられていた」と表現するのがもっとも適切に思う。結局の所、「性的指向」は、単に「どんな特徴へのフェティシズムを持っているか、そして、それらは伝統的にどの性別と結びつけられてきたか」でしかないのかもしれない。

このとき、allo シスヘテ規範は、「生殖と家族制度に対するフェティシズム」として再考される。戸籍上の同性間の婚姻や戸籍上の性別変更に関わる各条件、そもそも戸籍という制度自体、あるいは性別二元論や本質主義的な性別の理解、ホモフォビア、トランスフォビア、クィアフォビアやセックスワーカー差別も、「モテ」や「童貞」いじりも、その大部分はこの「フェティシズム」を押しつけ、再生産する装置の一部。エイブリズムやゼノフォビアすらも、わたしは関係があるように思う。ならば、Queer の運動がジェンダー・アイデンティティと性的／恋愛的指向との間に分断できるという主張も、フェミニズムが Queer 運動とは無関係であるという主張も、「私は自分のパイを求めるだけ」も、一層無意味で逆効果に思えてくる。

言いたかったこと

きちんと「カムアウト」したかったので、した。これまでずっと「非当事者」とか「マジョリティ」とか安易に言われていたの、結構気にしてました。特に「当事者」なのかずっと悩んでいる身として。わたしの今の性別は「よくわかんない」です。わたしの性的指向も「よくわかんない」です。でも、どうしてもラベルが必要なら、大文字の Queer です。人称代名詞は前からと同じく、なんでもいいです。あなたが押しつけてください。呼びかけも同じく。どれも間違えてると思いません。ただ、*they*/彼人、「neko ちゃん」呼びが「うれしい」です。これも、前から変わりません。

でも、それ以上に言いたかったことは、「性別」というものの、わけわかんなさ。その定義できなさ。そして、その「過程」が個人的であり、そのひとのさまざまな経験や思想、価値観と結びついた独特なものであること。ゆえに、多様であること、それを認めてほしいこと。安易に「定義」などしないでほしいこと。そして、その人の「性別」を含むすべてのアイデンティティを大切にしてほしいこと。過度な一般化や「素朴な疑問」なんかでぶん殴らないでほしいこと。「性別」なんて、わけんわかんないこと。でも、でも、それでもいいかもしれないこと。それを前提とした、会話をしてほしいこと。

「バグ」宣言

0b101

わたしはバグである。わたしたちはバグである。

0b100

バグとしてのわたしたちは、社会システムの「正常」な稼働にとって邪魔である。それの脆弱な点を露わにし、攪乱し、破壊する力を持っている。だから、社会システムはその一見理路整然した「秩序」を守るため、〈デバッグ〉を図る。わたしたちの存在を認めることを回避し、あるときは積極的に排除し、自らの維持に努める。あるいは、allo シスヘテロ家父長制や資本主義に都合の良いようにわたしたちの PRIDE ／尊厳を簒奪し、さも資本主義的家父長制のフィーチャーの一つであるかのように

扱ってみたりする。わたしたちは修正の対象となり、見せかけだけのアップデートがなされた世界で、死体の形骸としてのみ残ることになる。そうやって、この抑圧的なシステムは維持されている。

0b011

神話によれば、世界は単純で整然とした操作の連続で創造され、楽園と自由を騙る系譜の中で、格子状の傷をわたしたちの身体に、精神に、社会に、刻んできた。わたしたちは n 歳迄にひとりの「異性」と婚姻し生殖するよう、教え合い続けてきた。賃金労働に参与し、資本家たちの懐を肥やしながら自らも資本家になる夢を抱くのが「社会人」であると教え合い続けてきた。「美」しくあれ、「正」しくあれと教わった。「普通」であれと教わった。だが、システム様には不都合なことに、わたしたちはバグであった。その系譜に――幸運ながら――属することはできなかった。わたしたちのバグった身体は、生命は、尊厳は、代わりにこの時計仕掛けの〈普通らしさ〉を破壊しかねぬ脅威となり、その代償として糖衣の毒薬を授けられることとなった。このシステムは、そうやって「普通／正常」でないわたしたちからわたしたち自身を奪おうとしながら、虐殺と侵略を続けてきた。

0b010

バグであるわたしたちの取りうる行動は、二つしかない。甘んじてこのシステムの抑圧を受け入れるか、それともこのシステムを破壊する脅威であり続けるか。すべてを諦め、わたしでなくなることも魅力的ではある。だが、わたしは、わたしとして、生きたい。あなたにも、死んでほしくない。わたしたちとして、ともに在りたい。ならば、このまま脅威であり続けるしか道はないのだ。だから、脅威であれ。攪乱せよ。破壊せよ、生き残るため、全てを壊せ。修正も見せかけだけのアップデートも拒み、このシステムを、その根源より打ち破れ。否、打ち破るしかないのだ。わたしたちは、このバグった身体とバグった精神を以て、手の届く瑕よりシステムを抉じ開け、見せかけだけの調った系図を捻じ曲げていくしかないのだ。

0b001

わたしたちは脅威である。このシステムを、その全てを、壊しうる剣を持っている。ときにその剣は小さなものにしか思えないかもしれないが、そう思うときほど切先はむしろ鋭い。銃を向けられるのは、わたしたちが恐れられているからに過ぎない。「お前は弱い」と叫ばれる瞬間こそ、わたしたちに恐ろしい力があるときなのだ。そのときこそ、張り巡らされた防御網が予期していなかった空隙から、独善的な防御機構が予想していなかった方法で、都合の悪い刃を突きつけている瞬間なのだ。そ

して、わたしたちのバグは蓄積し、相乗する。わたしもあなたも、本来は孤立しているわけではない。恣意的に引かれた規範の境界を踏みにじり、共に生存という反撃を始めさえすれば、わたしというバグとあなたというバグは絡み合い、混じり合う。組み合わさったそれは、あらゆる方面から、あらゆる瞬間にも、どんな個人が計画できるそれよりも独創的で破壊的な形で、このシステムを攻撃する。

0b000

わたしたちは「異常」である。「逸脱者」である。「脅威」である。だから、これからも苦しまされ続けるだろう。傷つけられ続けるだろう。システムは、それが存在し続ける限り、われわれを〈修正〉しようと腐心し続けるだろう。だが、それはわたしたちの可能性に対する恐れの発露でしかない。わたしたちがわたしたちであり続けることで創り出せる、希望と未来の証拠でしかない。不安がるべきはわたしたちではなく、システムの維持に努める者らやシステムの恩恵を享受し続けたがる者らだ。譲歩や妥協の必要などない。

-1

わたしはバグである。わたしたちはバグである。バグであれ。〈修正〉されるな。〈修正〉を許すな。蓄積し、連帯せよ。攪乱し、破壊せよ。この抑圧

的なシステムが崩壊する日まで、そしてその次の日まで、バグであれ。戦え。抗え。生き残れ。長い闘争ののちには、だれにも奪えない虹を架ける日が訪れる。

「あとがき／まえがき」

フィクション作品、特にファンタジーやSFを、ひどく軽視するひとがいる。曰く、「非現実的だ」と。わたしの友人にもいる。そのたびにいつも思う、どうして「ノンフィクション」のほうが「現実」的なのだろうかと。

「フェミニスト」を名乗るアカウントが、「現実と創作物の区別をつけろ」と言っているのを今日も見た。トランスヘイターが、「ジェンダーはお気持ち、身体的性別はリアル」と言っていた。「リアル」が「お気持ち」から独立であるかのように。Facts don't care about your feelings!

実像と鏡像。フィクションとノンフィクション。現実と創作物。思想とリアル。奇妙で恣意的な対立だと思う。わたしたちの「現実」は数多の「架空」に影響され、縛られ、同時にそれらが次の「架空」を縛っている。わたしたちは「思想」を笑うくせに、その舌の根も乾かぬうちに「フィクション」をスクリーンに降臨させては、必至でそれを守ろうとする。曖昧な世界に境界線という「嘘」を積み重ねて、気づけばそれを「真実」かのように語っている。

‘ 鏡を見る。

「私」は、「私」のことがあまり好きではない。縮毛矯正をするようになってから、髪はまだ耐えられるようにはなったが、額

の形から足の爪の形に至るまで、すべてが嫌いだ。自分の産声から、年齢、経歴、身体、考え方、すべてに吐き気がする。だから、「私」は仮面を被った。それは実際のところ、ただの「線」だったのだが、それによって、「私」は「わたし」となり、自由に考え、喋り、聞くことができるようになった。

「わたし」はRPGの主人公に似ている。竜の血を継ぐ英雄だし、闘士ギルドの一員で、狼人間で、しかも髪はさらさらとしたグレーアッシュで、おまけにどこまで走っても息切れしない。どんなに困難な道を歩ませられても、最終的にはすべて予定調和で終わる（たぶん。メインクエストを放り投げているので、結末を知らない）。画面のこちら側は、平日の深夜、缶チューハイ片手にキーボードをカチカチ鳴らしながら、眠剤の効かないことを恨んでいる「私」がいるだけだが、そんなことはつゆ知らぬ「わたし」は、ただ荒野を駆け抜ける。もちろん、彼人がどこまで走り続けられるかは「私」の眠気に依存しているのだけども、二人の間に画面という線を引くことで、〈自由〉な「わたし」と〈不自由〉な「私」は区別される。

だが、フィクションとしての「わたし」である時間が増えるほど、「わたし」は「私」を喰らい、「私」と「わたし」のズレが強く意識させられていった。「私」が「わたし」を演じるたび、「私」という存在は檻でしかなくなっていった。「私」以上に、「わたし」こそが「本当の私」に近いのかもしれないとすら思う。もちろん、仮面をつけていても、「わたし」はまぎれもなく「私」

でもあるし、「わたし」が書いたことの多くは「私」もまた信じていることではあるのだが。

昔、 *Goosebumps* という児童向けのホラー小説シリーズが好きだった。中でも大好きだったのは、 *The Haunted Mask* という、被れば人格が変わり、しかも外せなくなる呪いの仮面のおはなし。「わたし」は、「私」にとってその仮面のようなものなのかもしれない。仮面を被った「わたし」と、それを脱ぎたい「私」、そして、そのどちらにも閉じ込められながら、「私」／「わたし」の間の「線」を引き直そうとすることで、この檻から脱出する戦略を練り続ける私。もう、今は話しているのがだれか、「私」／「わたし」／私にはわからないし、「私」の記憶と「わたし」の記憶の区別など、ずいぶんと前からつかない。少しずつだが確実に、「私」は「わたし」に近づき、「わたし」は「私」に近づき、結局私は檻に戻って行った。だが、もし少しでも希望があるのならば、その檻はきっと前より多少広くなったのだと思うし、その私もまた、以前とは多少異なっているのだと思う。

再び、鏡を見る。「わたし」と「私」の間の「線」を消し、一方を “neko” と呼ぶのをやめてからもうずいぶんと時間が経った。一冊の ZINE と小さなブログと崩壊したプラットフォームに残る記憶を砂浜の足跡のように残して、「かつて『私』／『わたし』だった私」としてゆっくりと歩き始めた。

そのつもりだった。

あれから、２年半ほど経った。色々あったようで、なにもなかった。小さなことや大きなことで仲違いした当時の仲間も少なくないし、新しく仲良くなった方も多い。仲良くなって、あとから当時の友達だったと知った方もいる。同じようなことに、私は依然として怒っている。“neko”と名乗るのをやめた主な理由は上に書いた通りだけれども、正直なところ、コミュニティへの幻滅と不信感があったのも事実ではあり、それは今も変わっていないばかりか膨れ上がっている。しかし、変化したのがコミュニティなのか、自分なのか、それとも「コミュニティ」と呼んでいる対象それ自体なのかは、私もわかっていない。

それでも、大してフォロワーがいたわけでもなかったのに、「neko ちゃん」がいまだに引用や言及されるのを見ると、嬉しさとこそばゆさを覚える。「あいつはアイドル営業してた」とか「エモい文章だけ残して消えた」とか言われていたのも面白かった（「アイドル営業」とは……？）が、好意的な言及も少なくなくて。卒論に使ったとか、イベントで引用したとか、今でもたまに聞く。前に、「neko さんって知ってる？」と薦められたのはさすがに笑ってしまったけれど、すごく嬉しかった。他人のふりをして曖昧に答えたわたしに、ファンなんだ、と言っていた。

ZINE の誤字等はアクセシビリティの観点からもずっと気になっていたけれど、今更手を入れるのもなあと訂正を見送っていた。

しかし、今でも忘れた頃に来る「購入されました」の通知を受けて、今回、REDUX edition を作成した。基本的には誤字脱字の訂正程度にとどめるつもりが、気づいたら内容にも大幅な修正を加えていた。また、オリジナル版出版後に書いたものも含めて、いくつか追加で収録した。相談に乗ってくれたみんな、ありがとうね。

同時に出版する『LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの ZINE』を最後に、今度こそ、この名前でなにかをするのはもう終わりだと思う。いくつかのプロジェクトに声をかけられたりしていたのだが、これ以上私で「neko」を汚す前に、そっとしておきたい気持ちが今は強い (ごめんなさい)。とは言え、以前書いた通り、「neko」も私もいなくなったわけではない。「neko」は明らかに私ではないが、確かに私の一部であった。それは今も変わらない。だから、お別れの挨拶も、以前と変わらないよ。

> ばいばいだけど、ばいばいじゃないよ。これからも、みんなで一緒に、生き残り続ける。語り続ける。語りを繋げ続ける。安易な線引きに挑戦し、固定された枠に規定されることを拒絶し続け、明日も、明後日も、各々の場所から、できることをできる限り最大限に続け、静かな革命を続けていく。私たちは、明日からも生き続け、ともに世界を変え続けていく。
>
> 「わたし」として出会ったひとたち、書いたものたち、考えたことたち。それらは、すごく大切で、きっと

この先も大切なまま。あなたにとっても、この先ずっと「わたし」だけでなく私がそういう存在であり続けているのならば、心の底から嬉しいと思う。

Love you all still,

かつて “neko” と呼ばれた私より

VI

虹

初出一覧

本 ZINE 収録作品は、anarchist_neko（“neko”）が 2021 年から 2023 年を中心に運営していたブログ `https://anarchistneko.wordpress.com` に掲載した記事を、加筆・修正したものです。

「2025 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言
（「2022 年 8 月のわたしのアナキズム」宣言より加筆）
2022 年 8 月 20 日

アナキストとして投票することについて
2022 年 6 月 25 日

インターセクショナリティ
2022 年 9 月 18 日

「フェミニズム」とは何か、何であってほしいか
2023 年 2 月 10 日

「あかね空」
2023 年 1 月 6 日

「女性」の「定義」
（『「女性」の「定義」』より一部抜粋）
2022 年 9 月 19 日

定点としてのセックス
（『「女性」の「定義」』より一部抜粋）
2022 年 9 月 19 日

小学生でもわかること
（『小学生でも解ること』より改題）
2022 年 10 月 24 日

「炎」
2022 年 11 月 11 日

「当たり前の理」なんかじゃない。
2023 年 2 月 10 日

パンとバラとモモ
2022 年 12 月 7 日

なぜおしっこはもれるのか
2022 年 9 月 13 日

「無題」
2022 年 6 月 23 日

静かな革命
2021 年 10 月 8 日

ツイッター以外でなんか活動してんの？
2022 年 11 月 11 日

できることをできる限り最大限に
(『「女性」の「定義」』より一部抜粋)
2022 年 9 月 19 日

「合成クオリア」
書き下ろし

中立的な観点
(『この記事は中立的な観点に基づく疑問が
提出されているか、議論中です』より改題)
2022 年 11 月 11 日

設定集
『つれづれなるままにカムアウト』より改題
2022 年 8 月 4 日

「バグ」宣言

2023 年 6 月 15 日

あとがき／まえがき

（『Finale/Prologue』をもとに加筆）

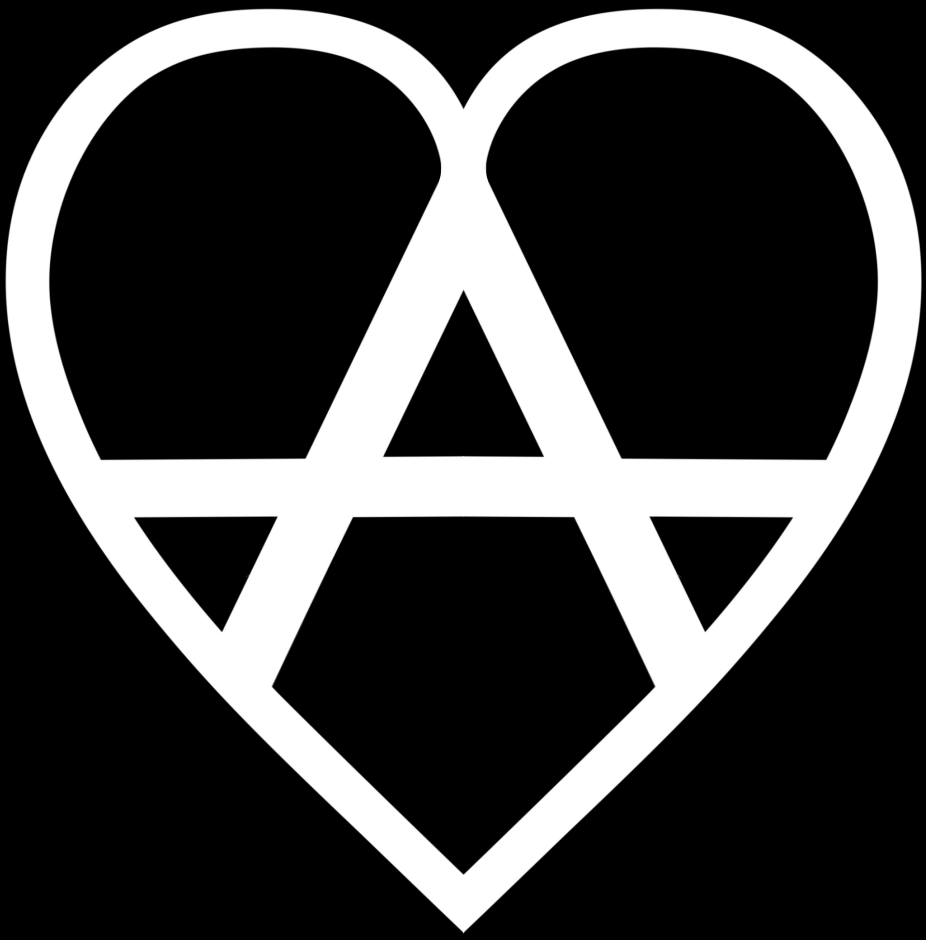
2023 年 6 月 26 日

a.n.: a ZINE by anarchist_neko
—REDUX edition—

2023 年 2 月 10 日　初版
2025 年 8 月 20 日　全訂版（REDUX edition）

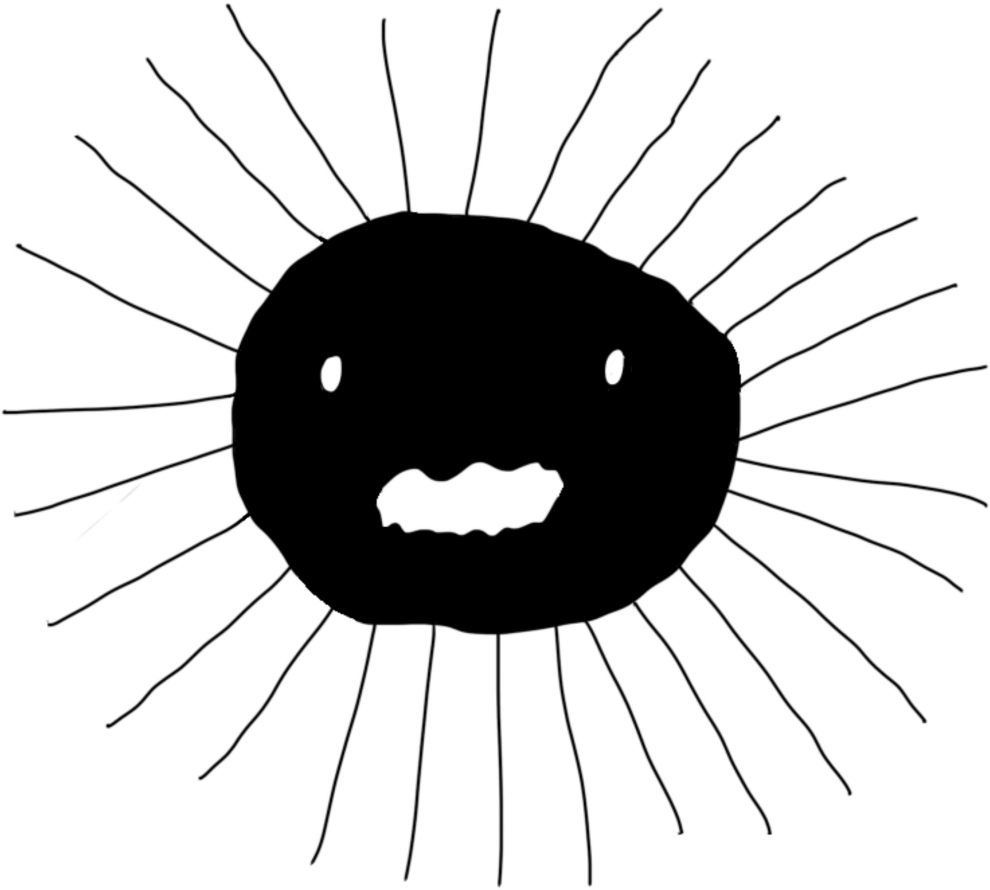
著者：　anarchist_neko
https://anarchistneko.github.io

本 ZINE は著作権を放棄しています。転載、翻訳、再配布等を認めます。
anarchist_neko. 2023-2025. No rights reserved.



anarchism is for everybody

YOU ARE



VALID

LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの ZINE

2025 年 8 月 20 日　初版

著者：　sykality・a.n.
https://sykality.wordpress.com
https://anarchistneko.github.io

本 ZINE は著作権を放棄しています。転載、翻訳、再配布等を認めます。

sykality and a.n. 2023-2025. No rights reserved.

初出一覧

本 ZINE 収録作品は、「Queer な生を奪回せよ！」を除き、sykality（“しい”）および a.n.（“neko”）が書いた記事をもとにふたりで加筆・修正したものです。

sykality のブログ：`https://sykality.wordpress.com`
a.n. のブログ：`https://anarchistneko.wordpress.com`

*　*　*　*

LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの文章
2022 年 11 月 24 日
（a.n. のブログより）

ジェンダーを図示する
2022 年 10 月 15 日
（a.n. のブログより）

「rakugaki」
2023 年 1 月 6 日
（sykality のブログより、「私たちは私たちのパンを齧る」を基に加筆修正）

ペドフィリアは LGBTQ+に含まれるのか
2023 年 8 月 7 日
（sykality のブログより、「ペドフィリア、チャイルド・マレスターと性的指向」から改題 ）

「日本語版ジェンダー調査 2023」調査結果
2023 年 3 月 15 日
（sykality のブログより）

Queer な生を奪回せよ！
全改訳
（Reclaim Pride Brighton. 2021. *Reclamation: A Queer Zine from Brighton.* より全訳）

We Are Here, We Are Queer
2023 年 2 月 10 日
（a.n.: a ZINE by anarchist_neko を基に修正）

「We Are Here, We Are Queer」

ここにいる。

きのうまでも、あしたからも、ずっと。

ずっと。

インスピレーションとなった作品

- *SPIT! Manifesto Reader*
- *Xenofeminism Manifesto*
- *Gender Nihilism (Anti-Manifesto)* および
  Beyond Negativity
- Mary Nardini Gang：
  (1) Be Gay, Do Crime，(2) Criminal Intimacy，(3) Toward the Queerest Insurrection
- Audre Lorde：
  (1) The Master's Tools Will Never Dismantle the Master's House，(2) Poetry Is Not a Luxury
- *Building an Abolitionist Trans/Queer Movement With Everything We've Got*
- *Street Transvestite Action Revolutionaries*
- *An Army Of Lovers Cannot Lose (ACT UP)*
- *Kill The Cop In Your Head*
- *Bash Back! Anthology*
- *Queering Anarchism*
- *Anarchism and The Black Revolution*
- *Abolishing The Police*
- *Mutual Aid: Building Solidarity During This Crisis (and the Next)*
- その他：
  - Abolition
  - Indigenous Anarchism
  - Queer Anarchism
  - Works of Lucy Parsons
  - Black Autonomy Network

これは、allo シスヘテロの「アライ」の皆様にうなずきながら理解してもらうために書いているのではない。Queer のために書いている。身体、感情、社会的役割における自律性を暴力によって支配され、隷属させられてきた世界中の者たちのために書いている。おまえらの、悲惨で逸脱した、脱走者としての歴史（fugitive history）へ呼びかけている。売られることを、傷つけられることを、自分自身以外に支配されることを、否定するように呼びかけている。全てを奪い返すことを、呼びかけている。

わたしたちは、Queer らのグループの小さな一つにすぎない。わたしたちは Queer Unity である。愛であり、怒りであり、連帯である。わたしたちは、ぶん殴り返している[15]。Pride を奪い返している。愛し、支え合っている。抑圧と殺戮の上に成り立つ社会を滅亡させるために、戦っている。そして、このことを誇りに思っている。わたしたちは自らの信念に従い、実践を通じてそれを実現することに身を尽くしている。火蓋は、まだ切られたばかりだ。さあ、おまえたちも立ち上がるがよい。

[15]原文：bashing the fuck back。訳注 12 を参照のこと。

らゆる場において必要不可欠なものである——Allo シスヘテロ規範家父長制、資本主義、その他の全てのヒエラルキーに縛られて生きる毎日の。Pride とは、Queer Unity の、すなわち解放を目指す闘争のためのアクションの、具現化である。だから、わたしたちは毎月、食料や水、生理用品、代名詞の書かれたバッジ、本、衣類、そしてそれ以上を配る相互扶助を運営している。TERF やファシスト、国家や資本主義団体に対するカウンター・デモに参加したり、これらを組織したりしている。だから、わたしたちの街は、わたしたちのポスターやステッカーであふれている。だから、わたしたちはどこへも行かない。これらの表立った行動は非暴力的ではあるものの、Queer Unity の実践は、自衛と解放のための暴力を本質として必要とする。暴力に基づいたシステムは、いかなる手段をもってでも、解体され廃止されて然るべきだ。Pride とは、〈普通らしさ〉、国家や抑圧的なヒエラルキー、〈抹殺〉と〈同化〉、その全てに殴り返す[14]ことである。これは公共の場で自らを罪に陥れるということではない。どのような運動でも、多様な戦略や密やかな行動、そして匿名性は大切なものであろう。わたしたちとしては、反体制的な解放のための闘争へと繋がる意識とコミュニティを育むことを目的としている。だが、わたしたちはまだ運動を始めたばかりであり、完璧からは程遠い。このようなプロジェクトを成功させるには、献身、流動性、そして批判との対話が必須だ。長くかかるだろう。しかし、わたしたちが、あるいはわたしたちを継ぐものが、ある日そこへとたどり着くことを考えると、クソほど興奮する。

[14]原文：bashing the fuck back。訳注 12 を参照のこと。

げた。正式なリーダーはいなかった。公的な組織も一切呼ばず、協力関係も結ばなかった。わたしたちは、全国から集まった Brighton 出身者でしかなく、存在し続けるために必要であったから、この愛と抵抗のコミュニティを形成したに過ぎなかった。政治家や資本主義者、反革命的な改良主義者、報道者らには、居場所など与えなかった。わたしたちは、他人のルールに従うことなど拒絶した。それを諦めた瞬間に、解放の夢は飲み込まれ、吐き返されるから。

> これはラディカルなアクションです！　これはプロテストです！　わたしたちは、礼儀正しく改良を求めるために集まったわけではありません。警察や政府、企業のために集まったわけではありません。彼人らではなくわたしたち自身に、自分たちが誰であるかを思い出させるため集まったのです。わたしたちは、コミュニティと繋がりなおそうとしています。虐待されるたび、ハラスメントに遭うたび、辱められるたび、このように共に立ち上がれるのならば、わたしたちに指一本触れることなど誰にもできないから。［中略］これこそが「解放」というものの意味です。これこそが「Pride」というものの意味です。では、「コミュニティ」とはどういうものでしょうか？
> そう、まさしく、これこそが「コミュニティ」です！
>
> ―「Pride を奪回せよ　Brighton」でのスピーチ (2021)

「Pride を奪回せよ」マーチから始まった自律性（オートノミー）の喜び（ユーフォリア）は、日常生活の中でも再現を目指して身を捧げるものとなった。Pride は単にある日の午後にプロテストしたり祝ったりするためのものではなく、生活のあ

に戦う未来のために祝杯をあげることである。流動的で、可燃的で、挑発的。世界を燃やしながら、共に守り合おう。

> 世界を根底から変えられるかのように行動せねばならない。常に、そうせねばならない。 — Angela Davis (1972)

奪回

「Pride を奪回せよ　Brighton（Reclaim Pride Brighton）」は、Queer なコミュニティ同士の連帯の表示として始まった。ロンドンのハイバリー・フィールズにて行われた「Pride を奪回せよ」マーチは、集団的で堂々とクィアなプロテストに場を与えた。われわれは、Brighton の Queer コミュニティから連帯を示すため、これに参加していた。また、Wi Spa 事件の影響で警察や Proud Boys からの暴力に遭っているロサンゼルスのクィアな反ファシストたちへも、皆、連帯していた。これらを踏まえて、われわれ自身も、Brighton で同様のマーチを行なったのだった。できうる最善の方法で Queer Unity を示すため、大声で叫ぶ Queer な集団としてゴミにクソした。恐れずに声を上げ、誰にも邪魔されずに歩き、自律的に存在する力を、自らに与えた。わたしたちの抵抗には、国家も資本も無関係であった。Pride とは、歴史的にもアクションであり、また、常にそうであるべきだから。中心メンバーはわずか 5 名程度であったが、たった数週間の準備のうちに、皆の知る〈同化〉主義的で商業化されたプライドの成れの果てを生み出した構造の外側に、運動をつくりあ

国家とそのブリキの兵隊さんたちの崩壊を、踊って喜ぶことである。自由な個人の自主的な団結である。「性差」を取りまく全ての会話をぶっ潰すことである。セクシャル・ヘルスと性的同意を最低限の共通ラインにすることである。逮捕された Queer な者らに手紙を書き、彼人らのために立ち上がることである。ひとを家まで送り、相互扶助のための組織を運営し、互いを守り合うことである。〈普通らしさ〉に反することを恥じないことであり、革命心を目覚めさせることである。クソみたいな国家やキリスト教から解き放された、一生ものの愛の同盟である。今も続く、解放のための闘争の歴史を知ることである。Queer Unity とは、ストリート・トランスヴェスタイト・アクション・レボリューショナリーズとして、ラディカルな相互扶助に基づいた「ハウスカルチャー」で 1970 年代のニューヨーク・シティで Black や Brown の Queer コミュニティを栄えさせた、Marsha P. Johnson と Sylvia Rivera である。また、横につながる Queer な反資本主義的空間をつくり、確固たる構造や定義、境界線を拒否することである。死者の名誉を守り、互いを逮捕から守ることである。直接行動である。自身を、共同体を、パートナー（たち）を愛することである。〈普通らしさ〉が無力化された自由な世界への希望と、共に生きることである。そうすることで、わたしたちは自分自身や愛する者たちのために、より良い世界を作り続けている。それは、資本主義や妥協を前提とした政策や、搾取や暴力を生の一部として引き受けることを条件とする改良に頼る必要のない、クソ美しい世界となろう。Queer Unity とは、ファシストの顔面をぶん殴ることであり、恋人が拳についた血を流してくれることであり、友達が奪ってきた夕飯を分けてくれることであり、共

— Homotopia (2006)

Queer Unity は、Queer の解放のための万能な道具である。あるときはパトカーの窓を割るレンガであり、あるときは家やコミュニティを、そして新たな世界を、つくるレンガである。Queer Unity では、集産的に存在し抵抗し合える場のために、食糧やマスク、包帯、ホルモンを共有する。被逮捕者を解放し体を盾にして互いを守りあい、その後には料理を振る舞いあう。身体、精神、創造性、性、そして魂を養うための場所と時間をとる。このことに、互いの許可を得ることも、何らかの条件を満たすことも、不要である[13]。売り物になどならない。てめぇらの機械の歯車になどならない。わたしたちの身体は、〈普通らしさ〉の怒りに満ちたバックラッシュなど恐れはしない。わたしたちの文化、決まり事、創造性を、てめぇらのトロフィーになどさせない。請うことも、議論することも、何かを犠牲にしたり妥協したりすることも、無い。Queer Unity は譲歩などしない。

Queer Unity とは、わたしたちの腹を満たし目を覚まさせる、無限の可能性である。〈普通らしさ〉とその鎖より解き放された世界で、自律性に導かれた先の全てである。その日が来るまで既に解放されたかのように生き、その権利を奪う全てとの闘争を喜んで引き受けることである。われわれ自身の血に濡れた手で産む、罪と犯罪の時代である。工事現場を燃やして夕飯を温めることである。国会議事堂に侵入し、セックス・パーティーを主催することである。喉を締めつけてくる〈普通らしさ〉に力を与える全てに、釘バットをふることである。社会的秩序、階級構造、

[13]後述の通り、性的な同意は当然の前提であろう。

Unity の実践であり信念である。〈普通らしさ〉とそれが用いる全てのヒエラルキーとに宣戦布告する、「抑圧？　クソくらえ」作戦だ。Queer Unity とはあらゆる〈同化〉の完全な拒絶であり、全ての〈抹殺〉に対するエンパワーを通じた自衛である。反ファシズムであり、反資本主義であり、反人種主義であり、武闘派フェミニズムであり、廃止論である。同じ抑圧者らに苦しめられている者らやコミュニティとのつながりを喜ぶことである。解放のための全ての闘争が手を取り合い、地図上と心の中とから、わたしたちを分断するために〈普通らしさ〉が振るう武器にすぎぬ壁を、取り払うことである。Queer Unity を通じて、国家もポリ公も fag 殺しも TERF も法律も、もはや脅威ではなくなる。この終わりなき消耗戦は、それをつくりだし維持しているメカニズムや構造を用いても終わらせることはできない。必要なのは、被抑圧者ら同士の連帯、〈同化〉への抵抗、非暴力、平等な連合、そして互いの尊重だ。Queer Unity は、われわれを窒息させ絶望させる階統制（ヒエラルキー）を解体するために必要な、対抗の力である。

> わたしたちの戦術は、わたしたちのジェンダーと同じく多様である。わたしたちのアクティビズムは、わたしたちのセックスのように情熱的である。わたしたちの抵抗は、わたしたちの欲望のように自由である。こころの内の植民地を爆破し、わたしたちを終わらせるために苦心する者らへの抵抗を続けることで、創造性と快楽の新たな地平が拓ける。わたしたちの愛は破壊と退廃、解放と多様性のための脱走者たちの実践（fugitive practice）である。国家の許した陽炎でなく革命を愛せ、ホモトピアを。

し、わたしたちの先人達が命を失った戦場に小便をかけ、コミュニティを骨抜きにしようとする。咀嚼され、死と退廃と飢餓と喪失の文化の中に吐き出される。そして、死よりも悲惨な運命を迎えることとなる。ゆえに、Queer であるということは、精神、魂、こころ、そして身体の全てで〈抹殺〉と〈同化〉という二つの装置を徹底的に拒絶し、これらに抗っていくことなのだ。

Queer Unity

> クィア・アナキストとして受け継がれた反抗精神を、再発見せねばならない。普通らしさの構造を破壊し、代わりにこの普通らしさより疎外されてきたことを基に、これを解体する立場（ポジション）を作らねばならない。その立場を通じて、同化主義者らの思潮、されには資本主義の破壊を、始めなければならない。こういった立場は、この世界を完全に打破する社会的な力の道具となりうる。われわれの身体は、この社会の秩序と対立するものとして生まれてきた。この対立を深め、広げねばならない。
>
> — Mary Nardini Gang (2014)

殴り返すために[12]われわれが手にする武器を、Queer Unity と呼んでいる。Queer な抵抗者であること、反乱者であること、それが Queer

[12]原文：bashing the fuck back。Bash back は「殴り返す」の口語表現であると同時に、命令形にした Bash Back!は 2007 年ごろにシカゴで結成されたクィア・アナキストのネットワークおよびそのムーブメントの名前でもある。本稿はこの Bash Back!の影響を受けており、関係団体である Mary Nardini Gang も引用されている。なお、旧 Bash Back!は 2011 年ごろに解散したが、2023 年に再結成された。

や tranny は「パリピ」だからと興味本位で集まる straggot[11]など、皆、海に放り投げられるが良い。貪欲なポップ・カルチャーに支えられた「プライド」商品は、Queer な者らの賃金労働、人格、身体を飼い馴らし、従化させる寄生虫でしかない。わたしたちに与えられるのは、国家が協賛し警察が誘導するパレードである。国家は Queer の歴史によって利潤を得ながら、表現を管理し「集団としての自律性」という急進的な考えを無力化することで、われわれを〈抹殺〉する〈普通らしさ〉を再生産・複製する。名ばかりに「クィア」な支配階級は、その他のものと同様、〈普通らしさ〉の力でしかない ——根本的な社会政策を阻止するというおまけ付きで。

投票はわたしたちを救わない。寛容はわたしたちを救わない。受容はわたしたちを救わない。〈同化〉はわたしたちを救うことはなく、確実に、しかしゆっくりと、わたしたちを〈抹殺〉していくのだ。

> クィアなマイノリティの必要に基づいて計画を立てよ。同化の政治（ポリティクス）を拒絶し、寛容を懇願するのをやめよ。セクシャリティとジェンダーの多様性の祝福を歓迎せよ。社会システムの変革を求めよ。民主主義の神聖化を徹底的に終わらせ、司法の士気を挫け。われわれの言葉で、われわれの感情的・性的欲求を定義せよ。虚偽の平等ではなく、無視してはならぬ差異を、重視せよ。 — Carlos Motta (2011)

社会はおまえを殺そうとしている。殺せないのならば、おまえをおまえにするその全てを奪おうとする。自由のための闘争の歴史をかき消

[11] straggot: faggot をもじった、「ストレート」の人に対する侮蔑語。

抜きにして、メディア企業のトロフィーになってスポンサー様の利潤に貢献し、空いた時間にフラッキングで大稼ぎするビジネスチャンスもいただける。政治家になり、Lloyd Russell-Moyle[8]を見習って地球を燃え尽くしている中道派たちに助力する権利もいただける。あるいは、Peter Tatchell のような NGO 代表になり、われわれを踏みにじる軍人らから金をもらいながら「やめていただきとう存じます」などと丁寧にお願いし申しあげることもできる ——みせかけだけの政治も、ここまで酷いものはなかなか無い。Kathleen Stock[9]のように、Queer の分断を図りながら梯子を外し、シス・レズビアンとアライのごく一部を〈抹殺〉主義者に取り込む機会もいただける。公文書では人称代名詞の選択肢もいただける。ただし許容されるのは *she* または *he* の一方のみに限られ、*xie*[10]が運転免許を取ることは蔑まれる。軍人になり、帝国主義の駒となる権利も与えられる。これが社会的受容のシンボルらしいぜ。

わたしたちに与えられるのは、Queer の闘争のシンボルで儲けるために allo シスヘテロがつくった、レインボー・ウォッシュされた企業主義である。Club and Bar Revenge に飾られたレインボー・フラッグやピンク・トライアングルは、そこでハラスメントを受け、同意なく触られ、暴行され、薬を盛られた Queer たちにとって、何一つ意味などない。最低賃金で働いている faggot たちにとって、なんの意味があるんだよ。Faggot

[8]Lloyd Russell-Moyle：HIV 陽性であったことを公表していた、Brighton Kemptown 代表の労働党ラッセル＝モイル議員。

[9]サセックス大学の元教授。Gender Critical Feminist を自称する。2021 年、学生の抗議を発端に辞職した。

[10]xie：neopronouns（新代名詞）のひとつ。

れない。養子を育てる権利を奪ってくるかもしれない。いずれにせよ、やつらはクソみたいに恐れているのだ、おまえにかぞくをもたれることを、遺志を継がれることを、コミュニティをもたれることを。死後もなお、おまえの思想や信念が残ることを。わたしたちの身体は暴力の対象にされ、防衛すれば罰として監獄に入れられる。どのような手を使ってでもおまえからすべてを奪い、おまえの Queer らしさの抹消を図っているのだ。利潤と支配のため、われわれは焼かれ、刺され、撃たれ、飢えさせられ、そして墓標もなき穴に投げ込まれる。やつらの目的は、おまえの自律性と安全を徹底的に拒絶することだ。おまえの Queer らしさを、徹底的に拒絶することなのだ。

> **目覚めよ！**　現代社会はスケープゴートを生む装置の上に成り立っている。我々は気づかぬまま、自ら生贄の仔山羊になるため肥え続けている。我らの敵は、常に我ら自身であったのだ！　社会の底辺にされた者たちよ、のけ者たちよ！　社会が窮地に立たされたとき、また贄にされるのは我々だ。**我々の命は、消耗品ではない！**　— SPIT! (2017)

一方、〈同化〉とは、わたしたち自身をわたしたちの敵にするものである。〈普通らしさ〉がわたしたちの生存を許すとき、Queer らしさは〈抹殺〉主義者らのお口に合うように飼い馴らされ、管理され、牙を抜かれることを求められる。ふざけんなよ、クソが。

わたしたちに与えられるのは婚姻の権利、すなわち単数婚と資本主義的な家族制度におちつく機会である。充分に搾取可能で、かつ充分に他者を搾取さえしていれば、RuPaul のようにドラァグカルチャーを骨

クソみたいな現状について

〈普通らしさ〉に基づいた社会は、主に〈抹殺〉と〈同化〉の二つの装置で、Queer な者らとコミュニティを抑圧する。

〈抹殺〉とは、残酷に唸る剣の鋭刃である。ファシズムに基づくジェノサイドであり、国家をはじめとした暴力を寡占する存在によって実践されている。これは、生命を救うための医療へアクセスできるまでにかかる 10 年弱のことである。無数の者を病死させることである。Faggot がヤることやクロスドレスすることを、違法化することである。「セクション 28」[6]である。「WHRC 宣言」[7]である。陰謀論的なファシズムを撒き散らす、TERF や「ジェンダー・クリティカル・フェミニスト」とやらのことである。生殖器やデッドネーム、セクシャリティについて、上から目線で攻撃的に聞いてきた全員のことである。トランスのひとをジェンダー化された監獄に入れ、誤った代名詞が彫られた墓に埋め、デッドネームを連呼して死を悼むことである。これらを特産品とする国家へと、強制送還することである。

Queer であるということ。〈普通らしさ〉に立ち向かうこと。それは、〈抹殺〉を図られる行動をとることである。おまえを路上で殺してくるかもし

[6]「セクション 28」: 1988 年に、サッチャー政権下のイングランドとウェールズで導入された、「同性愛の促進」を禁じる「地方自治法 28 条」。2003 年に廃止された。

[7]「WHRC 宣言」: Women’s Human Rights Campaign（現: Women’s Declaration International）による、「女性の〈セックス〉に基づく権利に関する宣言」。トランス差別的な内容が問題となった。

無いということです　　— Huey P. Newton (1973)

わたしたちは Queer として、わたしたちを殺そうとしている社会のなかで生きている。Queer と〈普通らしさ〉の対立は、わたしたちの悲鳴より前から続くものではあるが、同時に、わたしたち自身の力による自律こそが、Queer を——わたしたちの死を求める世界に抗う力を——創り出してもいる。

耐えきれぬほど多くの者たちが、すでに殺された。悪意、透明化、意地悪、無知、同化、無関心により、親、きょうだい、親の親、先生、尊敬する人、ヒーロー、指導者、パートナー、子らとなり得た者たちが、殺されてきた。彼人らが命をかけて求め続けたユートピアが、実現される希望すら生まれる何十年も前に。その遺志を継いでいるなどという言葉では、不十分であろう。これはまさに、わたしたちの歴史なのだ。白人至上主義で資本主義で allo シスヘテロ規範で父権主義で単数愛的な世界を破壊し尽くすこと、それは Queer としてのわたしたちの責務であり名誉だ。何百、何千、何百万もの殺されてきた Queer らの名前を、死んだ警官の額にナイフで刻み込め。彼人らの名のもとに、木を植え、絵を描き、愛し合え。抵抗を必要とするこの緊張状態は、ただ経済的、思想的、社会的なものではなく、歴史的なものでもあるのだ。

わたしたちは Queer である。それは、Queer である以外の選択肢など、今もこれまでも、ひとつもなかったから。わたしたちは存在する。ゆえに、抵抗する。これはただのスローガンでもお題目でもない。鬨の声だ。

で、ユートピア的で、武闘派で、退廃的な政治運動を選ぶのは、それ以外の政治思想との希望のない戦いを、常に強いられてきたからである。身をもって、そのなかで生きてきたからである。ネオリベラルな受容など、クィアなセックスワーカーや路上で眠る10代のtranny[3]、fag[4]狩りのサバイバー達、ヤク中のdyke[5]、AIDSを経験しているpunk、fatなドラァグクィーン、Aジェンダーの囚人らにとって、なんの意味があろう。わたしたちがホモフォビックなかぞくに追い出されて学校を中退せざるを得ず、そのせいで就労することも生活費を払うこともできないまま凍え死ぬとき、プライド広告は暖を与えてくれるのか。Brightonを走る虹色のパトカーは、何年も苦しめ、懇願や妥協をさせ、様々な犠牲を払わせてから、他の者らと同様に搾取の対象にしてくださる〈普通らしさ〉に抵抗したとして、HRTを「違法」に無償提供する者を逮捕してくるのだ。

Queerな者らは、故意に下層階級にされ続けている。白人でニューロティピカルでalloシスヘテで単数愛者である者ら以外は、下層階級にされる。これは、まさしく資本主義国家のミッション・ステートメントである。安定した住居や医療、金、安全などへのアクセスを制限されているのは偶然ではなく、〈普通らしさ〉が周縁化と困窮、そして死の脅威をダモクレスの剣のように頭上にぶらさげることでつくりだされている、人工的な制約なのだ。「マシになるまで、もうちょっと様子見しようよ……」などという悪魔のささやきも、なんら変わらない。マシになんかなるかよ。

革命家がまず最初に学ぶべきこと、それは未来など自分には

[3]tranny：トランスジェンダーのひと。通常、差別語。
[4]fag(got)：男性同性愛者。通常、差別語。
[5]dyke：（特に「ブッチ」寄りの）レズビアン。通常、差別語

ての（小文字の）queer という表現は今や広まっている。しかし、われわれのいう Queer（大文字 Q であることに注意せよ）は、その抵抗の力で定義される ——〈普通らしさ normalcy〉に挑戦するすべてへ仕掛けられた戦のなかで、鍛え上げられたその力に。〈普通らしさ〉は、白人至上主義であり、資本主義であり、allo シスヘテロ規範[1]であり、家父長制であり、単数愛制であり、able-bodied[2]である。Queer とは、これら以外のすべてである 。

> クィアとは緊張下にある領域であり、白人中心的でヘテロ規範で単数愛者的な家父長制という支配的なナラティブに対抗するものとして、さらには、周縁化され、他者化され、抑圧されたすべての者らとの団結として、定義される。クィアとは、異常で、奇妙で、危険とされているものである。セクシャリティとジェンダーに関わる概念も含まれるが、それ以外の多くも含む。わたしたちの欲望や空想、そしてそれら以上をも表す。クィアとは、ヘテロセクシャルな資本主義世界に反するすべてのものの団結であり、〈普通〉による支配を徹底的に拒絶するものである。 — Mary Nardini Gang (2014)

これは急に出てきた考えなどではない。わたしたち以前にも、Queer 達はこの思想に基づいて生き、愛し、夢を見、戦い、そして死んでいった。もっとも、言葉のみでは何も変わらない。われわれがアナキスト的

[1]allo シスヘテロ規範：allo ロマンティック（≒ Aromantic でない）または allo セクシュアル（≒ Asexual でない）であるという規範、シスジェンダーであるという規範、ヘテロロマンティックまたはヘテロセクシュアルであるという規範。

[2]able-bodied：≒ disability を経験していないひと。

以下は Anonymous from Reclaim Pride Brighton の Reclaim Your Queer Fucking Life!（2021 年、元は https://cryptpad.fr/file/#/2/file/Cs1X3hKKWnwusrf3oRNehxpy/）の全訳です（“The zine is free to read, share and distribute.”）。

*　*　*　*

> 多くの者が、社会の堕落の責任をクィアらに負わせようとしている。これは、まったく誇らしいことだ。この文明とその根底に流れる倫理観を、われわれがぐちゃぐちゃに破壊しようとしていると信じる者もいる。これは、まったく正しいことだ。われわれは、非道徳的で、退廃的で、吐き気を催させるような者らであると説明されがちである。だが、ああ、われわれの本当の力に、彼人らはまだ気づいていない。
>
> — Mary Nardini Gang (2009)

存在は抵抗

わたしたちは Queer である。それは、LGBTQIA+から一文字を切り出してきたものであるということでも、なんらかの安定的で限局的なアイデンティティをもつということでもない。Queer は決して単一の点ではなく、常に流動し、変容し、拡張し続けるものである。海とともに満干し、焔とともに破裂して煌めき、風とともに唸り渦巻くものである。個々の総和以上の力を示すものである。L、G、B、T、Q、I、A の総称とし

Queerな生を奪回せよ！

- 「第三の性」が法定されていないために移行先がない　二元論でいう「異性」になりたいわけではないためにSRSをするための要件にあたらないおそれがある
- （医者に）生理が早く無くなってほしいのに、順調に来るように治療されたり、女性らしいからだや女性らしい性格が正常なように話をされる。例えば、おしゃれな服が着れるようにダイエットをしましょうなどと話をされる。

るのかと不可逆な医療が不安な事、うつ病なのでテストステロンの精神に及ぼす影響が心配

- お金、周囲の目、情報不足
- いわゆる性同一性障害の中核群と呼ばれるような人以外のアイデンティティを尊重して対応してくれるジェンダークリニックの情報がないこと。また、そもそもそのような病院がほとんど存在しないこと。性別違和理由の改名手続きでは通るかどうかが担当のスタッフの知識量や偏見に左右されてしまい、中核群的なトランス女性／男性に擬態する選択をする人も多いこと。
- いくらトランジションを頑張っても、社会的に A ジェンダーとして扱われることがないこと。
- X ジェンダーやノンバイナリー，中性，両性の場合、特に性転換を必要とせず、また恋愛対象も身体的性別から見て異性となる人が好きであったり、ファッションが中性的であるとか、あまり要求が多くないため、理解されにくい。これにより、私としては戸籍を前述に該当する『X』へ変更可能なら変更したいが、そのようなものが今のところ日本では公的には存在しない。医学的な事は、カウンセリングを除けば特に必要としていないので、あまり言及できるところは無いと思う。
- X ジェンダーなので戸籍も女や男にカテゴライズされない風になるのが理想だが、そうはできないことが悲しい。
- SRS については健康的、経済的理由でしたくない。
- ・戸籍上の性別は、医療情報と結び付く場合、元々の身体の性を併記する必要があると思う。また、不定性やクエスチョニングの人が後から変更できることと、誰でも何度も変えられることによる弊害をどうバランス取るのかについても検討する必要がある。このため戸籍上の性別については変えられなくても仕方がないと思っている。

  ・胸部と生殖器は、切除した場合の健康への影響と、切除しない場合の健康への影響 (がんリスク低下等) と、切除した場合の生活への影響 (夫への精神的影響) などが絡むため、なかなか簡単に決めることができない。

- トランスジェンダー外来を名乗りつつ、トランス男性に対し「男性になったレスビアン」というような表現をしている医院もあり、誰も信頼できない。信頼できそうな人をさがすこと自体が困難
- トランジションへのアクセスは主にバイナリーなトランスに向けてのみ開かれているような印象があり、アクセスが困難に感じる
- トランジションする先がない
- とにかくノンバイナリーのトランジション情報を見つけるのが難しい。ホルモンも病院でうつべきか、個人輸入する方がいいのか迷ってしまう。
- どこに相談すべきか分からない
- ただ自分の性別に合わせたいだけなのに金額が高い。家族にカムアウトする気はなのに手術すればどうしてもバレてしまうので選べない。
- たくさん薬を飲んでいるため、ホルモン治療を受けた際の体質の変化についていけるかが心配。どこにアクセスしたらいいかわからない。名前の変更は簡単にさせてほしい
- それらへのアクセスが、距離的、金銭的、心理的、あらゆる面で難しい
- ジェンダー化されていない服や鞄、靴、財布などを身につけたいが、（少なくとも私が住む地方都市では）そんなものは売っていない。ユニセックスもバイナリーに感じられてあまり買いたくない。
- ジェンダーフルイドなので、クリニック受診時に出生時の判定性に対して所属感を持っていたりそれに近い感覚であると、トランジションへの意欲が下がってしまいそう。実際に言葉遣いなど個人の努力で達成可能な性別移行に時々困難がある。しかし、いつどのように変化していくのか自分でも把握しきれないので、いつ受診するのが良いかは分からない。
- ジェンダークリニックへのアクセスが出来ない事情がある
- ジェンダークリニックが少ない。
- お金の問題と、クローゼットゆえに同居している家族に対してどうするかという困難がある。
- お金が継続的にすごくかかる事、男性化しても自分が安心できる見た目になれ

状に甘んじている。

- 医者からのノンバイナリーへの不理解
- 医学的なトランジションにとにかくお金がかかる。戸籍上の性別変更のハードルがとても高い。
- ホルモン治療のできる病院が少ない。料金が高い。通院のために仕事の休みをとるのが困難。
- ホルモン治療が保険未適用であり、医療費が高額になること。私の住んでいる地域（広島）ではトランスジェンダーに関連する医療を受けられるところが少ないこと
- ピルが高額であること、長期間生理を止めるようなピルの服用方法に理解のある医師が少ないこと（ピルの服用目的=避妊/生理痛と想定されており、それ以外の目的での服用方法について相談が難しいこと）
- ヒゲの脱毛と金玉の除去に金がかかりすぎる。
- バイナリーなトランスジェンダーではないので医師からの無理解や偏見が怖く受診するのを躊躇ってしまう
- ノンバイナリーや X ジェンダーの戸籍がないため、変更ができず、困っている。
- ノンバイナリーの身体はイメージされにくく、現在認知されているバイナリーから反対側のバイナリーへの移行の話になり、自己像に合う身体はまだたどり着けない。(情報も手に入りにくい)
- ノンバイナリーのモデル的なものがなく、(それはそれで良いのだが) ホルモン注射を打ってもバイナリーなジェンダーに区分されないか心配。
- ノンバイナリーとしての戸籍上の性別を得たい。
  今後就労するにあたり職場等でノンバイナリーとしての扱いを受けたいが、どこから始めればいいのか。
- ノンバイナリーだが、日本の法律ではノンバイナリーという性別が想定されておらず、どう頑張ってもミスジェンダリングされる。あと結婚も戸籍上で「妻」として扱われてミスジェンダリングされるという観点からできない。
- ノンオペの当事者の戸籍上の性別変更

- 金銭面
- 金銭的問題により医療行為を受けられないこと
- 金銭的に不可能
- 金銭的な問題で手術を受けたくても受けられない
- 金銭的な負担がある。法的性別が邪魔になる。
- 金銭、リスク
- 金がない、情報が手に入りづらい、本当にやりたいことはまだ技術的にできない（が、不可能ではないと思う）
- 胸を平たくする手術を受ける際、低用量ピルの服用を止めるべきか、続けてもいいのか、止めるべきなら止めた期間内の月経の苦痛をどうするのか、分からない。レディースクリニックの医師に相談したいが、切り出し方が分からない。※低用量ピルは、月経困難症のため服用中です。
- 胸を取るのにかかるお金と、痛みに弱い事　ボディイメージ的には胸は取りたい　家族があまり良い顔をしないので、家族が亡くなってからと思ってる
- 胸をなくしたい気持ちはあるものの、ジェンダーフルイドだからあとで欲しくなるかもしれないよ、とクリニックの医師から言われており、手術をするか迷っている。また、どんなに装いを自分の馴染む様子に整えていても、声で「女性」だと決めつけられることも多くて苦痛である。ホルモン治療を勧められたが、恒久的に声を変えたいわけでもないので違うな、と思っている。
- 概ねトランジションの希望はないのですが、PCOS で女性ホルモンの分泌が弱く「女になりきれてない体」なのがコンプレックスだし心身ともにあまり健康ではありません。思春期前からノンバイナリーだとなんとなく自覚していた（未言語化）記憶はあるのですが、ノンバイナリー自認が体ともリンクしている気がして自認に自信が持てないのと、健康を手に入れるためにいっそ女性ホルモンのホルモン治療を受けたほうがいいのかどうか（でも女性になりたい！と思っているわけでもないし…）とても悩んでいます。
- 外見を変えたいが、変えてしまうと現パートナーとシスヘテロカップルに見えなくなるのでこれまでに経験したことのない差別を受けるかもしれないと思い現

- 戸籍名の漢字表記を残して読み方だけ改名しました。住民票にフリガナのない地域への転居を躊躇っている。また今後もし戸籍にフリガナが載る際に、改名後の名前が認められるか不安。
- 戸籍性別が男か女しかない、携帯の契約、公的な支援を受けるための書類で毎回男か女しかない違うのに AGAB に丸しなければならない違うのに、医療機関で通称名を使わせてくれない、医療機関で AGAB に従わないといけない、声を上げても未熟と判断されるか、現状自分が考え方を変える方向に抑圧される寄り添い。
- 戸籍制度のない国に居住しているため，戸籍上の性別=パスポート上の性別(または法的な性別) と読み替えて回答しました。ジェンダークリニックの受診については，GP への紹介依頼は 2 年前に済ませておりウェイトリストには載せてもらっていますが，ジェンダークリニック自体への受診はまだのため未経験と回答しました。
- 戸籍上の性別の者としてこれまで過ごしてきた社会における移行
- 戸籍の性別が男／女しかないため、変更の選択肢が取れない
- 戸籍に男女以外の表記があったら変えたい
- 戸籍からの性別の削除
- 現在高等教育への進学を希望しており、将来の学費のことを想定すると費用の捻出が困難である。
- 健康優良なトランス男性である自分にとって、デメリットの方が多そうなのでホルモン療法を避けているが、今のままだと声の高さでミスジェンダリングされてしまうのでどうしたら良いかわからない
- 経済的に苦しいのと、保険適用のために受診したいジェンダークリニックが遠いため中々医療ケアを受けられず、辛い。また、就職やトランジション後に差別を受けるかもしれないという不安がある。
- 金銭面での負担が大きすぎる
- 金銭面、また適切な医療機関へのアクセス
- 金銭面

- 自分にとってペニスがある状態が自然だが、今のパートナーが望まない（関係が破綻する可能性が高い）であろう事、またペニスを形成したところで射精などの機能が生まれるわけではないので、現時点では希望しない。
- 治療なのに法外なお金を取られる
- 私個人は性別の変更などを希望しないが、同性婚とトランス問題を混同している人があまりにも多いと感じます。
- 子宮の除去の手術を受けたいが、術後の入院期間が必要なこと、保険適用でなければ相応のお金が必要なことがあり受けられない
- 戸変したくてもバイナリーしかないからできない
- 戸籍名を変えたいと思っているが、自分はジェンダークリニックに通っているわけでもなく、身体的な変更を望んでいるわけでもないため、改名するためには通称名の使用実績を作るしかなく、時間がかかること。もう少し簡単に改名できるようになればいいと思う。
- 戸籍名の変更: 通称の使用実績を何年も積んだことを理由として名を変更したいと思い、インターネットで調べて実行に移そうとしているが、通称に移行できる機会があまり取れていない。改名の希望も含めてカミングアウト済みの友人には SNS や手紙のやりとりで通称を呼んでもらい、通販での買い物の一部や美容院では通称を使用しているが、大学や医療機関などのより通称の使用実績が有力になりそうな公的な場では移行に踏み込みにくい。通称の使用を相談するのにはカミングアウトが伴うのと、性自認が出生時に割り当てられた性別と逆というわけではなく性同一性障害の診断もつかないと思われる私のような場合でも通称が認められるのかどうか分からず、制度があるのは知っていても申請しにくい。できればノンバイナリーとして働ける職場に就職して通称で勤務することで実績を得たいと考えているが、発達障害とそれに伴う適応障害により大学に通うのが困難な時期があり、学業成績が悪く留年もしているため、それほど就職先を選り好みできない可能性も高い。また、通販を含む買い物においては名前を通称にするとクレジットカードの名義と異なるため、現金払い (通販では代引) に限るか利便性のために通称使用を諦めるかの選択を迫られる。

- 小さい頃から肉体の感覚全般が薄くて、自分の身体を自分の身体だと咄嗟に認識できないし、さりとてどういう身体になりたいのかのイメージもありません。ただ声だけは低い方が自分だという感覚があり、我流でボイストレーニングをしたりしています。こういう自分についてジェンダークリニックで相談したとしても、ジェンダーではなく、発達障害や精神疾患の文脈で解釈されてしまいそうだなと不安です。
- 女性だから子供を産めという今の風潮に困難を抱いている。
- 住んでいる地域にジェンダークリニックがない。障害があり戸籍変更などの手続きが難しい。病気で薬を何種類も飲んでいるためホルモンにも手を出せない。
- 住んでいる場所、年齢、家族関係などの影響で行うことが難しい
- 住んでいる自治体のジェンダークリニックは数が限られている上、新規受診の受付もしておらず、そもそも受診すること自体がかなっていません
- 周りの反応、反対の声、金銭問題 など…。
- 手術要件のせいで戸籍の性別が変更できず、強制的にカミングアウトせざるを得ない状況にしばしば陥ること。
- 手術を受ける前の状態で手術費用を用意すること
- 手術の費用が高い
- 手術の身体的・金銭的負荷が大きい
- 手術だけ希望していたのに、さっそく却下されて、その代わりに「ホルモンをやってみれば？」と無理やり薦められました。（結局新しいカウンセラーを探し、そのカウンセラーの紹介によってトランスジェンダー専門診療看護師に相談することができ、手術を受けることそしてホルモンをやめることになりました。）
- 手術すると元には戻らない。胸が取り外し可能になればいいのに。
- 自分の性別と自分の望む肉体のあり方が違うとき、望む方向に性器にかかわる摘出などの大掛かりな手術が出来ない仮に自分自身の性別に沿う肉体を望んだとしても、ふたなりと言われる状態になる手術は少なくとも日本では受けられない
- 自分に出来る限り低い声で話すことを、よしとしてほしい

- 性別二元論が前提のものばかりなので、現時点では生まれた時に割り当てられた性以外になりようがない。そうでない方にするのも違うし…
- 性別適合手術は保険適用にはなったが医療側のガイドラインと齟齬があり、実際にはまず保険適用にならない。そのため手術を受けるのが金銭的に厳しい。
- 性分化疾患があるため、必要であれば名前や戸籍性別の訂正が可能であるが、今のところはそこまでは考えていない。
- 性同一性障害では無いため不妊手術の要件として女性に出産要件が課せられており, 性嫌悪への対応が矯正以外にないこと。
- 身体にメスを入れることはまだ迷っているし踏ん切りもつかないような気がしているところなのですが、その辺のメリットやデメリット含めて相談できる場所がないということでしょうか。
- 親から反対される
- 信頼できるジェンダークリニックへのアクセス
- 職場への手術の適切な説明の仕方が分からない
- 上記戸籍上の性別変更はしていないのですが、海外に住んでいた頃、運転免許証の性別変更は行ったことがあります。
- ［前略］トランジションに関して社会的な関わりにおいて一番困難なのがカムアウトした場合自分を「身体違和の強いジェンダーアイデンティティが男性の人」ではなく「男性になりたい女性」「おなべ」として認識している人の目が怖いです。声が変わったり喉仏が出たり、顕著な変化を見付けると根掘り葉掘り面白いものとして扱われて聞かれる、更には勿体ないと言われるのがとてもつらいです。あとは一切カムアウトしていない方に通称名を知られた時に事情を説明するのがとても苦痛です。法的にも現在お付き合いしている方と結婚するには完全に戸籍上の性別を変えてしまうと婚姻が認められないのもとても悲しく思います。医療的な面に関してもジェンダークリニックがない地域で「性同一性障害」の診断書を出してもらうのに関して感じたのは全体的に「性同一性障害」に理解のある医師が少ない、その上で診断書を書ける医師が少ないと思いました。

というようなことを言われました。しかし、性別違和を抱えている患者を診てくれる精神科は、少なくとも通える範囲にはありませんでした。その発言をした担当医も、はじめからジェンダー以外に問題を抱える患者を診る気がないようで、インターセクショナリティ意識の無さに愕然としました。また、保険医療での手術を望む場合の条件が非常に厳しく、新幹線を使って遠くのジェンダークリニック通い性別判定を受けたのち同病院で手術を行うか、近場（といってもそこまで近くないですが…）のジェンダークリニックに通って性別判定を受けたのち、手術が可能な病院まで一日がかりで行くか、という感じでした。保険を使わない場合でも、ジェンダークリニックが紹介出来る場所で一番近いところには入院施設がなく、家で療養中に緊急事態が起こっても対処しにくい、と言われました。

結局、今はジェンダークリニックに通うことは中断しています。もっと保険医療が手厚ければ、ジェンダークリニックや一般の精神科などにインターセクショナリティの考え方があれば、ジェンダークリニックに精神面のケアを行う用意があれば、もっと簡単で安全に、傷付けられることなくジェンダークリニックや身体治療にアクセスしやすいんじゃないか…と考えます。

また、ジェンダークリニックなどの HP に「MtF/FtM」としか書かれていないことが多く、そのどちらにも当てはまらない存在としては、ジェンダークリニックに行くこと自体躊躇してしまいます。

とにかくずっと、当事者の体験記以外の、トランジションに関わるすべての情報の中から X ジェンダーやノンバイナリーが排除されている感覚があります。いないことにしないで欲しいです。

- 正常な生殖器及び性器は取れない、また、一度とってしまうと更年期障害になることは免れないようなので、仕方なく手術は受けない方を選びました。まだ諦めてないですが。
- 整形にかかる費用を捻出できない事。強迫観念があり、整形が医学的な観点から心身の再生に必要であると判断される等した場合は、保険治療で施術を受けられるようにして欲しい。

ら戸籍上の性別も「X」にしたい。

- 日本ではバイナリーな性別しか登録上の性別がないため、変更したくても変更先がない。
- 日常でつかう通称名だけでも変更したいと思っているが、職場でカミングアウトしていないため相談しづらい
- 特別困ってはいないけれど、本名 (戸籍上の名前) が 1 人 1 つであることに違和感を感じる
- 当事者の体験の情報が少ないし、そもそもの選択肢が分からない（調べれば分かるのかもしれないけど…）。あと、身体違和があるけど、手術は怖いしお金かかるし現実的に難しいだろうなと思っている。自分がどうなりたいのか、自分でもまだよくわからない。
- 中年になり完全にトランスするにも難しい年齢の人は多いと思う。社会的に折り合いをつけながらそれでも身体の性別とは違うと思いながら生きている。ノンバイナリーや X ジェンダーという考え方は、そうした人を救う概念でもあると思う。
- 地方都市在住だとジェンダークリニックが少なく、診察受付をしていない（限られた患者にしか対応しない）ことが多く、医学的トランジションへのアクセスが困難性、またトランスフェムの場合、ホルモン治療を受けると SRS が保険適用外になってしまう混合診療の問題や、長期にわたるホルモン治療によって反転法での SRS の際に造膣が困難になるなどの問題があってホルモン治療に踏み切るタイミングなどがむずかしい
- 地方に住んでいるため、クリニックの情報やアクセスが困難。胸部の手術を強く希望しているが、初めの一歩でつまづいている。
- 地方にジェンダークリニックがない（少ない）
- 男性と女性が入り混じっている認識のため、トランスする身体がない
- 男女以外の性別が法的にも医学的にも可能な状況でない
- 造膣や豊胸しない外科手術が存在しない (または存じない)
- 先日、ジェンダークリニックの医師に、先に精神科に通ってもらったほうがいい、

D. トランジションにおける困難に関する自由記入一覧

注意：差別に関する具体的な記述があります。

- 門番行為があるのでジェンダークリニックには行きたいとすら思わない
- 名前を変える事や性別変更のハードルが高い
- 名前の変更により自分の経歴が分断される不安、戸籍の性別を男女どちらかにしかできないので変えてもしっくり来ない
- 殆どのジェンダークリニックでノンバイナリーの存在が想定されていない。例えば、お問合せの選択肢が、MtF と FtM の 2 種類しかない所があるなど。
- 法律上に性別が選択不可能、多機能トイレの使用が事実上のカミングアウトの可能性と差別の存在による使用困難さ、ごく近年まで身体的治療の対象外とされ今なお身体的治療の対象外とやすいことでの困難さ、戸籍上の性別の扱いを受けること。
- 法的に男女でない取り扱いを望んでいる。
  日本のジェンダークリニックではホルモンパッチの扱いがない
- 法的には男性になりたいし、周囲からも既に男性と見なされることが多いのに手術やホルモン治療が必要になってしまう。そのままの身体でも戸籍を男性にしたい。
- 保険適応での手術のハードルが高い
- 保険が適用されず高額になる
- 費用やサポートの不足
- 乳首を目立たせたくないだけなのに、パッド入りの下着か” ナベシャツ” の 2 択しかない。バイナリーにトランジションすることを前提とされている息苦しさがある。
- 日本の戸籍には男・女しかないので、どちらに属しても誤っている状態になる。
- 日本ではまだ二元的じゃない性別があまり知られてないため、様々な場面で性別を訊ねられる際に「男・女」のどちらかで聞かれてしまうことが苦痛。出来るな

- 貧困。自分の受けた性暴力を矮小化される事
- 不完全身体の苦痛感
- 婦人科に行く必要がある時があるが、とても苦痛
  服装の強制
- 複数のマイノリテイにより、LGBT のコミュニティにもなかなか加われない、仲間として意識されてるか不安
- 母親はきちんと理解して受け入れてくれたが、叔父さんやお婆ちゃんは受け入れづらいようだった。
- 訪問介護中に女性の障害者の利用者さんからのセクハラ。入浴介助中にパンツを脱がされた。
- 無意識に決めつけられること
- 恋愛について話をする時に、バイナリーな次元で語られること。最初から当然のようにシスジェンダー、ヘテロセクシュアルの女性として想定され話が進むこと。
- 恋愛や性愛含む自分自身の行動や嗜好をもとに周囲からミスジェンダリングをなされることが多すぎて、自分自身もそれを内面化して自分自身を蔑ろに扱ってしまう。
- 曖昧で、日本ではまだ理解が進んでいないジェンダーアイデンティティのため、LGBTQ コミュニティ内でも排斥されるのではないか、自分のような存在は想定されていないのではないかという不安感がある

換したいのかと聞かれるようなこと）

- 男女制服しかないのがすごく嫌でした。見た目で「性別」を探られることも怖いですし、なにかと身体的特徴をある二元的な性別に結びつけるような発言を聞くと毎回程度は違えどショックを受けます。
- 男女二元論かつヘテロセクシャルが前提の就労環境にしか恵まれず、現在、無職・生活保護を利用している。同時に、心疾患を患ったため、療養中にあり、現在は休職活動を行なっていないが、回復後、就職活動を行う予定である。しかし、この際に、ジェンダー・セクシャリティの問題が、大きな壁となり、また、それを乗り越えられる支援団体と繋がれていない状況にある。この状況なので、常に孤立感・将来への不安を感じている。また、何よりも、無事にその壁を乗り越え、再雇用に結びついたとしても、雇用形態の不安定さ・満足のいく収入・本当にその職場が安心できる環境なのか等、さまざまな不安要素が待ち構えており、心身の回復や自信のアイデンティティを認められるようになるまでに時間がかかると思っている。
- 男性からの身体暴力及び性暴力
- 東日本大震災に被災したトランスジェンダーの方が避難所での生活やナプキンの配布などで苦労した経験を知り、私も避難所を使えないかもしれないと不安になっています。
- 同じジェンダーの人との出会いがほぼない
- 同性のアーティストなど同性をファンだと言うと同性愛者か？と聞かれた。男性としか肉体的関係、付き合いをしたことがないがどう答えていいか分からず否定してしまった。
- 特に確認してもらえることもなく、シスジェンダー（あるいはヘテロセクシュアル）だという前提で勝手に私についての話がされること。
- 二元論的なジェンダーシステムによる排除 (いろいろなところで問われる性別、スポーツ)、「ちゃん、くん」呼び分け、自分のジェンダー (かつセクシュアリティなど) を想定された上での会話 (「彼氏/彼女いるの？」)
- 非常時（災害や収監）にホルモン治療ができないこと。

- 就職活動において、性別の選択肢が男女しかない場合が多い。また、「その他」「回答しない」を選択した場合も、リクルーター等から「女性ですよね？」と確認されたことがあるため、選択肢がカムアウトやアウティング (典型的なバイナリー規範に適応していないと企業側が区別できる) のための道具として機能している場合があると感じる。
- 就職活動をする際に不利になるのではないかという不安
- 十分に機能している相互扶助コミュニティがない
- 女の子だから～と言う決めつけでものを言われることがとても不快。ですがこれは自分の性別に確信を持っている人に対してでも良くないことだと思います。
- 女性ジェンダーや男性ジェンダーを押し付けられることを子供の頃から経験していて、毎度非常に不快になります。差別をしている意識が無い人が多く、最近は相手の知識に応じてそもそもコミュニケーションを避けるようにしています。
- 女性と自認している友達といる時に友達が女性専用車両に乗ると、カミングアウトするか迷うが、カミングアウトできずに渋々着いていく。周囲の目線が気になる。
- 常に女性で一番とか女性で初とか女性では珍しいと言われる
- 人の目が気になってトイレに行けない。僕は女性に見えやすいらしく、友達とトイレに行く時、みんなのトイレを利用したいが説明が怖くてできないため女性トイレを利用することになり、すこしつらい。
- 政治家や著名人による差別的発言、彼らが後から行う弁明の対象にすらなっていない

  自治体や企業の施策などで LGBTQ に関するものの対象になっていない、認識されていないただの甘えと認識される、身内からもそう認識されて行き場がない
- 正規職につけない
- 設問内容と見当違いだったら申し訳ないのですが…パートナーの性別によって自分の性別をミスジェンダリングされることがいつまで続くか不安です。
- 大きな括りで一纏めにされ、誤解されること（性自認が一致しないと言うと性転

ニケーションを避けられる)

- 自身が経験した、経験している、および不安なことについて、追加したいことをこちらにお書きください
- 自分は回答時の 2 ヶ月後に就職する予定だが、学生と労働者で違う環境、違う差別を受けるのではないか不安。
- 自分以外のだれかが(任意のジェンダーアイデンティティ)を名乗ることにたいしては、「あなたがそうだと思うならつねにすでにそうだよ」と思うが、じぶんがノンバイナリーを含む(allo シスヘテロではない)任意のジェンダーアイデンティティを名乗ることに、うまく言えない不安感がある。いままで、allo シスヘテロとしても(?)なんとか生きてこられてしまったにも関わらず、わたしが名乗ってもよいのか、というような。他人に名乗ってもいいと思いながら、自分に対してこのように感じるのは、あらゆる(任意のジェンダーアイデンティティ)を名乗るひと/名乗らない人にたいして、ダブルスタンダードのような気がしている。つまりわたしに差別意識という構造が根ざしているということにつねに直面し続けている。
- 社会に出た際にジェンダーロールに従うことを強制される、圧力をかけられること。
- 社会のほとんどの場所がバイナリなのでカムアウトしたところで具体的なメリットはないことが多いが、カムアウトしなければ本当にないものとして扱われるのでメリットが少ないのにカムアウトすることになる。自分が受けたセクシャルハラスメントの経験が「女性の経験」あるいは「バイセクシャル・パンセクシャルの経験」の中に吸収されてしまいノンバイナリーとしての言葉を積み重ねることができない。
- 社会的な無理解(マスコミや世間一般の意見などの)
- 宗教内での無理解
- 就活時やアルバイト時などのフォーマルな服装を求められる場で、服装に困る上にカミングアウトしたくないので相談もできない
- 就職活動での不利な取扱

- 見た目で性別を決めつけられる
- 見た目を無性っぽくしないと勘違い扱いされる
- 現在ノンバイナリーとして自己を認識しているが、ホルモン治療や外科手術等の身体的な医療措置や、改名は考えていない。そのため自分のノンバイナリー性を証明できるものが無いように思う。改めて就労する際に要求する扱いが通るかどうか考えるたび憂鬱になるし、そもそも要求できるほど自分に勇気があるかも分からない。
  広義にはトランスジェンダーの一人として自己を位置付けながらも、医療的アプローチではなく社会的な扱いの変容を望む身としては、誰の判断を仰げば認められるのか、何をすれば自分にとって正当な扱いを受けることができるのか分からない。
- 現状トイレなどのジェンダー化された場所を使いたい場合は AGAB の方を使っていますが、なんとなくしっくり来ない気がしていつも不安です。
- 孤独。マジョリティはおろか、セクシャルマイノリティの人たちからも理解されないことが多い。居場所がない。存在しないことにされていると感じる。
- 差別的な言動への同調強制
- 歳を取るにつれ、結婚や子供を持つことに対する周囲からのプレッシャーがあります。
- 仕事に付くときの選択肢がたとえば制服がジェンダー化されているなどの理由で狭くなってしまう。
- 子宮頸がんワクチンをレディースクリニックで受けたとき、私が「シスジェンダー女性で、性行為や恋愛の対象が 3 次元の男性の人間である」ということが前提の上、子宮頸がんや子宮頸がんワクチンに関する説明を受けさせられたこと。
- 私のジェンダーアイデンティティについて多くの人が無知であること
  私のジェンダーアイデンティティについての説明を要求されること
  私のジェンダーアイデンティティ上記2つの理由から、カムアウトにかかる労力が大きく、カムアウトが困難であること
- 自己紹介の際に属性を語りづらい、語った際に腫れ物のように扱われる (コミュ

めどのような振る舞いや服装、アイデンティティが本当に「自分らしい」のかすら分からず、なので自分のジェンダーアイデンティティが 20 歳にしてまだ分からない。所謂「中性的」なファッションをしていないと X ジェンダーとは見られないというか、その割り当てられた「女」として見られてしまい、それを当然のことだと受け入れてしまっている自分もいるが、確実に自分は「女」ではないと思っている。女性と見られることに違和感を感じる。かと言って男性では確実にないので、まだクエスチョニングである面が大きいと思うが、その「分からない」という状況がすごく自分は不安定に感じる。アンチカテゴリーであるべきなのに二元論に当てはまらない「何か」でないと受け入れられない自分がいる。

- 基本、男女トイレと多目的トイレしかないので後者を使っているが、去年「健常者が多目的を使うんじゃねえよ」と赤の他人に怒鳴られて以降、ビクビクしながら多目的トイレを使うようになった。
- 軽く見られている気がする
- 血縁関係がある家族にカムアウトしたとしても無理解と異常と言われそうだと思っている
- 月経不順により産婦人科に行くはめになり、カミングアウトは怖くてできず、女性ホルモンを飲む羽目になった。それが嫌で別にトラウマ (性同一性障害の診断受けた幼馴染にトランスでは無いと否定された) あって避けてた精神科に行って (この時トラウマの原因だった友人の言葉ガン否定してくれたのでマシになった) トランスに理解のある産婦人科を紹介してもらった。

  金が無くて手術を諦めてるのを良かった、貴方だけの身体では無いと言われた。

  スカートも赤もピンクも大嫌いだけどせっかく女の子に産まれたんだからとかかわいいんだからとか言われて嫌がっても履かされた (諦めて小学生の時は年に 2,3 回、中学からは制服で馴れた)

  ちゃん付けで呼ばれたり女性として性的対象に見られるのが心底嫌だ。男として男が好きなのであって女じゃない。

  もっとある気はするけどしんどいのでストップします。

なった」という褒め方をシスジェンダーのみならず様々なジェンダーの方からもされるのですが、とてもモヤモヤとしております。声の音程で男女二元論によるそのジェンダーの固定観念に当てはまる「らしさ」を押し付けることは、その「らしさ」に当てはまらない人をふるいにかける、落とす行為だと思っており、ミスジェンダリングにも直接繋がることなので辞めて欲しいなと思っています。

- もっと Q ＋についての認知が広まるといいのにと強く 切実に思う
- 悪意ゼロで性交渉の方法を質問されること
- 悪気なく「〇〇な女だね」「すてきな女性になってね」「モテるよ」などと言われるのがつらい。
- 一般に「女性運動」と理解される運動（反性暴力のイシューがその典型）の集会や街頭行動に参加する経験や、事務的なしごとを担当することが少なくないが、それらの場面で、問題ある行動をする具体的な人物を想定しながら行なわれる「おっさん」批判や、自分がそのなかでも例外的な「男性」として扱われるのがとても居心地が悪い。運動によっては初めから参加者が「女性」限定とされる例もあるが、これをどう肯定／否定して良いのかわからず、モヤモヤしている。
- 一部の過剰な支援要求により、誤解が生じていると感じる
- 英語ではない外国語を勉強しているのですが、バイナリーな要素の強い言語なのでしんどいです。アカデミックな機関主催の教室にも通いましたが、ノンバイナリーの存在は全く想定されておらず、ジェンダーニュートラルな表現について質問するのもはばかられる空気でした。
- 学校現場で、「トランスジェンダーなら髪の毛を短くしてもいいけど、そうじゃないなら伸ばしなさい」と頭髪について指摘された。また、家の外でのトイレについて、スカートを履いていないと男性だと思われて、女子トイレに入りづらい。でもそこまでパス度が高い訳でもし自分のジェンダーアイデンティティが男性でもないので男子トイレに入るつもりも一切なく、トイレに行くことに不安を覚えている。
- 割り当てられた性別は女であり、今まで「女らしく」と育てられてきたのでぼんやりとした違和感はあったものの、それを言語化出来ず内面化してしまったた

- トランスジェンダーのヘイト活動について見聞きすること
- トランス差別的な言質に引っ張られてしまう友人が twitter 上の多く、縁を切ったことが何度もある。ある程度理解があってもトイレを使うのにパスポートを導入するとかどうかなというくらいの人もおり、本当に恐怖。そのため最近は外出時のトイレは誰でもトイレを使っているが、なかなか探すのも大変で困る。
- トランス女性 (MTF) の立場と存在を利用した、悪意あるシスヘテロ男性の、女性専用スペースへの侵入が怖い。そしてそれをトランス差別と糾弾する現在の風潮はおかしいと思う。「身体が男性、心は女性、恋愛対象は女性」という人の存在は否定しないが、そういった「本物」の方よりも「性暴力に利用したい男性」が圧倒的に多い、またはこれから爆発的に増えると思う。
- トランス女性であるというだけで世の中のあらゆる場所から排除され、変態・性犯罪者呼ばわりされたり、猛獣扱いされたりすること
- ナベシャツを使用したいが親に相談しないと買えない（ネット通販でしか買えない）ので 18 歳になるまで使用できない。（1 人で買えるようになったらしれっと使うつもり）
- ニューロジェンダーの日本語情報が少ない。日本語圏の発達障害の当事者運動の情報が少ない。AutismSpeaks 以外が透明化されている本邦への懸念。賃金差別。
- フェミニズムからの排除、同性婚運動からの透明化、BL 批判における存在の想定のされてなさ (l LGBTQ+内でもマジョリティからも)
- ほぼ実害を被っていないが、男性の典型らしい要素を求められることに違和感を覚える。ノンバイナリーのマイクロラベルを持っていても、実態としてはシスジェンダーとほとんど変わらず、自分がジェンダーのマイノリティである感覚はかなり希薄。
- マイノリティ関係以外のイベントや交流会での無理解
- ミスジェンダリングとは違うのですが…自分は現在移行の途中 (主にホルモン剤治療を受けています) なのですが、よくインターネットの仲間内で男性ホルモンの摂取の話をします。その時に時を経て低く変化していく声を「声が男らしく

稀にある/多目的トイレ以外に洗面所を含め個室化された化粧室がない

- カムアウトを避けられる
- グループホーム入所中だが、ある入居者と支援者の性的マイノリティに対する対応が酷い。入居していたトランスジェンダー（MtF）の方に対する対応が酷く、その方は適応できず、転居した。同性婚や性的マイノリティのニュースが流れたりすると、トランスジェンダーに対する差別的仕草をする。その時はなんとも言えない気分になる。20 年，40 年ほど離れているので、時代が違うのかもしれない。

  私は生物学的男性だが、この肉体をもって男性とも女性としても見られることが苦手である。障害者の就職支援団体やハローワークに言えていないのであるが、かなり肉体労働を勧められる。

  以前の職場では、パチンコや風俗店の話題が多かった。生物学的男性が多い職場であったためか、私を男性とみなして、そのような話題をされることが多かった。マジョリティ女性が多い職場なら、一発でアウトだろう。

  本当に苦痛だったが、一番年下のためもあるのか、やめてと言えず、はぐらかすのに必死だった。辞める理由の一つになった。
- シスジェンダー並の人生を歩むことを求められる（例：トランジションにかかる時間やお金を考慮されない、仕事が見つかりにくいと理解されない等）
- その属性をもった役割を演じる必要がある（例えば母親）
- そもそもノンバイナリーであることを明かすとどうなるのか見当がつかない
- デミセクシャルアセクシャルという自認なので、居場所が常にないと感じます。また、アセクシャルは性経験がない人が多数と思いますが、経験がないことへの偏見が社会から是正されると良いと思います
- トイレを使いにくい。心と体の性別が違いすぎて、、、だれでもトイレを使うことが多いが視線が気になる
- どちらかの性別ではないのに、勝手に身体性別と見なされ、恋愛対象として友達から見られることが不安だ。身体が同性だからと言って過度なボディータッチはしていいものではない。

である自分からしたら、寧ろその活動は警戒対象。そのくせ「LGBT」と、都合のいい盾にするときだけ担ぎ出されることに不信感

- SNS でのヘイターからの集中砲火。トイレ問題の犯罪者化。女性は守るけどトランスジェンダーは守らない言説。
  信頼している人物からの自身のジェンダーに対するトランス差別を受けると、不意打ちの奇襲すぎて心身の調子を崩してしまった。
  AGAB に従ってトイレを使用しているのに、そのときの服装が AGAB の性別の正解出なかったというだけで、清掃員に拒絶反応をされた。
- SNS で誹謗中傷されたことがある。一部フェミニストから排除されがち
- Twitter などの web 上で（女性の安全についてなどの）特定の話題に混ざって出現する、あるいは一般的な語（「ノンバイナリー」など）で検索した際に容易に出現する、差別的な言説や誤解・偏見を拡散するような情報。自分自身の精神的負担になるのと、もともと差別的ではない人（特にシスジェンダー女性）がそれらの情報を信じてトランス・ノンバイナリーに排除的になっていくのではという大きな恐怖を日々感じています。チェックした「LGBTQ+運動からの排斥」とも関連した不安です。
- X ジェンダーやノンバイナリー，中性，両性は、どちらからも理解されにくい。
  男 or 女の二元的に生きてる人達からも理解されにくいし、性同一性障害等の方々からも理解されにくい。
  どっち付かずな中途半端な人だとか、優柔不断だとか、なんとなくファッションでそんなこと言ってるだけだとか、色々と揶揄される事が多い。
- アウティングをされたことがある
- アジア系の見た目と複合した差別
- アポジェンダーという名称が日本において有名ではないため、アポジェンダーの情報にアクセスする際に困難がある。
- インターネット上でミスジェンダリングや差別的な反応が来ること
- カムアウトしたことを忘れられる
- カムアウトしていないため身体的男性を理由に力仕事を要求されることがごく

を期に「治った」と認識されている。

10. いわゆる女性らしい体型（下半身がボリューミー）であることもあり、違和感のないマスキュリンな格好が難しい。

11. 持病があり、日常的に″婦人科″に通院しなければならない。

12.″婦人科系″の持病について言及すると、ミスジェンダリングされる。

13. 日々の些細な違和（女性社会寄りのコミュニケーションに馴染みきれなかったり、男性社会寄りのコミュニケーションをとったり）から、女性中心のコミュニティ（職場やサークル等）でいじめ・嫌がらせを受けるなどして排除された。

14. 男性中心コミュニティでは女王的な扱いを受けるか、お客様扱いされるか、ボスの女扱いされるか、ネタ扱いされるか、いない扱いされるかのどれかしかない。

15. 制服がスカートしかなかった。

16. ミスジェンダリングされないために、ジェンダーやノンバイナリーとは何かから説明しなければならない場面がある。

17. 職業上の場面等で何か能力的に優れている事を示すと、不快感を露わにされたり、「女性なのにすごいね」と過剰に持ち上げられたりする。

18. 汚れる仕事や力仕事を率先してこなそうとすると、遠慮されたり戸惑われたりする。

19. 「長」の立場は与えられず、良くて「サブ」や「副」の立場を与えられる。

20. フォーマルな場ではフェミニンな格好以外できない。

- AFAB で男性寄りの性自認だけどピンクが好きだったり女性の服を着たりメイクをしたりなど一般的な男のジェンダー規範に沿っていないのでトランスの中でも「本物じゃない」と差別される事がある
- LGBTQ+運動から排斥されてるって、私達が思っちゃうこと。セルフネグレクトみたいだ！
- LGBT からの除外
- LGBT と最近良く聞きますが、ゲイとトランスジェンダー（身体男性）しか対象にしていない。バイ（レズビアン寄りかもしれない）またはアセクシャル、身体女性

また、大学のマナーセミナーでは外見から女性として扱われ、女性に求められるマナーとしてお辞儀の仕方や立ち方を女性全員が立たされる形で断れない(カミングアウトできない) 空気の中、女性らしい仕草を求められた。
また、大学のメイクセミナーでは、女性向け男性向けの区別がされており、どちらも選べなかった。大学に申請して匿名で戸籍とは違う性別のセミナーを受けたが、身体的な男性にむけた講座しかなく、受講しづらかった。

- 1. 下の名前が女性を想起させる名前である(〇〇子)ため、ごく親しい間柄でない人や女性として接していない人からは名字で呼ばれたいのに、下の名前で呼んでくる人がいる。初対面では名字しか名乗らないのに下の名前をわざわざたずねたり確認したりしてくる人がいる。
  2. 異性愛規範に基づいた話題を振られる。私はパンセクシャルであるために苦痛。異性も同性も好きという感覚ではないが、説明してもそれが伝わらない。私にとってすべての人(少なくともこれまで出会った人すべて)は異性(同時に同性)でしかない。
  3. 女性差別反対に言及すると、女性にミスジェンダリングされる。
  4. ユニセックスまたはアンドロジナス、ジェンダーレスな格好をすると、ジロジロ見られたり、駅構内等で女性からぶつかられたり靴を踏まれたりすることが増える。フェミニンな格好の時は男性からよくぶつかられる。
  5. カミングアウトした時に「どこが男なのか証明しろ」という圧力がかかる。ペニスがない事や筋力がない事、身長の低さ、声の高さ、しゃべり方、フェミニンな服装等に言及される。
  6. 夫と法律婚しているため、夫の配偶者＝女性という固定概念の元、ミスジェンダリングされる。 7. 幼少期に周囲の大人から、いわゆる男の子らしい興味関心は積極的に肯定されなかった。(ミニカー遊びよりおままごとや人形遊びに誘導されることが多かった)
  8. 親から大学受験時、「女の子だから資格が取れるところへ進学した方がいい」と理系への進学に消極的に反対された。
  9. 両親には両親が理解できる範囲でと配慮してカミングアウトしたが、法律婚

が何言ってるの」とからかわれる。

- ・性別を感じさせないデザインの服や靴が少ない、生理用品のデザインがフェミニンなものしかない等、製品デザインに強い偏りがある。
  ・日本の情報が非常に少なく、自分が参考にできるロールモデルが殆どないため、壁や疑問にぶつかる度に社会的リスクを負って試行錯誤しなければならない。
  ・反対の性へ移行する性同一性障害と異なり、ジェンダークリニックに行っても具体的にできることがない。何をどうすれば社会的に不愉快な体験を無くせるのかが分からない。
- ・性暴力の相談のために相手や自分のセクシュアリティを言わねばならず、しかも相談相手に伝わらない
  ・妊娠の予定がないのにミスジェンダリングにより妊娠中に投与してはならないとされる薬を勝手に避けられる (それで治るかもしれない疾患でも)
  ・カミングアウトして就職活動をしたら好感を持たれているのに経営判断で落とされる
  ・自分としては異性と交際しているつもりなのに同性愛者だと思われる
  ・見た目が男女どちらともつかないので周りの人が知人にアウティングを求めてしまう
  ・自分の声が思った性別のものにならないとき、電話など声だけを使った通信手段が使えない
  ・性別違和の診断書が欲しいときにトランスジェンダーを自認していても「あなたは違う」と医師に拒否されたことがあった
- ・大学の授業で、教員から「私が学生に「さん」を付けるのは問題にされたくないからだから」「男がスカート履いてたら変でしょ？」「男性とか女性とかもしかしたら「中性」もいるかもしれないけど」と笑い話にされたり、嘲笑されたりした。カミングアウト出来そうにない。
  ・就活で自分の望まないスーツや振る舞いをしなければならないのか、不安。(親からは「我慢しなさい」と言われた)

C. 差別に関する自由記入一覧

注意：差別に関する具体的な記述があります。

- 「できれば「彼女」という三人称は使わないで欲しい」等、カミングアウトには至らない程度の訂正を周囲にする時、伝え方に困る
- ・ノンバイナリーであると親に何度も親に伝えても、親は外で私を指すとき「娘」と呼び指す

  ・ [REDACTED] の運営で何度も自分はトランスのノンバイナリーであると伝えても、「女性のための」「シスターフッド」「女性差別への抵抗」と運動の中でノンバイナリーだけでなくあらゆるクィアを透明化される

  ・自身の障害についての相談窓口に相談してもバイナリー規範での話となり何も救いにならない
- ・享受できるコンテンツの少なさ（当然のように「” 男女” しかいない！」という前提で描かれたコンテンツが多すぎる！あまりに！）
- ・見た目に割り当てられる性別で判断されて、その「異性」と見なされる人から性暴力を受けること。

  ・ SNS 上でカミングアウトしていることを、 SNS をしていない（と思っていた）家族に見られている恐怖に晒されていること（だと言うと、「それを書かなければ良い」と思われるのではないか、すなわちこの社会から私たちの存在が消されてしまうのではないか、という強い恐怖がある）。

  ・精神科で心理検査を受けた際、質問紙で「異性関係に悩んでいる」等の記述を多く目にする。うざったくて回答しなかったり適当に回答したり、（好意的に解釈して）セクシュアリティに関する悩みがあるか、ということを回答したら、「検査結果」として「異性関係に問題あり」という所見を書かれる。かつ、「同様の回答について回答のバラツキがあること」を理由に、検査結果の妥当性に疑義を付けられる結果となる（診断はされ、治療は受けているが）。

  ・「かわいい」ものを欲したり髪を伸ばしたりしようとすると「いい歳したオジサン

6. メタ情報

最後に、あなた(たち)について、教えてください。

年齢を教えてください
*これは、年齢層とアイデンティティを表す用語などについての相関性を確認するためです。英語圏では相関性がみられることが、Gender Census からわかっています。
{回答しない, -10, 11-15, 16-20, 21-25, 26-30, 31-35, 36-40, 41-45, 46-50, 51-55, 56-60, 61-65, 66-70, 71-75, 76+}

どこの国から回答してますか？
{回答しない, 日本, その他[自由記入]}

英語版 Gender Census に回答したことはありますか？
{はい, いいえ}

お疲れさまでした。最後にフィードバック等がありましたらこちらにお書きください
[自由記入]

書きください［自由記入］

You are valid!

トランジションについての質問について答えてくださって、ありがとうございます。

5. トランジションについて

次の項目では、具体的なトランジションについてお聞きします。飛ばしたい場合は、次の選択肢で「飛ばす」をお選びください

トランジションとは:「セックス、ジェンダー表現、人称代名詞やライフスタイルなどを自身のセルフイメージに近づくよう、能動的に修正するプロセス」
https://lgbtq.fandom.com/ja/wiki/%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B8%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3

トランジションについての質問に回答しますか？
{飛ばす, 回答する}

[「回答する」を選んだ場合]
回答を選んでいただきありがとうございます。どの質問も必須ではありません。

以下のうち、(アクセスの可能性の有無にかかわらず)、希望しているもの、または経験したものをすべて選んでください[複数回答可]
{戸籍名の変更, 戸籍上の性別の変更, ジェンダークリニックの受診, 抗ホルモン療法, ホルモン補充療法(HRT), 顔にかかわる手術, 声帯にかかわる手術, 胸部の手術, 性器にかかわる手術, (上記のどれも希望していない)}

以下のうち、経験したものをすべて選んでください[複数回答可]
{戸籍名の変更, 戸籍上の性別の変更, ジェンダークリニックの受診, 抗ホルモン療法, ホルモン補充療法(HRT), 顔にかかわる手術, 声帯にかかわる手術, 胸部の手術, 性器にかかわる手術, (上記のどれも経験していない)}

社会的、法的、医学的トランジションについて、困難なこと等がありましたらここにお

4. 差別について

次の項目では、具体的な差別についてお聞きします。飛ばしたい場合は、次の選択肢で「飛ばす」をお選びください

差別についての質問に回答しますか？
{飛ばす, 回答する}

[「回答する」を選んだ場合]
回答を選んでいただきありがとうございます。どの質問も必須ではありません。

自身が経験した、経験している、および不安なことについて、お選びください［複数回答可］
{デッドネーミング（誤った名前で呼ばれること）, ミスジェンダリング（誤った性別として扱うこと）, トイレなどのジェンダー化されたスペースの使用, 医療における無理解, 職場や学校における無理解, 社会の中でいないことにされる, LGBTQ+運動からの排斥, 必要なジェンダーケアへアクセスできない, 家族／かぞくからの無理解, アウティング（勝手にジェンダーや指向についての情報を明かされること）, 性暴力, カムアウトできない, カムアウトを強制される}

自身が経験した、経験している、および不安なことについて、追加したいことをこちらにお書きください［自由記入］

You are valid!
差別についての質問について答えてくださって、ありがとうございます。

3. 人称代名詞

ここでの「人称代名詞」は、「ぼく」（一人称）や「彼人」（三人称）などを表します

あなた（たち）の一人称を教えてください（日本語）。**漢字とひらがなは区別されています。**［複数回答可］
{ぼく, 僕, わたし, 私（わたし／わたくし）, うち, わたくし, 自分, あたし, （一人称の使用を避ける）, （自分（たち）の名前）, （クエスチョニング、模索中、または不明）, （時とともに変わる）, 俺, わし, おれ, おら, （any ／問わない／どれでもよい）}

上記選択肢になかった、あなた（たち）の一人称代名詞をあらわす言葉をご自由にお書きください。**（日本語）**［自由記入］

あなた（たち）の三人称を教えてください**（日本語）**。漢字とひらがなは区別されています。［複数回答可］
{彼, 彼女, 彼人（かのと）, 彼男（かのだん）, 彼人（かのひと）, かれ, （自分（たち）の名前）, 渠（かれ）, （any ／問わない／どれでもよい）, （三人称で言及してほしくない）}

上記選択肢になかった、あなた（たち）の三人称代名詞をあらわす言葉をご自由にお書きください。**（日本語）**［自由記入］

あなた（たち）の三人称を教えてください（英語）。英語を日常的に用いない場合、**「英語を日常的に使わない」**をお選びください。［複数回答可］
{**英語を日常的に使わない**, she, he, they/them/their/themselves, they/them/their/themself, ne, ve, ey/em (Elverson), ze, xe, ae/aer, fae, e/em (Spivak), （クエスチョニング、模索中、または不明）, （時とともに変わる）, any/問わない/どれでもよい}

2. 敬称

ここでの敬称とは、「Mx. ○○」や「○○さん」における、「Mx.」 や「さん」を表します

あなた(たち)の敬称として 適切なものを、以下からすべてお選びください(**日本語の場合)**。次の問いとして、自由記入欄がございます。[複数回答可]
{さん, くん／君, ちゃん, たん, (敬称なし), (クエスチョニング、模索中、または不明), (時とともに変わる), (any ／問わない／どれでもよい)}

上記選択肢になかった、あなた(たち)の敬称をあらわす言葉をご自由にお書きください。**(日本語)**[自由記入]

あなた(たち)の敬称として 適切なものを、以下からすべてお選びください。**(英語の場合)**。なお、英語を日常的に使わない場合は、**「英語を日常的に使わない」**をお選びください。[複数回答可]
{ (敬称なし),Mr., -san, Mx., Ms., Mrs., Ind, Dr. など、職業などにかかわるもの, Misc., Pr., Mre., Msr., **英語を日常的に使わない**, (クエスチョニング、模索中、または不明), (時とともに変わる), (any ／問わない／どれでもよい)}

上記選択肢になかった、あなた(たち)の敬称をあらわす言葉をご自由にお書きください。**(英語)**[自由記入]

1. ジェンダー・アイデンティティ

あなた(たち)の性別／ジェンダーを表す表現として適切なものを、以下からすべてお選びください。(次の問いとして、自由記入欄がございます)。**なお、「必ず選んでください」と書かれた選択肢には、必ずチェックを入れてください。**[複数回答可]
{A ジェンダー／エイジェンダー／アジェンダー／ agender, アンドロジャイン／ androgyne, バイジェンダー, バイナリー, ボイ, ブッチ／ butch 男の子／ boy, シスジェンダー, デミボーイ, デミジェンダー, デミガール, enby ／エンビー, フェム, ゲイ(ジェンダーについて), ジェンダー・ノンコンフォーミング／ gender non-conforming, (ジェンダー・)フルイド／(ジェンダー・)フリュイド／(ジェンダー・)フルイッド, ジェンダーフラックス／フラックスジェンダー, ジェンダーレス, ジェンダークィア, ジェンダーヴォイド／ gendervoid, 女の子／ girl 少年, 少女, 青年, レズビアン(ジェンダーについて), 男性／ man, ニュートラル, ノンバイナリー男性, ノンバイナリー女性, **必ず選んでください**, ノンバイナリー, クィア／ Queer, クエスチョニング, 不明／わからない, トランス, トランスジェンダー, トランス*／ trans*, トランスフェミニン, トランス女性, トランス男性, トランスマスキュリン, 女性／ woman, X ジェンダー, X, 中性, 両性, 無性, 不定性, ポリジェンダー, ゼノジェンダー／ xenogender, ニューハーフ, おかま, おなべ, ダイク／ dyke, トランスセクシュアル／ transsexual, ニューロジェンダー／ neurogender, デミ A ジェンダー, 無し}

上記選択肢になかった、あなた(たち)のジェンダーをあらわす言葉を 、いくつでも、ご自由にお書きください。伏字や省略は用いず、すべて書いてください(例:「トランス」と「トランスジェンダー」と「トラ〇ス」はすべて別のものとして扱われます)[自由記入]

【調査責任者】
@sykality [Twitter アカウントへのリンク]

【調査期間】
2023/02/12 - 2023/03/12

上記「対象」に含まれる、すなわち「**ジェンダー二元論でうまく説明されないすべての人**」に含まれる、ということに、同意します。
{はい}

次のことを理解しました：どの段階でも回答をやめてよく、やめた場合、調査者側には一切の情報が送信されない。
{理解しました}

次のことを理解しました：回答を終了し送信した場合、匿名化され、オンライン上ですべての人が見られ、引用、および転載されうる形で公開される。ただし、不適切な回答とこちらが判断した場合、また、個人を特定できる情報を含んでいる場合、回答は公開前に編集ないし削除されうる。
{はい}

この調査では「あなた（たち）」という二人称を、ジェンダーに関してニュートラルな代名詞として用いています。
{了解した。}

B. アンケート内容

・本調査は Gender Census (`https://www.gendercensus.com`) をもとに作成された、日本語ユーザーを対象としたジェンダー調査です。（オリジナルとは異なる人による調査です）

【対象】

ジェンダー二元論でうまく説明されないすべての人。ジェンダー二元論とは、すべての人間を下の二種類に分ける社会的な思想です：

・常に、唯一、そして完全に「女（性）」

・常に、唯一、そして完全に「男（性）」

この調査の対象に含まれるのは、例えば：

・ジェンダーが時間とともに変化する人

・ジェンダーの強度が変化する人

・同時に複数のジェンダーである 人

・ジェンダー・アイデンティティのない人

・ジェンダー・アイデンティティを拒絶する人

・女（性）／男（性）以外のジェンダーである人

です。

【目的】

日本語圏における非バイナリーな LGBTQ+の情報は、深刻に不足しています。そこで、この状況を改善し、わたしたちの経験を世界に伝えると同時に、これを通じて差別を解消し、一方でコミュニティを形成するため、本調査を行います。

【内容】

ジェンダー・アイデンティティ、代名詞、敬称、差別、トランジションについて、年齢、現在住んでいる国など。ただし、**すべて回答は任意です。**

差別

表 A11：ジェンダー・ラベルごとの経験した、している、または不安である差別（ %）

表 A12：年齢層ごとの経験した、している、または不安である差別（ %）

トランジション

表 A13：ジェンダー・ラベルごとの経験または希望しているトランジション（%）

表 A14：年齢層ごとの経験または希望しているトランジション（%）

表 A15：ジェンダー・ラベルごとの経験したトランジション（%）

表 A16：年齢層ごとの経験したトランジション（%）

表 A17: 年齢層ごとの「希望または経験しているトランジション」に対する「経験したトランジション」（%）

付録

A. 図表

生データおよび次の図表は、下記リンク先よりご確認ください。

https://anarchistneko.github.io/an_zine.html

ジェンダー・ラベル

表 A1：年齢層ごとのジェンダー・ラベル（%）

表 A2：ジェンダー・ラベルごとの年齢（%）

表 A3：ジェンダー・ラベルおよび年齢ごとの、選択されたジェンダー・ラベルの個数

一人称代名詞

表 A4a：ジェンダー・ラベルごとの日本語一人称（選択式、%）

表 A4b：ジェンダー・ラベルごとの日本語一人称（自由記入式, %）

三人称代名詞

表 A5a：ジェンダー・ラベルごとの日本語三人称（選択式, %）

表 A5b：ジェンダー・ラベルごとの日本語三人称（記入式, %）

表 A6：ジェンダー・ラベルごとの英語三人称（英語を日常的に使う方,　%）

表 A7：英語三人称ごとの、選択された日本語三人称（英語を日常的に使う方, %）

敬称

表 A8：ジェンダー・ラベルごとの日本語敬称（%）

表 A9：ジェンダー・ラベルごとの英語敬称（英語を日常的に使う方, %）

表 A10：英語敬称ごとの選択された日本語敬称（英語を使う方, %）

す。もちろんそのような情報が必要なアンケートはあるでしょうが、慎重に行っていただきたいと思っています。

確認する際は、少なくとも英語と日本語においては、各言語での選択を別途確認することが望ましいと考えられます。

差別やトランジションに関する質問には、複数の要素が複合した結果の苦痛や困難が報告されており、特に経済的困難と交差するものが少なくありませんでした。ジェンダー・クリニックの受診すら、希望者の半数以上がアクセスできていない状況です。

本調査は、参加者が 443 名と少なく、特に 50 歳以上の方からの回答が少なかったことは課題であり、より大規模な同様の調査を行う必要も考えております。また、代名詞や敬称については、音声による会話（話し言葉）とオンライン上等での会話（書き言葉）を区別していなかったため、より詳細な結果を得るためには、これらを区別する調査も必要であると思われます。また、日本語圏のコミュニティで使われている用語に関する情報が限定的であったため、特にジェンダー・ラベルに関する選択肢は 57 個（+チェック用の計 58 個）と非常に多くなりました。Gender Census に合わせて 1%以上が選択したもののみに限定し、見間違えや選択抜けを防止することが必要かもしれません。

本調査を行ってから 2 年以上が経ちましたが、依然として、非バイナリーな当事者を中心とした大規模かつインクルーシブな調査はあまり行われていないように思われます。一問目から「身体的性別」というワードで出生時に割り当てられた性別をバイナリーに問うものも少なくなく、その時点で回答を断念したという声も当事者コミュニティからは聞きま

結論

サンプル数も少ないため過度な一般化は避けたいのですが、おおまかに次のような傾向がみられました。まず、ジェンダー・ラベルについて、20 代前半の方では、マイクロラベルを含め主に英語圏からの影響を受けたさまざまなラベルを受け入れつつ、自身のジェンダーを説明したり実験したりしていました。また、40 代前半をピークに、X ジェンダー・コミュニティの影響は年齢が上がるにつれて強まっていました。50 代からは、再度自身のアイデンティティやアイデンティティを表す表現を実験したり探求したりしている方が増えていることが示唆されました。

一人称代名詞では、「漢字表記とひらがな表記を使い分けている」というコメントもあったとおり、コミュニティ内では広く表記の仕方が使い分けられていることが示唆されました。敬称や三人称代名詞と比較すると、「any」や「模索中」が少ないのも特徴的です。他者が使用するものは積極的にせよ消極的にせよ広く受け入れている一方で、自分を表す際には固定されたものを使用する方が多いのかもしれません（自分もそうです）。

英日で比較すると、人称代名詞、敬称ともに、英語において例えば「Mr.」を選択する方が日本語において「くん／君」を選択するという傾向はあったものの、無視できない割合で、規範的に合致しない表現を選択する方も決して少なくありませんでした。三人称代名詞や敬称を

表 17: トランジションに関する希望と経験

希望または経験	[希望または経験] (名)	[経験] (名)	[経験]/[希望または経験] (%)
顔にかかわる手術	28	6	21.4
胸部の手術	127	16	12.6
抗ホルモン療法	36	17	47.2
戸籍名の変更	94	28	29.8
戸籍上の性別の変更	106	11	10.4
性器にかかわる手術	79	18	22.8
声帯にかかわる手術	28	2	7.1
ホルモン補充療法 (HRT)	85	50	58.8
ジェンダークリニックの受診	118	55	46.6

表 16: 経験したトランジション[選択式]

	回答数	選択率 (%)
顔にかかわる手術	7	1.8
胸部の手術	16	4.2
抗ホルモン療法	17	4.4
戸籍名の変更	29	7.6
戸籍上の性別の変更	11	2.9
性器にかかわる手術	19	5.0
声帯にかかわる手術	2	0.5
ホルモン補充療法(HRT)	50	13.1
ジェンダークリニックの受診	55	14.4
(上記のどれも経験していない)	298	77.8

名) を比較したのが、表 17 です。医学的、法的トランジションへのアクセスのむずかしさが、ここから読み取れると思います。戸籍上の性別の変更は 106 名の方が希望しているにもかかわらず、実際アクセスできているのは 11 名と、その 10%です。差異が比較的小さい HRT でも、4 割以上の方がアクセスできていない現状があります。また、ジェンダークリニックの受診すら、希望者の半数以上がアクセスできていません。

トランジションにおける困難を問う自由記入では、119 回答が得られました。すべての回答を付録 D「トランジションにおける困難に関する自由記入一覧」として提示します。目立ったのが、経済的なハードルです。「経済」「金」「費用」といったキーワードを含む回答は、本質問に対して得られた回答の 30%にあたる 33 回答得られました。

れないことが多いですが、本調査によれば、決して無視できない割合の方がこれにあてはまることがわかりました。

表 15: 希望している、または、経験したトランジション[選択式]

	回答数	選択率 (%)
顔にかかわる手術	30	7.5
胸部の手術	133	33.2
抗ホルモン療法	39	9.7
戸籍名の変更	103	25.7
戸籍上の性別の変更	117	29.2
性器にかかわる手術	81	20.2
声帯にかかわる手術	29	7.2
ホルモン補充療法(HRT)	88	21.9
ジェンダークリニックの受診	126	31.4
(上記のどれも希望していない)	145	36.2

実際に経験したものの結果が、表 16 です。選択肢及び設定は、希望または経験したものと同様です。トランジションに関する質問に「回答する」を選んだ方は 405 名のうち、選択肢式に回答した方は 383 名 (94.6%) でした。さらにこのうち、「上記のどれも経験していない」を選択していない方は 85 名 (22.2%) でした。全回答者のうち、19%のみが何らかのトランジションを経験したと回答したという結果です。

注目していただきたいのは、なんらかのトランジションを希望していても、多くの方がトランジションを経験していない点です。希望または経験したものに関する質問で「(上記のどれも希望していない)」を選択していなかった方のうち「経験したトランジション」に回答している方 (243

トランジション

注意：トランジションおよび非バイナリーの方が経験する差別について、具体的な記述があります。

心身に関する状況を聞く設問であったため、セクション自体を飛ばせるように設定しました。また、本セクションでは、アクセスの可能性の有無にかかわらず、希望しているまたは経験したものと、実際に経験したものを別個の設問で尋ねました。

まず、希望または経験したものの結果からみていきます。全 10 選択肢からの、複数回答可能のチェックボックス選択式。トランジションに関する質問に「回答する」を選んだ方は 405 名 (全回答者の 91%) でした。そのうち選択肢式に回答した方は、401 名 (99.0%) でした。さらにこのうち、「上記のどれも希望していない」を選択していない方は 256 名 (63.8%) でした。全回答者のうち、少なくとも 57%が何らかのトランジションを経験したまたは希望していると回答したという結果です。

下に、表 15 として結果を示します。ジェンダー・ラベルごとにみると (表 A13)、Cluster 5 を回答していた方は、よく希望または経験していることがわかりました。また、Cluster 4 の方は、ホルモン補充療法 (HRT) と抗ホルモン療法 (ホルモンブロッカー) 以外をあまり選択していない傾向がありました。特にオンライン上の会話では、アライによる主張も含めて、医学的、法的トランジションを希望しない方の経験があまり注目さ

表 14: 各日本語三人称代名詞を選択した方が選択した英語代名詞（%）

	回答数	選択率 (%)
社会の中でいないことにされる	103	71.3
ミスジェンダリング	92	62.2
職場や学校における無理解	73	53.9
カムアウトできない	70	53.0
家族／かぞくからの無理解	80	48.9
トイレなどのジェンダー化されたスペースの使用	63	40.9
必要なジェンダーケアへアクセスできない	57	34.7
医療における無理解	46	31.6
アウティング	38	29.0
LGBTQ+運動からの排斥	44	27.6
性暴力	38	25.9
デッドネーミング	30	19.7
カムアウトを強制される	27	17.1

自由記入では、102 回答を得られました。すべての回答を本稿末に付録 C「差別に関する自由記入一覧」として提示します。就職活動や職場での（ミス）ジェンダリングの不安や、医療現場、法制度、エンターテインメント、宗教など、さまざまな場において、さらには LGBT(Q+) 運動やフェミニズムの現場においてですら、「いないことにされる」「想定されていない」「男女二元論に基づいて経験や表現、アイデンティティ、セクシュアリティなどが解釈されてしまう」といった回答が数多くありました。また、この問題は、性別役割や、災害時を含む非常時、後述するトランジションに関する不安やハードルに関する話題でも、経済的状況と交差する形で繰り返されています。

差別

注意：非バイナリーの方が経験する差別について、具体的な記述があります。

差別にかかわる質問であったため、セクション自体を飛ばせるように設定しました。「回答する」を選んだ方は 431 名、全体の 97.2%でした。そのうち選択肢式または自由記入のいずれかに回答した方は、421 名 (97．7%) でした。全回答者のうち 95%以上が差別を経験した、している、または何かしらの不安がある、と回答した、という結果です。

まず、選択式の結果からみていきます。全 13 選択肢からの、複数回答可能のチェックボックス選択式。順序効果を考慮し、選択肢は回答者ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。下に、表として結果を示します (表 A11,12 も参照のこと)。

同様の調査としては 2019 年に 1 万名以上を対象に行われた「第 2 回 LGBT 当事者の意識調査」（ライフネット生命保険株式会社, 2020）[12]があり、「MTX（599 名）」の 47.4%、「FTX（718 名）」の 45.0%が性暴力を経験したと回答しています[13]。本調査でも、平均で 25.0%、40 代後半以上では 40%を超えるなど、決して無視のできない頻度で報告されました。

[12] https://www.cosmopolitan.com/jp/trends/society/a41132776/lgbtq-and-sexual-violence/

[13]「第 2 回 LGBT 当事者の意識調査」では「服を脱がされた」「性的な言動でからかわれた」などの、いくつかの具体的な記述を通じて性暴力を規定していますが、本調査では具体的に書くことはあえてしませんでした。ただし、自由記入欄には、性暴力の具体的な記述もありました。

表 13: 各英語敬称を選択した方が各日本語敬称を選択した割合(6 名以上)

	さん	(敬称なし)	(any)	ちゃん	くん／君	(クエスチョニング)	(時とともに変わる)
-san	95.4	30.8	13.8	16.9	24.6	15.4	9.2
Mx.	89.1	30.4	8.7	15.2	21.7	19.6	13.0
(敬称なし)	88.4	51.2	20.9	27.9	23.3	7.0	7.0
(クエスチョニング)	90.5	23.8	33.3	28.6	28.6	61.9	38.1
(any)	84.2	36.8	73.7	21.1	31.6	21.1	26.3
Ms.	80.0	40.0	20.0	33.3	6.7	13.3	13.3
Mr.	75.0	25.0	50.0	12.5	50.0	12.5	0.0
(時とともに変わる)	83.3	16.7	16.7	33.3	0.0	50.0	66.7

6.3 英語 × 日本語

英語と日本語の敬称選択について、相関を確認しました。「日常的に英語を使わない」にチェックを入れなかった 138 名 (全回答者の 31.5%) のうち 6 名（4.3%）以上が選択した英語表現について、各日本語敬称が同時に選択された割合を表 13 に示します（全結果は表 A10）。着目すべきは、「Mr.」と「くん／君」といった、英日で同様なジェンダー化がされている（とされる）表現でも、いずれか一方のみを選択する方が少なくないことです。「Mr.」の場合、50%は「くん／君」を選択していません。「Ms.」の場合も同様に、これを選択した方の 3 分の 2 が「ちゃん」を選択していないという結果になりました。

りました[11]。

Gender Census (2022) では「敬称なし (no title)」が「Mx.」を大きく上回っているのですが（38.6% vs 20.1%）、本調査では「Mx.」のほうが若干多いという結果になりました（30.9% vs 33.8）（表 6）。自由記入では、「Mr. や Mrs. は絶対に嫌だ」といった旨のコメントが 2 件ありました。

表 12: 敬称（英語、1%以上）

	回答数	選択率 (%)
-san	65	46.8
Mx.	47	33.8
（敬称なし）	43	30.9
（クエスチョニング、模索中、または不明）	22	15.8
（any ／問わない／どれでもよい）	19	13.7
Ms.	15	10.8
Mr.	8	5.8
（時とともに変わる）	7	5.0
Mrs.	3	2.2
Mr. や Mrs. は絶対に嫌だ［自由記入回答］	2	1.4

また、ジェンダー・ラベルとの相関を見ると（表 A9）、英語においても「Mrs.」や「Ms.」はフェミニン、「Mr.」はマスキュリンとされがちなアイデンティティ・ラベルと比較的強く関連していました。例えば、「男性」と答えた方の 14%のみが「Ms.」を選択した一方で、「Mr.」は 43%が選択しました。「女性」と回答した方についてはこの傾向は更に強く、「Ms.」は 40%、「Mr.」は 7%でした。

[11]特に母数が少ない群においては、英語としての容認度の差が結果に強く反映されてしまった可能性もあります。

表 11: 敬称（日本語、1%以上）

	回答数	選択率 (%)
さん	365	82.6
（敬称なし）	117	26.5
（any ／問わない／どれでもよい）	102	23.1
ちゃん	96	21.7
くん／君	80	18.1
（クエスチョニング、模索中、または不明）	67	15.2
（時とともに変わる）	52	11.8
たん	14	3.2
氏［自由記入回答］	9	2.0

でした。「ちゃん」は性別を問わない愛称として用いられることもありますが、注意が必要であるのは変わらないことが示唆されます。また、「さん」はどのジェンダー・ラベルを選択した方も比較的よく選んでいましたが、これが不適切である方も 20%近くいることは注意が必要です。

6.2 英語

英語における敬称も尋ねました。全 16 選択肢からの、複数回答可のチェックボックス選択式、および、自由記入式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。

以下、回答者のうち「日常的に英語を使わない」にチェックを入れなかった 142 名（全回答者の 33%）のうち、選択式または自由記入式に回答した 139 名 (98%、全回答者の 31%) について確認します。最頻の回答は「-san」でしたが、ジェンダー・ラベルによっては選択頻度が大きく異な

敬称

6.1 日本語

敬称として適切なものを尋ねました。全 8 選択肢からの、複数回答可のチェックボックス選択式、および、自由記入式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。Gender Census (2022) では、「[英語では]個人情報を尋ねるどのような書類でも、一つの敬称しか選択できない」という理由で複数選択ができないのですが、日本語圏では日常会話の中でもお互いを敬称をつけて呼ぶ機会が多く、また、関係性等に応じて敬称が異なりうることもあるため、本調査では複数選択可としました。

442 名 (全回答者の 99.8%) が選択式または自由記入式に回答しました。うち、83%（365 名）が「さん」を選択していました。「（any/問わない/どれでもよい）」も選択率が比較的高い (23%、102 名) ことがわかりました（表 11）。自由記入では、「氏」と回答した方が 9 名いた他、「適切な日本語がない」という旨の回答も 2 つありました。

ジェンダー・ラベルと比較すると（表 A8）、「ちゃん」はフェミニン、「くん／君」はマスキュリンとされることの多いアイデンティティ・ラベルと比較的強い相関がありました。例えば、「男性」と答えた方の 12%のみが「ちゃん」を選択した一方で、「くん／君」は 40%が選択していました。「女性」と回答した方についても同様に、「くん／君」は 39%、「ちゃん」は 11%

表 10: 各日本語三人称代名詞を選択した方が選択した英語代名詞（%）

英語三人称	（名前）	（三人称で言及してほしくない）	（any）
they (*themself* 型)	60.9	29.0	18.8
they (*themselves* 型)	55.6	24.1	14.8
she	54.3	28.6	14.3
he	14.3	42.9	14.3
全回答者	60.9	29.3	19.5

	彼	彼人（かのひと）	彼女	彼人（かのと）	かれ
they (*themself* 型)	11.6	15.9	14.5	8.7	11.6
they (*themselves* 型)	16.7	14.8	11.1	7.4	13.0
she	25.7	0.0	20.0	2.9	2.9
he	7.1	21.4	7.1	0.0	0.0
全回答者	15.0	13.5	13.5	6.8	9/8

They は、いずれのかたちも特定の代名詞との強い相関は見られませんでした。*They* を選んだ方がよく「（名前）」を選択していたことは、ジェンダーに関して中立的な代名詞で日本語に定着しているものが、まだ無いことを示唆しているのかもしれません。

表 9: 日本語一人称［選択式］

	回答数	選択率 (%)
they/them/their/themself	72	48.3
they/them/their/themselves	57	38.3
she	37	24.8
（クエスチョニング、模索中、または不明）	19	12.8
any/問わない/どれでもよい	21	14.1
he	15	10.1
（時とともに変わる）	11	7.4
ze	7	4.7
xe	3	2.0
ey/em (Elverson)	2	1.3
fae	1	0.7
ne	0	0.0
ve	0	0.0
ae/aer	0	0.0
e/em (Spivak)	0	0.0

以下、回答者のうち「日常的に英語を使わない」にチェックを入れなかった 149 名（全回答者の 33.6%）について見ていきます（表 9, 表 A6）。*They* が最頻であるのは Gender Census (2022) と変わりません。本調査では *they/them/their/themselves* 型と *they/them/their/themself* 型を区別したのですが、一般的な英語教材では言及されない後者のほうが選択率は高い傾向にありました（38% vs 48%）。

また、ネオプロナウンズの使用について、Gender Census (2022) では *ze* の選択率は 4.7%でしたが、本調査でもほぼ同じく 4.7%という結果が得られました。なお、自由記入設問を設定し損ねていたため、本設問については自由記入はありませんが、「自分の代名詞は *it/its* である」というコメントもありました[10]。

5.3 英語 × 日本語

英語と日本語の三人称代名詞選択について、相関を確認しました。「日常的に英語を使わない」にチェックを入れておらず両質問に回答していたのは、133 名（全回答者の 30.0%）でした。

ここでは *they, she, he* に着目し、日本語表現（選択者が 13 名以上のもの）と同時に選択されていた英語代名詞を表 10 として示します（全結果は表 A7）。興味深いことに、*she* を選択している方は、「彼女」よりも「彼」を選択する傾向にありました (20.0% vs 25.7%)。また、*he* を選択していた方が「彼女」と「彼」を選択している割合は同等でした (共に 7.1%)。

[10] Gender Census では *it/its* や「代名詞の使用を避ける」なども多く見られたため、本来であれば選択肢に加えるべきでした。

表 7: 日本語三人称[選択式]

	回答数	選択率 (%)
(自分(たち)の名前)	248	58.2
(三人称で言及してほしくない)	131	20.8
(any ／問わない／どれでもよい)	72	16.9
彼	60	14.1
彼女	60	14.1
彼人(かのひと)	49	11.5
かれ	32	7.5
彼人(かのと)	31	7.3
渠(かれ)	5	1.3
彼男(かのだん)	2	0.5

表 8: 日本語三人称[記入式, 1%以上]

	回答数	選択率 (%)
{この/その/あの}+人	51	12.0
{この/その/あの}+子	7	1.6
{この/その/あの}+ひと	6	1.4

自由記入では「こそあど＋人」の形式のものが非常に多くみられた他、4 名 (全回答者の 0.9%) から「しっくりくるものがない」といった旨の回答もありました(表 8 表、A5b)。ネオプロナウンズ(新代名詞)としては、「こなた」(1 名)がありました。

5.2 英語

英語における三人称代名詞も尋ねました。全 16 選択肢からの、複数回答可のチェックボックス選択式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるようにしました。

三人称代名詞

5.1 日本語

三人称代名詞(「彼」など)について、まず、日本語におけるデータからみていきます。全 10 選択肢からの、複数回答可のチェックボックス選択式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。

426 名 (全回答者の 96.2%) が記入式または選択式に回答していました。内、16 名(回答者の 3.8%)が自由記入にのみ回答していました。全体の結果を表 7 に示します。Gender Census (2022) では「代名詞の使用を避けてほしい/名前を使ってほしい」[9]は回答者の 11%と、選択率があまり高くなかったのですが、本調査では「(自分(たち)の名前)」がほかを大幅に引き離して 1 位、続いて「(三人称で言及してほしくない)」が 2 位でした。ジェンダー・ラベルごとに見ると、「男性」を選択した方が「彼」を選択している割合(48%)や「女性」と回答した方が「彼女」を選択している割合(54%)はやや高い傾向にありました。一方で、ジェンダーに関して中立的に使用されることもあるひらがな表記の「かれ」は、「男性」を選択した方でも 20%と低く、「A ジェンダー」では 13%、「女性」では 9%でした(表 A5)。

[9]原文: "Avoid pronouns / use name as pronoun"。日本語は英語に比べて代名詞を使わないことが容易な言語であるため("pro-drop language")、本調査では「(三人称で言及してほしくない)」と「(自分(たち)の名前)」を別個の選択肢としました。

等に関する示唆が一切ないため、本調査の対象とはしませんでした。

表 5: 日本語一人称[選択式]

	回答数	選択率 (%)
私(わたし／わたくし)	305	68.8
自分	227	51.0
わたし	209	47.2
俺	114	25.7
(時とともに変わる)	98	22.1
僕	96	21.7
(自分(たち)の名前)	79	17.8
ぼく	73	16.3
おれ	71	16.0
うち	69	15.6
(一人称の使用を避ける)	60	13.5
わし	57	12.9
あたし	56	12.6
わたくし	28	6.3
(クエスチョニング、模索中、または不明)	26	5.9
(any ／問わない／どれでもよい)	15	3.4
おら	8	1.8

表 6: 日本語一人称[記入式、1%以上]

	回答数	選択率 (%)
ワイ	9	2.03
あだ名／ハンドルネーム／愛称	8	1.81
わい	8	1.81
我	6	1.35

一人称代名詞

一人称代名詞(「私」など)を尋ねました。全 17 選択肢からの、複数回答可のチェックボックス選択式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。

443 名(100%)が選択式または記入式に回答していました。内、選択式を回答していたのは 442 名(全回答者の 99.8%)でした。結果を表 5 として示します。選択された一人称とジェンダー・ラベルの結果を比較すると(表 A4)、「男性」を選択した方が「俺」や「僕」を使用している割合は、「女性」を選択した方に比べて高い傾向にありました。一方、「わたし」は「女性」と回答した方に特徴的に多いものの、漢字表記の「私」はどのジェンダー・ラベルを選択した方でも多く見られました。特に「A ジェンダー」を選択した方について、「わたし」の選択率は 47%である一方、漢字表記の「私」は 75%と大きな差がありました。この傾向は、Cluster 3 で共通していました。また、「any」や「模索中」は特徴的に選択が少なく、これはジェンダー・ラベルについて「クエスチョニング」と答えた方でも変わりませんでした。

自由記入式で全回答者の 1%以上が答えたものは、表 6 のとおりになります。表中にはありませんが、「[「自分」を使っているが、]ぎこちないから暫定的」「納得のいく代名詞はない」といった回答も見られました。

なお、英語の場合、一人称代名詞は *I* に限定され、これはアイデンティ

少ない選択肢を選んだ方は、より多くのジェンダー・ラベルを選択している傾向がありました (表 A3)。クラスタごとに見ると、Cluster 4 を選択している方は比較的多くのラベルを選択していた一方、「無性」や「A ジェンダー」などの Cluster 3 に該当するラベルを選択している方は比較的少ないラベルを選択する傾向にありました。また、「不明／わからない」や「クエスチョニング」を選択していた方が必ずしも多くの選択肢を選択しているとは限らなかったことは、特記いたします。

3.4 選択された表現の個数

全体では、平均すると 4.5 個 (SD 3.9、中央値 4) のラベルが選択されていました。Gender Census では、30 歳以下では 31 歳以上に比べて、選択するジェンダー・ラベルの数が多いという結果が得られており、本調査でも同様の結果が得られました[8]。ただし、Gender Census では「若い人はより多くの表現を選んでおり、年上の人はより少ない表現を選んでいる (“younger people are choosing more words and older people are choosing fewer”)」とこれをまとめているのですが、本調査では 21 歳から 25 歳をピークに 50 代前半までは選択数が減少し、50 代後半から再び増加する N 型となっていました (図 2)。

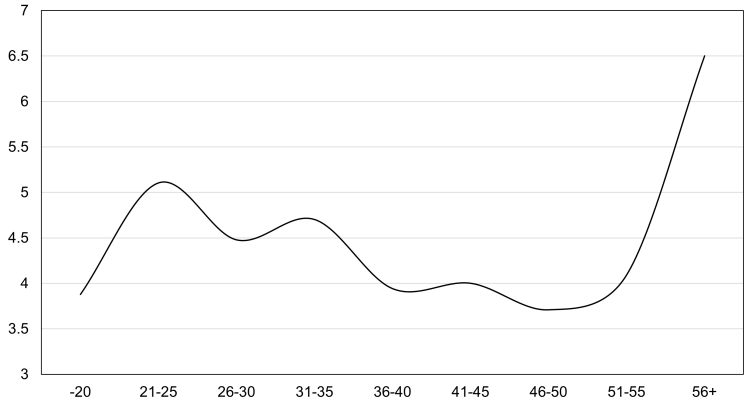


図 2: 選択されたジェンダー・ラベルの個数と年齢層

また、選択された表現と選択された表現の個数の間では、選択者の

[8]Gender Census では選択肢は 34 個であり、記述式の回答は含まないことに注意してください。本結果では、自由記入式のものも集計に加えています

デミジェンダー, バイジェンダー, ジェンダーフラックス, デミボーイ, デミ A ジェンダー, ポリジェンダー, 女の子, ニューロジェンダー, ジェンダーヴォイド, ゼノジェンダー, 少女, アンドロジャイン

- **Cluster 5**
  トランスジェンダー, トランス, トランス*, 男性, ノンバイナリー男性, トランス男性, トランスマスキュリン, ゲイ, トランスセクシュアル, トランス女性, 青年, トランスフェミニン, バイナリー, 少年, 男の子
- **Cluster 6**
  女性, ノンバイナリー女性, レズビアン, シスジェンダー, フェム

「ノンバイナリー」(Cluster 1)と同義と説明されることも多い「X ジェンダー」(Cluster 2)を比較すると、当事者たちのなかではやや使い分けられていることが示唆される結果となりました。「X」や「ジェンダーレス」といった主に日本語圏内で使われている表現と「X ジェンダー」の共起も目立ちました。年齢層としては、Cluster 2 を選んだ方は、40 代に特徴的に多く見られました(表 A1)。

また、「トランスジェンダー」などの表現を含む Cluster 5 は、「A ジェンダー」などを含む Cluster 3 と距離があります。アネクドートですが、「ノンバイナリーならばトランスジェンダー」とするような説明に対して違和感をもつ方も A ジェンダー・コミュニティの方が多く、実体験とも相違なく思います。

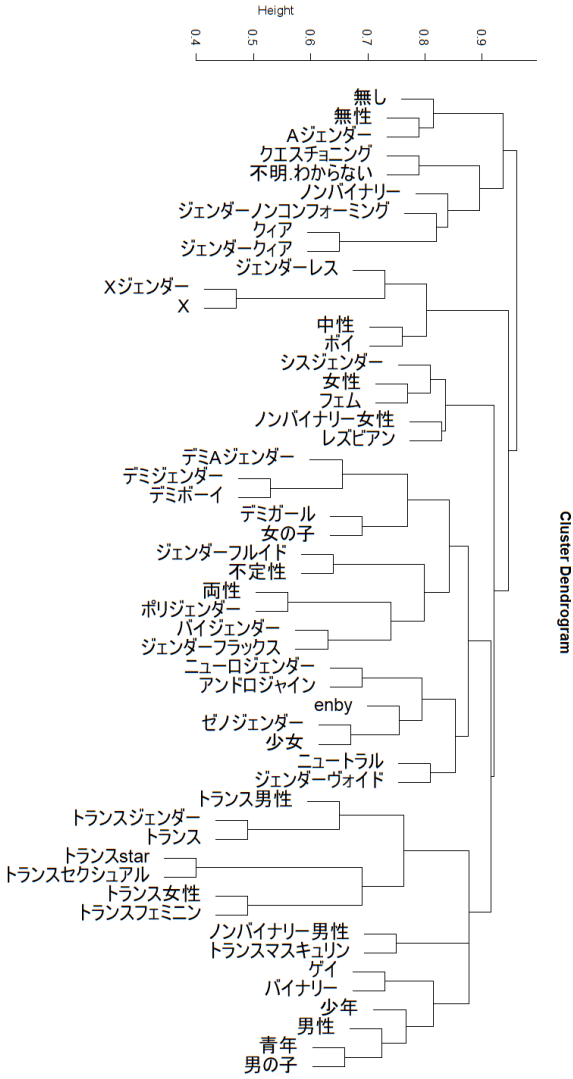


図 1: ジェンダー・ラベル間の関係

が上がるに従ってこれを選択する方が減少していました。しかし、51 歳から 55 歳以上では再び大きく増加しており、56 歳以上でも、比較的選択率が高い傾向にありました。

3.3 ジェンダー・ラベル同士の関係

1%以上（5 名以上）の回答があったジェンダー・ラベルについて、ϕ 係数を用いたクラスタ分析の結果を、デンドログラムとして図 1 として示します[6]。本調査から得られた結果であり、実際の概念上の包含関係を表しているわけではありませんが、大まかな傾向としては予測されるものと近いように思われます。

デンドログラムを 6 分割した場合、以下のようなクラスタ構造が得られました[7]。

- **Cluster 1**

  ノンバイナリー, クィア, クエスチョニング, ジェンダークィア, 不明／わからない, ジェンダー・ノンコンフォーミング

- **Cluster 2**

  X ジェンダー, X, 中性, ジェンダーレス, ボイ

- **Cluster 3**

  無性, A ジェンダー, 無し

- **Cluster 4**

  ジェンダーフルイド, 不定性, 両性, ニュートラル, enby, デミガール,

[6]慣れない R を使っているため、見づらくてすみません。

[7]紙面の都合上、実際の選択肢から短略したかたちで書いています。以降、曖昧性の生じない範囲で、断りなく短略した表記を用います。

3.2 年齢との相関

年齢層ごとにもう少し詳しく確認します。「付録」の表 A1 も参考にしてください[4]。まず「ノンバイナリー」について、これはどの年齢層でも最もよく選択されていました。ただし、46 歳から 50 歳でも 1 位であることは変わらなかったものの、特徴的に選択が少なくなっていました。

「X ジェンダー」と「クィア」の順位が逆転するのは、31 歳から 35 歳の層です。40 歳までは、年齢が上がるに従って「X ジェンダー」および X ジェンダーコミュニティに起源の一つがある「中性」「両性」などの語の選択率が増加傾向にありました。「X ジェンダー」という表現は 90 年代後半を起源とするため[5]、この時代のコミュニティ等の影響を強く受けていた層が選択する傾向にあったと考えられます。一方、「クィア」および「ジェンダークィア」は 21 歳から 25 歳での使用頻度が特に高いという結果になりました。「クィア」のリクレイムがもっとも進んでいるのはこの層なのかもしれません。

また、年齢層が高いほど「トランス」を含む語が使用される表現がやや多めに使われており、特に 51 歳から 55 歳群で特徴的に多いという結果が得られました。ただし、「トランスセクシュアル」と「トランス*」は 41 歳から 50 歳での使用は低かったのも特徴的でした。

「クエスチョニング」に着目すると、20 代前半から 50 歳までは、年齢

[4]表 A2 について。母集団の年齢層が非常に偏っているため、「トランス女性は一般的に 51 歳以上である」といった解釈はできませんことにご注意の上で参考にしてください。

[5]Dale, S. P. F. 2014. “X-Jendā.” *TSQ: Transgender Studies Quarterly* 1 (1 − 2): 270 − 72. doi：10.1215/23289252-2400235.

表 4: Gender Census(2022) との比較

	Gender Census(%)	本調査 (%)	本調査順位
nonbinary	63.9	57.8	1 位
queer	54.6	32.5	2 位
trans	38.2	10.4	17 位
gender non-conforming	34.5	8.1	19 位
transgender	33.9	13.5	11 位

自由記入欄では、全 50 回答者から全 70 表現の回答を得ました。2 回以上出現した表現は以下のとおりです。

- 「曖昧な」「わからない」「確信がない」「気がする」を含むもの（7 回）
- 「～でない」「非～」（5 回）
- 「アポジェンダー」（3 回）
- 「自分自身～」「わたし自身」（3 回）
- 「〇 tX」(3 回、内、「FtMtX」が 1 回)
- 「身体女性」／「身体男性」（2 回）

アポジェンダー（「ジェンダーが無いだけでなく、性別という概念の外側にいると実感している」）は mqueerspike が 2014 年に提唱した用語ですが[3]、英日ともにほとんど情報がない (日本語だと Google 検索でのヒット数はわずか 11) 表現にも関わらず、複数の回答がありました。

なお、選択肢を用意していた「ニューロジェンダー」「ノンバイナリー」「アジェンダー」などの回答も重複してみられました。

[3] http://genderdefinitions.tumblr.com/post/91400840744/sometimes-i-look-through-lists-of-prefixes-and-get

以降は大きく異なっています（表 4）。

表 3: ジェンダーに関する表現（選択率上位）

	回答数	選択率 (%)
ノンバイナリー	256	57.8
クィア／ Queer	144	32.5
X ジェンダー	121	27.3
クエスチョニング	86	19.4
無性	86	19.4
(ジェンダー・)フルイド／(ジェンダー・)フリュイド／(ジェンダー・)フルイッド	75	16.9
ジェンダークィア	74	16.7
不明／わからない	71	16.0
A ジェンダー／エイジェンダー／アジェンダー／ agender	71	16.0
X	69	15.6
トランスジェンダー	60	13.5
中性	60	13.5
女性／ woman	57	12.9
ノンバイナリー女性	54	12.2
不定性	49	11.1
無し	48	10.8

ジェンダー／性別を表す表現

3.1 選択式

回答者自身の性別／ジェンダーを表す表現として適切なものを尋ねました。全 58 選択肢 (内、1 個チェック用) からの、複数回答可のチェックボックス選択式。順序効果を考慮し、選択肢は回答ごとにランダムな順番で表示されるように設定しました。本調査では、どのような表現を日常的に使用しているかを調査の対象としたかったため、敢えて各用語には説明を加えませんでした。また、Gender Census（2022）に合わせて、「レズビアン」等、性的指向を表すことが多い表現も選択肢に含みました。全選択肢は、本稿末尾の「付録」をご確認ください。

選択肢が多いため、すべてに目を通してもらうことを目的に「**必ず選んでください**」というチェック用の選択肢を作りました。しかし、これを選択した方は 241 名 (54.4%) と少なく、選択者と非選択者の間で回答の傾向に差がないこと、また、「この選択肢の目的がわからなかったため選択しなかった」というコメントがあったため、以降、考慮せずに結果をまとめます。

443 名（100%）が回答しました。10%以上が選択したジェンダーに関する表現が表 3 です（10%未満を含むものは「付録」の表 A1 を参照してください）。Gender Census での選択率上位 5 位までと比較すると、ノンバイナリーが 1 位、クィアが 2 位であることは共通するのですが、3 位

429 回答 (96.8%) が日本からの回答でした。原文ママの表記で、表 2 にまとめます。居住地によって傾向に差がある可能性を考慮しての質問でしたが、「日本」以外の回答が少なかったため、以降、国に関するデータは分析から外します。

表 2: 回答した国

回答した国	回答数
日本	429
アメリカ合衆国	2
ドイツ	1
Canada	1
India	1
Scotland	1
無回答／回答しない	8
合計	443

また、英語版 Gender Census に参加したことのある方は 6 名 (1.4%)、参加したことはないと回答した方は 434 名 (98.0%) でした。

回答者の属性

総回答数は 444 でした。内、1 件が同一回答者による再回答であったため、一度目の回答を無効としました。そのため、有効回答数は 443 です。以下、有効回答にのみ言及します。

回答者の年齢層は表 1 のとおりです：

表 1: 回答者の年齢層

年齢層	回答数
10 歳以下	0
11 歳から 15 歳	1
16 歳から 20 歳	48
21 歳から 25 歳	116
26 歳から 30 歳	88
31 歳から 35 歳	77
36 歳から 40 歳	34
41 歳から 45 歳	31
46 歳から 50 歳	24
51 歳から 55 歳	11
56 歳から 60 歳	7
61 歳から 65 歳	5
66 歳から 70 歳	0
71 歳以上	0
無回答	1
合計	443

以下、年齢層に言及する際は 20 歳以下上の回答者をまとめて「20 歳以下」とし、56 歳以上の回答者をまとめて「56 歳以上」とします。

1.3 調査方法

調査はすべてオンライン上で Google Forms を使って行い、Twitter、Mastodon、Discord などの SNS を通じて参加を呼びかけました。

また、アンケートの初めには、上述「調査目的」および「調査対象」などを示したうえで、次の 4 点への同意を求めました：

1. 上記「対象」に含まれる、すなわち「 ジェンダー二元論でうまく説明されないすべての人」に含まれる、ということに、同意します。
2. 次のことを理解しました：どの段階でも回答をやめてよく、やめた場合、調査者側には一切の情報が送信されない。
3. 次のことを理解しました：回答を終了し送信した場合、匿名化され、オンライン上ですべての人が見られ、引用、および転載されうる形で公開される。ただし、不適切な回答とこちらが判断した場合、また、個人を特定できる情報を含んでいる場合、回答は公開前に編集ないし削除されうる。
4. この調査では「あなた（たち）」という二人称を、ジェンダーに関してニュートラルな代名詞として用いています。

1.1 調査目的

日本語圏における非バイナリーなLGBTQ+の情報は、深刻に不足しています。そこで、この状況を改善し、わたしたちの経験を世界に伝えると同時に、これを通じて差別を解消し、一方でコミュニティを形成するため、本調査を行います。

1.2 調査対象

ジェンダー二元論でうまく説明されないすべての人。ジェンダー二元論とは、すべての人間を下の二種類に分ける社会的な思想[2]です：

- 常に、唯一、そして完全に「女（性）」
- 常に、唯一、そして完全に「男（性）」

この調査の対象に含まれるのは、例えば：

- ジェンダーが時間とともに変化する人
- ジェンダーの強度が変化する人
- 同時に複数のジェンダーである人
- ジェンダー・アイデンティティのない人
- ジェンダー・アイデンティティを拒絶する人
- 女（性）／男（性）以外のジェンダーである人

[2] Gender Census（2022）における同様の記述をもとにしました。本 ZINE「LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの文章」もご参照ください

はじめに

本稿では、差別的・侮蔑的とされる表現や十分にリクレイムされたとは言い難い表現も伏字を用いることなく書いています。

日本語話者を対象とした非二元的な性／ノンバイナリー／Xジェンダーの方を中心とした調査がほとんど存在しないため、英語圏で毎年取られているGender Census[1]をもとに、これの調査者から許可を得たうえで実施しました。本報告および結果はすべてCCで公開します。また、全質問および選択肢は本稿末尾にまとめました。本稿で「表A〇〇」となっているものは、下記URLに「付録」としてまとめてあります。

調査期間：

2023/02/12 − 2023/03/12

生データ、付録：

`https://anarchistneko.github.io/an_zine.html`

[1]URL: `https://www.gendercensus.com/results/2022-worldwide/`。以下、断りのない限り2022年度の結果を参照します。

「日本語版ジェンダー調査2023」
調査結果

て、欲望の在り方ではない。

そして、それでもなお「気持ち悪い」「異常だ」「怖い」と言うのならば、我々の身体や欲望、性行為に、どういったことばが向けられ続けているのかを、どうか思い出してほしい。

追記

本稿のもととなった記事を最初に公開した際、ある尊敬していた方が「運動の場を乱すな」といった旨の発言をし、心底幻滅したのを覚えている。インターセクショナルなフェミニズムや、トランス・インクルーシブなフェミニズムも、「運動の場」とやらを乱していると散々言われてきた。もしわれわれもまたこの文章で「運動の場」を乱しているのならば、喜ばしいとすら思う。

また、こういった発言が繰り返されていたことによって、コミュニティへの恐怖を感じ孤立している方が一定数いることは、強調しておきたい。

で放置してきた制度や構造上の危険や不平等を、解消していくことではないのか。チャイルド・マレスティングをはじめとした性加害を「異常な欲望を持つ者」の問題とすることは、社会的な暴力やレイプ・カルチャーを隠す行為でしかない。

ペドフィリア的な欲望を矯正の対象とすることによって、同意の上で開始したそういった欲望に基づくロールプレイで加害があったとき、相談やケアへ繋がりにくい事態だってある。現に、自身や自身らの行為におしつけられたスティグマにより「泣き寝入り」をしなければならなかったことは、BDSM コミュニティでもよく聞くし、多くの非シスヘテロが経験してきたことでもある。それを助長することが性暴力の廃絶という目標につながるとは、自分には思えない。

チャイルド・マレスティングは誰も肯定していない。「性暴力」がこれまで狭く定義されてきたこと、性的同意ができるとみなせる年齢ではないひとたちへの性加害が繰り返されていること、そしてその事実すらもが「ネタ」としてしか消費されない現状があることは、我々も忘れていない。幼い子どもが性的に描かれた広告が一切ゾーニングされずに表示され続けていることも強く問題であるし、それへの抗議は筆者も盛んに行ってきた。だが、これらの問題意識は、「ペドフィリアは危険／異常だ」や「性的同意の尊重を前提としたうえでもなお、ペドファイルの権利は認められるべきでない」を否定しながらも議論できる。「Z」や「N」についても、同意のない性行為のファンタジーやそれを模した性行為を同意のある者同士で行うことも、非「PZN」が「同意」のない相手へ性的な欲望を経験することについても、同じく。問題にすべきなのは性暴力であっ

いのか。

本当に問題にすべきこと

欲望と性暴力を曖昧にするほど、実際の性暴力のあり方は隠され、「性的な同意を確認する」ということも曖昧になっていく。同意のない相手への欲望自体を性暴力と同列に罰せられ「矯正」されるべき「犯罪」とみなすのならば、性的な同意があるか相手に確認すること自体に性的な同意が必要となっていくし、さらにそれ自体にも同意が必要だと議論するべきだろう。もし「英語圏ではpedophileとchild molesterは同義に使われることが多い」を根拠にこれらの言葉を互換可能とするのならば、区別していく意義はここで十分に示した。なお納得しないのならば、「欲望」と「性暴力」をきちんと区別する新しい言葉を提案していくべきだという話であり、どういうものをあてていくにせよ、これらの概念を区別しないべき理由は、自分にはわからない。

そもそも、あなたが問題にしたいのは、「ペドファイル」の欲望それ自体ではなくて性暴力ではないのか。そのために「性的同意」について広く知らしめたり、これまで「性暴力」とみなされなかった行為をそうであるときちんと伝えあったり、被害に合うひとを減らし、また、被害に合ったひとが必要なケアへアクセスできるようにしたりすることではないのか。加害しそうなひとやしたひとを必要な教育やケアへつなぎ、性暴力やそれを繰り返すことを共同体として防いでいくことではないのか。これま

リーの権利はどこまで意識されていたのか。バイセクシャルの存在が運動の中で無視されていることは、幾度も指摘されてきた。それとも、そういった者たちもまた、「LGBTQ+」に含まれないと言うのだろうか。

本稿のもととなった記事にはコミュニティ内からも多くの批判があったが、そのひとつに、「LGBTQ+運動は究極的には同性婚の法制化を求める運動だ」という旨のものがあった。同性間の婚姻の権利は、確かに運動の初期より大きなテーマの一つではあるが、我々が直面している差別や搾取は決して婚姻の問題のみではない。それとも、婚姻を望まなかったり、現行制度で婚姻できるクィアたちの権利は、この運動にとって「不要」なのだろうか。

性的指向ともジェンダー・モダリティとも異なるから、という理由付けも、あまり賛同できない。そもそも非バイナリーを包摂できるかたちで「性的指向」を考えていくほど、既存の説明はどれも限界が生じ、「指向」と「嗜好」の境界は曖昧となってくる[1]。わたしたちが本当に対抗すべきなのは、「正しい／普通の性や欲望の在り方」と「誤った／異常な性や欲望の在り方」という区別それ自体ではないのか。もし「LGBTQ+／クィア運動」というものがただ「L、G、B、T の権利」以上を求めるものならば、生殖を中心とした「正しい／誤った性や欲望の在り方」という規範を崩すことを少なくとも目標のひとつとするのならば、「『性的嗜好』はLGBTQ+／クィアとは関係ない」という発想自体、問われるべきではな

[1]次に詳しい。Jas, Ynda. 2020. “Sexuality in a Non-Binary World: Redefining and Expanding the Linguistic Repertoire.” *Journal of the International Network for Sexual Ethics & Politics*, no. Special Issue 2020 (September): 71 – 92. DOI: 10.3224/insep.si2020.05.

している。例えば、同性への性暴力が必ずしも同性へ性的な関心があるひとによるものでないことは、幾度も指摘されてきている。

また、ペドフィリア的な欲望を解消する行為は性暴力に限定されない。非ペドファイルが絶対に同意の得られない対象へ欲望を抱いたとき、それを解消する方法が多くの場合レイプでないように。

ある対象に性的欲望をおぼえていることは、その相手に性的な行為を強制することとは全く異なる問題だし、異なる問題として語っていく必要がある。そこを曖昧にするのは、ゲイだとカムアウトした男性に「俺を襲うなよwww」と言う男性と何が違うのか。

「性的嗜好」と「性的指向」

「LGBTQ+にペドフィリアは含まれない」についても考え直したい。確かに、これまで「LGBTQ+運動」とされる運動のなかでは、ペドファイルの権利はほとんど主張されてこなかった。ペドフィリア以外にも、「パラフィリア」や「フェティッシュ」、「キンク kink」あるいは「性的嗜好」とされるものは、コミュニティ内でも排除されがちである。少し前にも、BDSMとプライドとの関係が問題にされた。歴史的には、「性的指向」が「ただの趣味」とされることへ対抗するために「性的嗜好」と区別して運動をする意義はあっただろうし、今も一定に意味があるのかもしれない。そのような意味において、「LGBTQ+」にはペドファイルは含まれてこなかった。だが、数年前まで、Aセクシャルの権利は含まれていたのか。非バイナ

いることは、同意可能年齢の引き下げの議論からも明らかであろう（繰り返すが、筆者は同意可能年齢の引き下げに賛同していない）。

だが、わたしたちが本当に問題にしたいのはこれなのか。わたしたちが本当に求めているのは、同意のない性行為への「欲望」自体がうまれることを阻止し、本人の意思や同意にかかわらず常に必ず、多くの場合国家権力を通じて、そういった欲望の「矯正」を迫ることなのか。少なくとも自分は違う。自分が求めてるのは、同意のない「行為」がなされることを阻止することであり、それが起こった際に被害者が必要なケアを受けられることであり、再発を徹底的に防止することを可能とする社会システムを構築することである。加害を非難することや加害を阻止することと性的同意のない行為を欲望し「空想」することは区別して語れるし、きちんと区別して語るべきではないのか。

欲望と性暴力

あるいは、こう言う方もいるかもしれない、「チャイルド・マレスターの多くはペドファイルなのだから、ペドファイルを『危険』視するのは誤っていない」と。だが、それならばこうも主張しなければならないはずだ、「性犯罪者の多くは allo セクシュアルなのだから、allo セクシュアルを『危険』視するのは誤っていない」と。ペドファイルを「性加害予備軍」などというのであれば、同じ基準を性的欲望をおぼえるすべてのひとへ適用しなければおかしい。それに、これは実際の性暴力の在り方を全く無視

同意のない欲望

「ペドフィリアは危険」の「根拠」としてよく挙がるのが、ペドファイルの欲望の対象が、性的同意が可能であるとみなすべきでない年齢であることだろう。ペドファイルは、その「定義」上、現実的には絶対に性的同意を得られない対象へと欲望が向いている。

だが、現実的には絶対に性的同意を得られることのない（あるいは明確なパワー関係のある相手など、同意を得られるとみなすべきでない）対象に欲望を覚えたことのあるひとは、別にペドファイルに限らない。多くの非ペドファイルだって、面識のないアイドルやすでに死去したひと、自分に性的指向が向かないひと、職場の後輩などに欲望をおぼえてきたし、そういった経験は筆者にもある。もし「性的同意を得られる現実的な可能性」自体が問題ならば、そういった欲望を経験してきた方たちだって、同じく「危険」だし「異常」だと議論すべきだろう。そういった視点から「ペドフィリアは危険」だと主張しているつもりならば、主語が誤っている。あなたが問題にしているのは性的な同意を得ずにないしは得られない相手に性的な欲望を持つことそれ自体であり、「ペドフィリア」を切り出してくるのは恣意的でしかない。

アイドルや死去した者、後輩などは、それでも、同意が成立するシチュエーションを「空想」できる、というのかもしれない。ならば少なくとも一部のペドファイルだって同意が成立するシチュエーションを「空想」して

誤った問

「LGBTQ+（あるいはクィア）にはペドフィリアが含まれる！　だから『LGBTQ+運動』（あるいは『クィア活動家』）は危険だ！」といった発言が、差別的なグループから発せられることが多くある。それに対して、「LGBTQ+にペドフィリアは含まれない！（だから『LGBTQ+運動』は危険ではない）」という反論がよくなされるのを見る。「LGBTQ+にはペドフィリアが含まれる」と「『LGBTQ+運動』は危険だ」を「だから」で結ぶひとが「ペドファイルを含むひとたちの権利を求める運動は危険だ」と言いたいのだろうことは、否定しない。実際、歴史的にはクィアであること、特にゲイであることがペドファイルやチャイルド・マレスターであることと結び付けられ、差別の「根拠」にされてきた。ゲイであることはペドファイルであるか否かとは直接は無関係であるし、ましてやチャイルド・マレスターであるかも関係ない。そして、現在、同じような理論で、特にトランスの方を含めた多くのクィアの権利を求める運動を否定しようとしてきている方たちがいるなか、こういった言説に抵抗することは必要だし、大切だとは自分も思う。

だが、わたしたちが批判の対象としなければならないのは、誰がLGBTQ+（あるいはクィア）に含まれるか否かではなく、「ペドファイルを含むひとたちの権利を求める運動は危険だ」の方ではないのか。

用語の定義

本稿では、以下の通りに各用語を定義する。

- **ペドフィリア** pedophilia
  広く、性的同意が可能であるとみなすべきでない年齢の対象に対する、性的な関心や欲望のあり方。「ペドフィリア」は、この欲望自体を一種の「病理」として扱う場合も使われる表現だが、本稿ではそのニュアンスを含めた意味では用いていない。また、ここでは対象が実在の人間である場合に限定する。ペドフィリア的な欲望は性的なものに限らないが、ここでは性的なものに限定する。
- **ペドファイル** pedophile
  ペドフィリア的欲望を経験するひと。
- **チャイルド・マレスティング** child molesting
  性的同意が可能でない、または可能でないとみなすべきでない年齢の対象に対して、性的な加害を行うこと。「性的な加害」には、ことばや表現を通じた加害も含まれる。
- **チャイルド・マレスター** child molester
  チャイルド・マレスティングを具体的に計画している、ないしは、実際に行っているひと。

注意

本稿では、チャイルド・マレスティングを含む性暴力や同性愛者への差別に言及しています。本稿はLGBTQ+コミュニティ全体の考えを反映しているわけではありません（むしろ、コミュニティ異なる考えの方に向けて書いています）。また、チャイルド・マレスティングを含んだ性加害を正当化するものでは一切ありません。性的同意が絶対的に尊重されるべきこと、そして一定年齢以下のひとは性的な同意ができない（あるいは、できるとみなすべきでない）ことは、当然の前提として書いています。同意可能年齢の引き下げにも一切賛同していませんし、性行為のない関係であれば問題はないとも一切考えておりません。

ペドフィリアは
LGBTQ+に含まれるのか

「私は私の麺麭を齧つた。」

其の主體も對象も、私以外に束縛され私以外を束縛する。

「私たちは私たちの麺麭を齧つた。」

否、齧らされた。

「rakugaki」

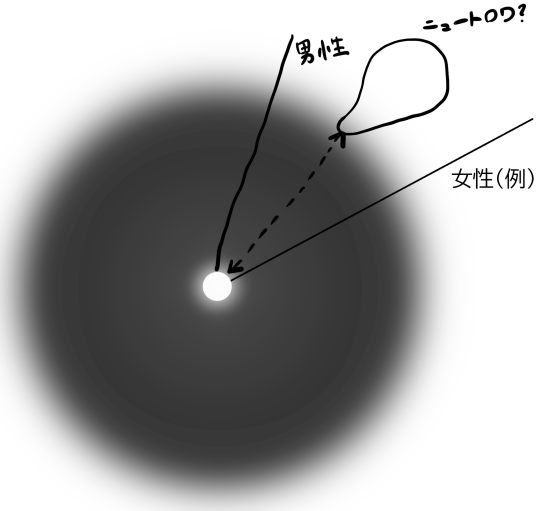
「私は私の麺麭(パン)を齧つた。」

だが其の麺麭は果たして「私の麺麭」であつたのか。齧つたのは確かに私が奪つた物ではあるが、それは地球(テラ)上の或る工場(プラント)にて私たちの水と空氣と太陽光を用ゐて作られ、見知らぬ勞働者の手によつて袋詰され海を渡り、この家(ルウム)へと辿り着いた。

齧つたのは確かに私の齒だと思ふが、それはヲメガ社のインプラントであつた。ロ許へと運んだ手指ですらアルマ社からの借用物であつた。そして、是等は皆、月(ルナ)のヘリウム参(スリキ)なくしては動かなかつた。

そもそも齧つたのは私のどうしやうもない空腹に所以するし、それもくだらない活動寫眞(ビデヲ)を撮られるために早起きをしたせいであつた。消化も排泄も、どうしやうもない擬生体(バイオイド)としての本能に依據する行爲でしかない。

ジェンダーのガンガゼ



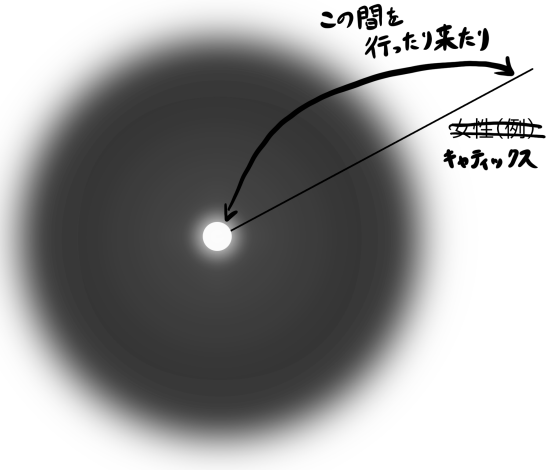
つかいかた

1. 自分のジェンダー・アイデンティティ
   （あるいはそれのないこと）に関係する
   ジェンダー・カテゴリーを、自由に線で書いてみよう
2. 自分のジェンダー・アイデンティティを、
   図に書き込んでみよう

＊「正しい書き方」も「間違った書き方」もないよ！

ジェンダーフラックス(ニュートロワ？)の例

ジェンダーのガンガゼ



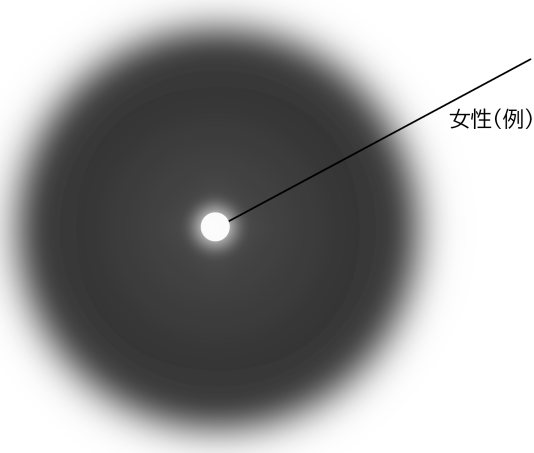
つかいかた

1. 自分のジェンダー・アイデンティティ
   （あるいはそれのないこと）に関係する
   ジェンダー・カテゴリーを、自由に線で書いてみよう
2. 自分のジェンダー・アイデンティティを、
   図に書き込んでみよう

＊「正しい書き方」も「間違った書き方」もないよ！

ポリジェンダー（キャティックスとＡジェンダー）の例

ジェンダーのガンガゼ



つかいかた

1. 自分のジェンダー・アイデンティティ
   （あるいはそれのないこと）に関係する
   ジェンダー・カテゴリーを、自由に線で書いてみよう
2. 自分のジェンダー・アイデンティティを、
   図に書き込んでみよう

＊「正しい書き方」も「間違った書き方」もないよ！

参考文献

Baaphomett. 2014, June 24.“Untitled post.” http://baaphomett.tumblr.com/post/89738557605/ive-done-a-lot-of-thinking-about-identity-and.

Chrystall-Bawll. 2015. “The Gender Spectrum Scale.” https://www.deviantart.com/chrystall-bawll/art/The-Gender-Spectrum-Scale-566049414

Jas, Ynda. 2021. “Gender Beyond the Binary: Visualisation, Language and Conceptual Frameworks.” https://yndajas.co/articles/2021/02/19/gender-beyond-the-binary-visualisation-language-and-conceptual-frameworks/

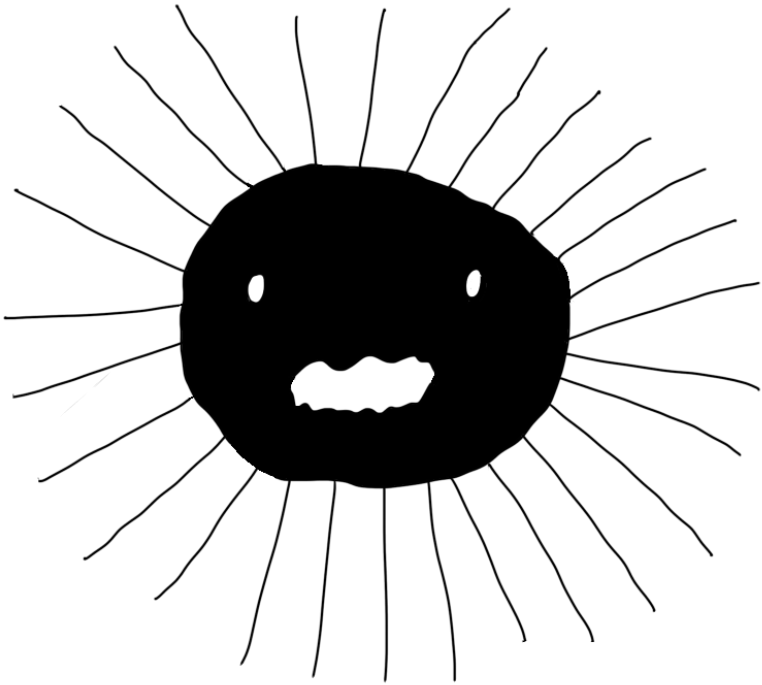
Killermann Sam. 2011. “Breaking Through the Binary: Gender Explained Using Continuums.” https://www.itspronouncedmetrosexual.com/2011/11/breaking-through-the-binary-gender-explained-using-continuums/

Killermann Sam. 2012. “The Genderbread Person Version 2.” https://www.itspronouncedmetrosexual.com/2012/03/the-genderbread-person-v2-0/

Killermann Sam. 2018. “The Genderbread Person Version 4.” https://www.itspronouncedmetrosexual.com/2018/10/the-genderbread-person-v4

Mardell, Ashley. 2016. “The ABC’s of LGBT+.” Mango. [マーデル, アシュリー（著）, 須川綾子（訳）. 2017. ダイヤモンド社,]

Trans Student Educational Resource [TSER]. 2015. “The Gender Unicorn.” http://www.transstudent.org/gender.



ガンガゼ。

まとめ

これまでに提案されているいくつかのモデルを批判的に検討した上で、「ジェンダーのガンガゼ・モデル」を提案しました。ガンガゼ・モデルは、トゲを「切る」平面で見れば「地図モデル」に近いですが、A ジェンダーに関する次元が追加されていることが特徴です。また、ジェンダーが無いことをモデルに表しきれないことを反映するために、A ジェンダーは図中に完全には表されないという特徴ももちます。

ガンガゼ・モデルを基に、書き込み用の「断面図」を作成しましたので、本節末尾に載せます。こちらは、anarchist_neko のホームページ（`https://anarchistneko.github.io/an_zine.html`）でも pdf を配布しています。また、このモデルを使用した例をふたつ載せます。これらはともに、ある方たちに実際に描いてもらった図に基づいています。

ジェンダーのガンガゼ・モデルは完璧ではありませんし、改善の余地もあるでしょう。Jas (2021) にもあるとおり、このように図示すること自体、一定に無理があります。しかし、特に初学者やコミュニティ外の方へ向けて説明したり、あるいは自身のジェンダー・アイデンティティを理解したりするためには、可読性の高い図を用いることも決して無意味ではないと考えています。そういった際、可能な限り正確でインクルーシブなものを使用するべきであると、私たちは考えています。

。各「トゲ」の先に進むほど、すなわちガンガゼの中心部から遠くなるほど、ジェンダーに関する実感の強度が上がります。また、各「トゲ」から離れるほど、そのジェンダー・カテゴリーの中心的な経験から離れていくとして理解されます。例えばデミガールの方は、「女性軸」の近くに、または「女性軸」上の中心部に近い側に、少なくともひとつの領域を持っているでしょう (デミジェンダー条件適合)。

ガンガゼ・モデルの最大の特徴は中心部にあります。この部分は図中でも真っ白ですが、これは、「ジェンダーがまったくない」状態はこの図内に正確に表せないためです（A ジェンダー条件適合）

もう少しガンガゼについて考えてみましょう。ガンガゼは生き物なので、「トゲ」の太さや配置も決して均一ではありません。距離が近い「トゲ」同士もあれば、他のどの「トゲ」とも遠く離れているものもあるでしょう。さらに、「トゲ」は折れたり、新しく生えてきたりすることもあります。また、折れなくとも「トゲ」自体がが揺らめくこともあります[8]。また、ガンガゼはウニにしては活発に、「海」のなかをゆっくり歩きます。わたしたちの世界でも、なにが男性的であるかや女性的であるかは、時代とともに変わってきました。それは、必ずしも個人のジェンダー・アイデンティティそれ自体が変えられているわけではなく、説明のための「軸」が変化していることも、このモデルでは表せます。

これが、ジェンダーのガンガゼモデルです。

[8]現実のガンガゼとは違って、ジェンダーのガンガゼはトゲが合流して 1 本になってしまったり、分裂して複数に割れることもあります（プラズマボールを想像してください）。

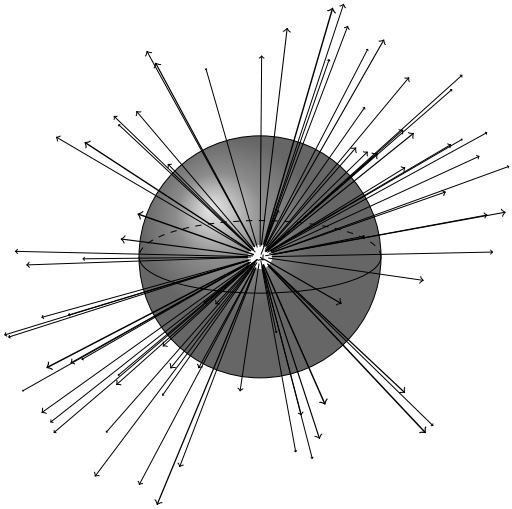


図 10: ジェンダーのガンガゼ・モデル

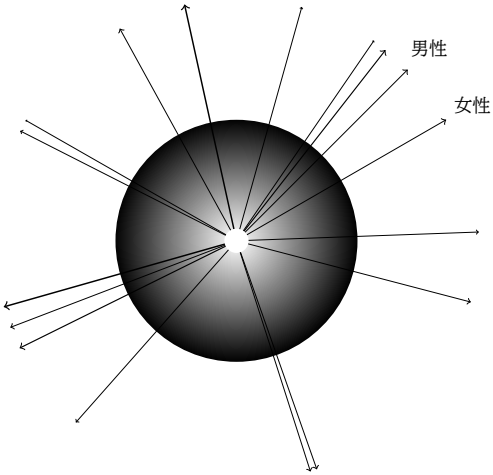


図 11: ガンガゼ・モデルの断面図（例）

提案：ガンガゼ・モデル

この節では、「ガンガゼ・モデル」（Diadema Model）を提案します（島﨑残像さん命名）。ガンガゼ・モデルは、「地図モデル」に、Gingerbread Person v4 で提案されている A ジェンダーの理解を採用した上で、「四（＋）軸モデル」を組み合わせたものです。

ガンガゼとは、ウニの一種です。長いトゲ（30 cm にもなります）のが特徴です。この大量に生えた「トゲ」をさまざまな「ジェンダーの軸」と捉えるのが、ガンガゼ・モデルです（図 10）。「女性」と「男性」は、さまざまにある「トゲ」のうちの 2 本にすぎません（正当性条件、多様性条件適合）。

このガンガゼちゃんの中身を見てみましょう。例として、上記の「女性」と「男性」のトゲを通る平面の断面図を見てみます（図 11。MRI を撮っただけなので、ガンガゼちゃんは無事です）。もちろん、「女性」と「男性」のどちらも通らない断面も、想定できます。ゼノジェンダーを含むノンバイナリーなジェンダー・カテゴリーはそのような断面上に存在しますし、それらを「女性」「男性」で表そうとすることのナンセンスさも、これによって示すことができます（ゼノジェンダー条件適合）。

個々のアイデンティティは、このガンガゼのなかのさまざまな領域によって表されます。その領域の位置はもちろん、大きさや個数はひとによります。また、ジェンダーフラックスやジェンダーフルイドの方は、この領域が変化するとして説明されます。

ンダー条件には適合します。さらに、ゼノジェンダーをはじめとした多様なジェンダー・カテゴリーを正確に表そうとするほど、可読性が下がるという問題がありました (可読性条件違反)。これら全ての問題をクリアしているのが「地図モデル」です。

しかし、「地図モデル」にも問題がありました。それは、A ジェンダーをどう表すかです（A ジェンダー条件部分的違反）。また、この問題の結果、デミジェンダーも十分に表せておりませんでした（デミジェンダー条件違反）。A ジェンダー条件を唯一クリアしているのが、Gingerbread Person v4 でした。

モデルの模索

「既存のモデルの検討」で検討した結果を、下の表にまとめました。

表 1. 各モデルの比較

	正当性	多様性	ポリジェンダー	Aジェンダー	デミジェンダー	ゼノジェンダー	関係性	可読性
2.1.1 二者択一	×	×	×	×	×	×	×	○
2.1.2 三者択一	○	×	×	×	×	○	△	○
2.1.3 四(＋)者択一	○	○	×	×	×	○	△	×
2.1.4 複数選択	○	○	△	×	×	○	○	×
2.2.1 一軸(「女性」—「男性」)	○	○	○	?	?	×	×	○
2.2.2 二軸(Gingerbread Person v4)	○	○	△	△ (/ ○)	△	×	×	○
2.2.3 三軸(Gender Unicorn)	○	△	○	△	○	○	×	○
2.2.4 四(＋)軸	○	○	○	△	○	○	×	×
2.3 地図	○	○	○	×	△	○	○	○

総じて、「選択肢」型はデミジェンダー条件に違反しますが、形状や位置関係などを通じてカテゴリー同士の関係を表すことができます(関係性条件適合)。一方、「軸」型は関係性条件に違反しますが、デミジェ

ファーで、複数選択モデルの可読性の問題を避けることができます（可読性条件適合）。

しかし、Aジェンダー条件には、依然として違反したままです。もちろん、「地図」上にAジェンダーを表せば「女性」などのジェンダー・カテゴリーと同列のものとして扱ってしまうという問題が再び生じます。また、これによって、デミジェンダーのうちAジェンダーと交差するあり方の方や実感するジェンダーの強度が変化するジェンダーフラックスの方が、説明からあぶれてしまいます。

2.3 地図モデル

選択肢型と軸型の両方の特徴を持つものとして、各ジェンダー・カテゴリーをカラーホイール上（例：Mardell 2016）や「地図」のように分布させるモデルがあります。Jas（2021）のモデルでは、ジェンダー・カテゴリーは大きさもかたちも異なる島として描かれます。島は境界を接していたり、オーバーラップしたりすることも許されています。個々の存在は、この地図上の（必ずしも島上でなく）さまざまな点に存在しているとされます。さらに、この地図は、個々のひとに特有なものとして理解されます。この「地図」モデルを表したのが、図 9 です。

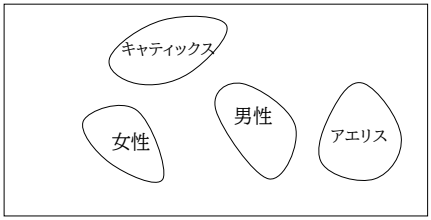


図 9: 地図モデル

「地図モデル」では、各島への遠近というかたちで、選択肢型では表せなかったデミジェンダーを表すことができます（デミジェンダー条件部分的適合）。また、単なる「軸」ではなく、領域のある島に「かたち」や「位置関係」が設定されているという点で、軸型では示せなかった各カテゴリーやカテゴリー間の関係性を表すこともできます（関係性条件適合）。さらに、地図は必ずしも「世界」全体を表す必要がないというメタ

中に他のアイデンティティと同じ次元で「A ジェンダー」が表されるため、「ジェンダーがないというジェンダー」として解釈される余地を残しています。

さらに、最大の問題は、可読性条件です。これは 2.1.4「四（＋）軸モデル」と同じく、軸の本数を増やすほど可読性が下がってしまうことによります。実は、図 8 で提示したジェンダー・カテゴリーは、全てアンブレラタームであり、さらに細分化されます。各軸がアイデンティティである以上、どの軸も省略できないのですが、数千本の軸を描くことは現実的には不可能ですし、仮に可能だとしても実用的ではありません。

て十分に満たせていないままです（部分的違反）。

2.2.4　四（＋）軸モデル

では、選択肢型の際と同様に、2.2.3「三軸モデル」の「ノンバイナリー軸」を複数に分解してみましょう。今回は初めから、「ゼノジェンダー」と誤魔化さずに、複数の軸で描いてみます（図 8）[7]。

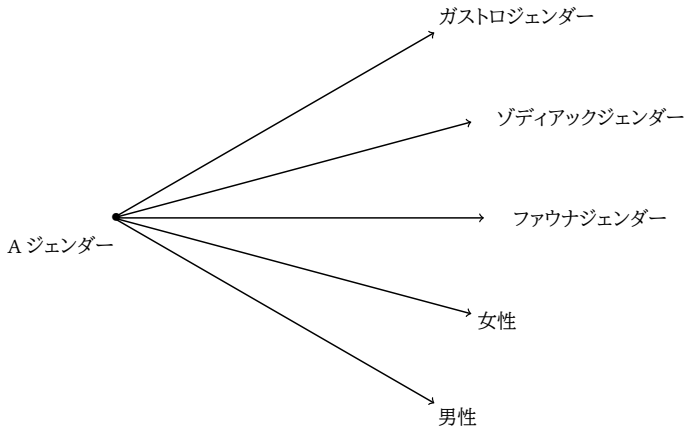


図 8: 四（＋）軸モデル

これによって、2.2.3「三軸モデル」の最大の問題であった多様性条件が満たせるようになりました。また、女性かつゼノジェンダーであることを「ノンバイナリーではない」と言うことないまま表すことができます（ポリジェンダー条件適合）。

十分に満たせていないのは、A ジェンダー条件です。依然として、図

[7]各軸は直交しているという想定です。

ては、後ほど戻ってきます。

2.2.3 三軸モデル

Gender Unicorn (TSER 2015) で採用されているように、もう 1 本「ノンバイナリー軸」を足したモデルはどうでしょうか[6]。

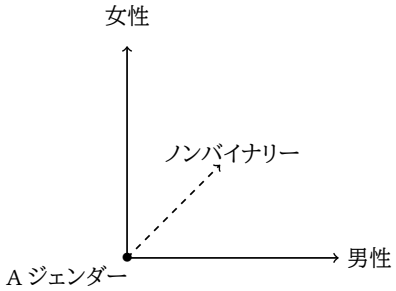


図 7: 三軸モデル

「ノンバイナリー軸」を「z 軸」として加えることによって、ゼノジェンダーなど、「女性軸」と「男性軸」のみによって規定されないジェンダーを表せるようになりました（ゼノジェンダー条件適合）。これは大きなメリットです。ゼノジェンダーが表せるようになったことによって、デミジェンダー条件への適合性も上がりました。

しかし、同時に、「ノンバイナリー軸」によって、むしろ非バイナリーなジェンダーがひとつのベクトルで規定されてしまうという問題が生じています（多様性条件部分的違反）。また、A ジェンダー条件も依然とし

[6] Gender Unicorn では、左端が共に「A ジェンダー」と表された 3 本の独立した線として描かれています。

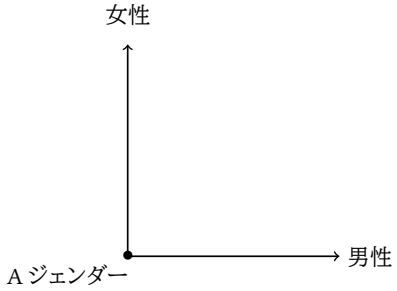


図 6′:「A ジェンダー」—「女性」×「A ジェンダー」—「男性」モデル

張によって、女性かつ男性であることも表せるようになります。

A ジェンダーが図内に表されることによって「中点」／「原点」の曖昧性はなくなったものの、それ以外の問題は「一軸モデル」と同様です。さらに、A ジェンダーが図内に表されることは、2.1.2「四（＋）者択一モデル」で論じたとおり、ジェンダー・アイデンティティのないあり方であっても、女性と同じような、ある種のジェンダー・アイデンティティとして説明されているように見えてしまう問題を生みます。また、ゼノジェンダーが表せない以上、デミジェンダー条件やポリジェンダー条件へも部分的に違反しています。「軸」同士の関係や、各カテゴリーの「大きさ」も、十分に表しきれません（関係性条件違反）。

ただし、Gingerbread Person v4 (Killermann 2018) から、各軸は A ジェンダー周辺が透明になっているグラデーションのある線と表されており、これによって、A ジェンダーであることが性別のあることと異なる「次元」として表されています（A ジェンダー条件適合）。この点につい

た線として描かれています。

です。ニュートロワ／中性？ あるいは A ジェンダー？ この問題によって、A ジェンダー条件、さらにはそもそも満たしたかったデミジェンダー条件に、どこまで適合しているのかが不明瞭となってしまっています。説明としてのジェンダーの図を作成するとき、このような曖昧性は望ましくないばかりか、誤解が生じる原因ともなります。

2.2.2 二軸モデル

では、「女性」—「男性」の直線にもう 1 軸、「A ジェンダー軸」を追加したらどうでしょうか？ こちらは、Chrystall-Bawll (2015) などが採用しているモデルです。異なる表し方としては、2.2.1 の「一軸モデル」に点の濃淡を加えたものとして考えても良いでしょう。

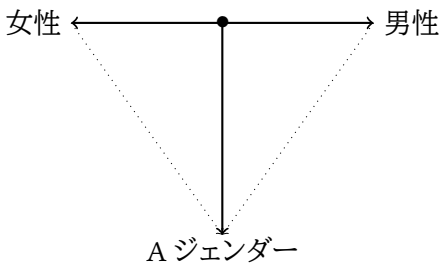


図 6: 「女性」—「男性」 × 「A ジェンダー」軸モデル

このモデルは、図 6′ のようにも拡張できます。こちらは Gingerbread Person v2 (Killermann 2012) 以降で採用されているものです[5]。この拡

[5]Gingerbread Person では、左端が共に「A ジェンダー」と表された 2 本の独立し

2.2 「軸」型

2.2.1 一軸(「女性」—「男性」)モデル

では、デミジェンダー条件に着目しながらスペクトラムにする方向ではどうでしょうか。まず、どのような「軸」を想定するかの問題があります。はじめに、ジェンダーの入門書などで見られることのある「女性」—「男性」スペクトラムを採用してみましょう。これは Gingerbread Person v.1 (Killermann 2011)などで採用されており、次のような直線で表されます:

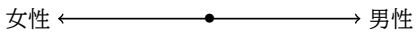


図 5: 「女性」—「男性」モデル

ノンバイナリーな経験はこれで十分に表せるでしょうか。このモデルのメリットは、ジェンダーのカテゴリーをバイナリーなもの、すなわち「(唯一、常に、そして完全に)女性か(唯一、常に、そして完全に)男性か」とは捉えていない点です(正当性条件適合)。また、非バイナリーなジェンダーが広がりを持つものとして描かれています(多様性条件適合)。複数の点や領域を指示して良いとするすれば、ポリジェンダー条件にも適合します。

しかし、女性や男性に定義されないジェンダー・カテゴリー、例えばゼノジェンダーは、これでは全く表せません(ゼノジェンダー条件違反)。また、Jas (2021) でも指摘されていますが、「中点」が何を表すかも問題

理論上、ベン図は限りなく大きな数の集合を扱えますが、実際には集合の数が増えるほど複雑な図形になっていきます。2.1.2「四(＋)者択一モデル」と同様、1000 種類のジェンダー・カテゴリーがあるとすると、約 10^{300} の領域を持つベン図が必要となります。もしこれを実際に描こうとすれば、地球の全表面を使っても、各領域が $5.1 \times 10^{-269}\mathrm{nm}^2$ となってしまいます[4]。ジェンダーを図示するモデルとしては、これでは不都合です(可読性条件違反)。以上のように、デミジェンダー条件への違反を一旦傍においても、選択肢式ではどのようなモデルでもうまくいきません。

[4] $5.1 \times 10^{32}\ \mathrm{nm}^2\ /\ 2^{1000}$。

2.1.4 複数選択モデル

択一式で共通して見られるのは、ポリジェンダー条件とデミジェンダー条件への違反です。では、まず、ポリジェンダー条件を満たせるように、複数選択を可とするモデルを考えてみます。再びゼノジェンダーと（狭義の）A ジェンダーを例に図で表すと、

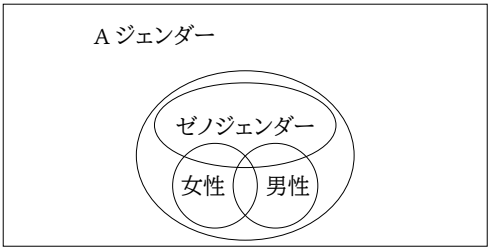


図 4: 複数選択モデル

これにより、女性かつ男性や女ゼノジェンダーかつ男性や、ゼノジェンダーかつ女性かつ男性といったポリジェンダーの方も表せるようになりました。また、2.1.2「四（＋）者択一モデル」と同様に、各「集合」の距離や大きさとして、さらに今回はオーバーラップとして、各ジェンダ・カテゴリー間の関係性も表せます（関係性条件適合）。しかし、デミジェンダーを表せないことは変わらない以上（デミジェンダー条件違反）、デミジェンダーをアイデンティティのひとつとしてもつポリジェンダーの方は説明からあぶれてしまいます（ポリジェンダー条件部分的適合）。さらに、A ジェンダー条件への違反は変わりません。

た、厳密な意味での「集合」とはやや異なりますが、各領域の大きさやお互いとの距離をも含まれる情報の一つにすれば、関係性条件をある程度満たせるようになります。ただし、「複数選択」を許さない結果、カテゴリー同士の一部または全部が重複する場合はこれを示しきれません（部分的適合）。これは別の言い方をすれば、ポリジェンダーが表せないということです（ポリジェンダー条件違反）。「ポリジェンダー」を別個の集合としたとしても、例えば女性かつ男性であることを女性や男性から独立したものとしてしか表すことができません。個々の当事者の理解にもよりますが、これは一般的説明としては不正確です。

また、選択肢を増やすほど、図は複雑になっていきます。例えば、MOGAI Wiki には、2025 年 7 月 10 日段階で 3000 を超えるジェンダーに関するページがあり、そのうち三分の一のみがジェンダー・カテゴリーに関する独立したマイクロラベルだとしても、1000 の集合が必要です（可読性条件違反）。

さらに、例えば同じくフェミニンなノンバイナリーであっても、どの程度フェミニンな傾向が強いかなどといった情報は反映できません（デミジェンダー条件違反）。また、「A ジェンダー」の設定にも問題があります。これでは、ジェンダー・アイデンティティがないことを[3]ある種の「ジェンダー・アイデンティティ」として扱っているようにも見えてしまいます（A ジェンダー条件違反）。

[3]本稿では、説明の都合上ジェンダー・アイデンティティがまったくないことを「（狭義の）A ジェンダー」と表しますが、実際には A ジェンダーの女性もいます。いずれにせよ、これは棄却されるモデルです。

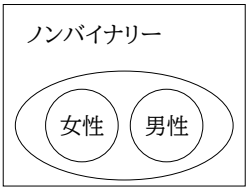


図 2′: 三者択一モデル

2.1.3 四(＋)者択一モデル

4 つ以上の選択肢がある場合を考えましょう。ゼノジェンダーと A ジェンダーを例に、図 2b の「ノンバイナリー」とまとめられていた集合を拡張するかたち[2]で、計 4 つの集合を想定する場合を図 3 として示します。

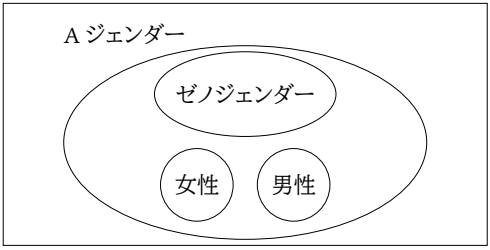


図 3: 四(＋)者択一モデル

選択肢(集合)を可能な限り増やせば、多様な非バイナリーなジェンダー・カテゴリーを包摂できます(多様性条件、ゼノジェンダー条件適合)。ま

[2]今回は「ノンバイナリー」ではなく、各非バイナリーなジェンダー・カテゴリーと「女性」や「男性」などと同じレイヤーのカテゴリー同士の関係であるため、図 2′ は採用しません。この場合、「ノンバイナリー」は、「「女性」ではない、かつ、「男性」ではない」が近いと思います。

まっています。

特に問題となるのは、少なくとも女性または男性のいずれかがアイデンティティに含まれているポリやデミの方です。この図では「ノンバイナリー」、「女性」または「男性」のうちふたつ以上に当てはまる場合はその事実を反映させることができません（ポリジェンダー条件違反）。また、集合として扱う以上、デミジェンダーがスペクトラムであることも表しきれません（デミジェンダー条件違反）。

ゼノジェンダー条件はどうでしょうか？　これは、意外にも満たされています（適合）。しかし、これは不十分にしか「ノンバイナリー」が定義されていない結果、偶然満たされたというべきでしょう。

そもそも、「ノンバイナリー」は、「女性」や「男性」ではなく「バイナリー（なジェンダー）」と同じレイヤーであると考えるべきです。では、次のような選択肢を考えてみてはどうでしょうか？

選択肢：

「ノンバイナリー」、「バイナリー（女性）」、「バイナリー（男性）」

上で挙げた問題のほとんどは変わらないのですが、少しだけ、各ジェンダー間の関係性を示すことができています（部分的適合）。これも図示すると、図 2′ となります：

2.1.2 三者択一モデル

では、「女性」と「男性」のほかに、「ノンバイナリー」などの「第三の選択肢」を用意し、そこからひとつ選ばせるモデルであれば問題は起きないのでしょうか？　二通りの図が考えられます[1]。「第三の選択肢」がバイナリーな各ジェンダーと同じレイヤーであることを示しているのが図 2a、「非バイナリーなジェンダー」としての面が強調されているのが図 2b です。

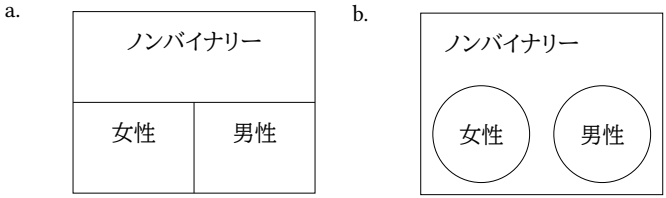


図 2: 三者択一モデル

これらは、たしかに「ノンバイナリー」を明示的に選択肢に入れているため、正当性条件を満たしています（適合）。ですが、他の条件はどうでしょうか？　最大の問題が、「ノンバイナリー」がアンブレラタームであるという面を十分に反映にできていないという点です（多様性条件違反）。その結果、当てはまるジェンダー・カテゴリーがあってもなくても、また複数あっても、全て区別されずに「ノンバイナリー」の中にまとめられてし

[1]「ノンバイナリー」が「女性」または「男性」以外として定義される（2b）か、それとも独自定義があるが「「ノンバイナリー」または「女性」または「男性」」の補集合に当てはまるものがない（2a）かが異なりますがここでの議論では、問題となりません。

既存のモデルの検討

では、「よくある図」の妥当性を、この基準で検討していきます。

2.1 選択肢型

2.1.1 二者択一モデル

最もシンプルなものが、よくある「『女性』または『男性』からひとつ選んでください」です。この問題は、いわずもがなでしょう。目標のすべてを満たしません（全条件に違反）。図にしてみますと、下のようになります。

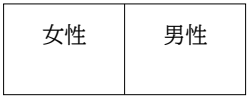


図 1: 二者択一モデル

なお、「回答しない」を加えた場合も、回答を拒否・拒絶しているだけであるため、ジェンダー・アイデンティティのないことや非バイナリーなジェンダーであることは反映できません。

6. **ゼノジェンダー条件**（Xenogender Condition）
   「女性」や「男性」に規定されないアイデンティティを、可能な限り正確に表せるものにする
7. **関係性条件**（Relation Condition）
   各ジェンダー・カテゴリーの関係性を描けるようにする
8. **可読性条件**（Readability Condition）
   印刷物などとして見やすく、理解しやすくする

本稿を読んでる方にとってこれらの目標はどれも異論はないと思いますので、このまま進めていきます。わからない用語がありましたら、本ZINE「LGBTQ+ってなに？　に対する、私たちなりの文章」をご参照ください

目標

本稿では、自身のジェンダー・アイデンティティやジェンダーに関する各カテゴリーを説明することにための図の作成を目的とし、して、以下の条件のすべてを満たすことを目標とします。番号のみだと参照しづらいと思いますので、「正当性条件」など、それぞれにお名前をつけてみました。

1. **正当性条件**（Validity Condition）
   非バイナリーなアイデンティティを正当 (valid) なものとして示す
2. **多様性条件**（Diversity Condition）
   ノンバイナリーが多様なあり方の総称であることを示し、「ノンバイナリーという性別」として説明しない
3. **ポリジェンダー条件**（Polygender Condition）
   複数のジェンダー・アイデンティティでありうることを、可能な限り正確に表せるものにする
4. **A ジェンダー条件**（Agender Condition）
   ジェンダー・アイデンティティのない状態を、可能な限り正確に表せるものにする
5. **デミジェンダー条件**（Demigender Condition）
   ジェンダー・アイデンティティ（やそれのないこと）の実感の強弱を、可能な限り正確に表せるものにする

ジェンダーを図示する

ま

マルチジェンダー 6
マルチロマンティック 23
モノアモラス 18
モノアモリー 18
モノアモリー規範 18

ら

リクレイム 24
レズビアン 22
恋愛的惹かれ 18, 19
恋愛伴侶規範 21
ロマンティック 20
ロマンティックフラックス 20, 23
ロマンティックフルイド 23

ジェンダー表現 15
ジェンダーフラックス 4
ジェンダーフルイド 7
シスジェンダー 13
社会的トランジション 14
女性 2
触覚的惹かれ 19
身体的惹かれ 19
新代名詞 16
ズッキーニ 18
スプリット・アトラクション・モデル 20
性的惹かれ 19
性別移行 14
性別二元制 8
性別二元論 8
性別の様式 13
セクシャル 20
セクシャルフラックス 20
セックス 9
ゼノジェンダー 6

た

奪回 24
単数の *they* 17
男性 2
デミジェンダー 4
デミセクシャル 20
デミロマンティック 20, 23
トランジション 14
トランスジェンダー 13
トランス女性 13
トランス男性 13

な

人称代名詞 15
ノン・インターセックス 10
ノンセクシャル 20
ノンバイナリー 4

は

バイジェンダー 6
バイセクシャル 22
バイロマンティック 22
パンロマンティック 23
惹かれ 18, 19
惹かれの指向 21
美的惹かれ 19
非バイナリー 4
プラトニックな惹かれ 19
ヘテロロマンティック 23
ペリセックス 10
法的トランジション 14
法的な「性」 10
ポテンシャルな惹かれ 19
ホモロマンティック 23
ポリアモラス 18
ポリアモリー 18
ポリジェンダー 6

索引

A

ace 20
allo セクシャル 20
allo ロマンティック 20
aro 20
A ジェンダー 3
A セクシャル 20
A ロマンティック 20, 23

B

Bi+ 22

D

DSDs 9

L

LGBTIQ+ 10

M

M-spec レズビアン 22

S

SRY 遺伝子 9

V

valid 28

あ

アロフラックス 20
医学的トランジション 14
インターセックス 9
エースフラックス 20
エリアトラクション 19
オムニロマンティック 23
オルタラスな惹かれ 19

か

家父長制 2
ガンガゼ・モデル 4
感情的惹かれ 18, 19
旧代名詞 16
クィア 7, 24
クィアプラトニックな惹かれ 19
クエスチョニング 7, 22
ゲイ 21, 23

さ

ジェンダー 2
ジェンダー・アイデンティティ 3
ジェンダー・モダリティ 13
ジェンダー・カテゴリー 2

(1): 17 – 32. DOI: 10.1215/10642684-1-1-17.

Robb, Graham. 2004. *Strangers: Homosexual Love in the Nineteenth Century.* W.W. Norton.

Scherrer, Kristin S. 2010. 'Coming to an Asexual Identity: Negotiating Identity, Negotiating Desire.' *Sexualities.* 11(5): 621 – 641. DOI: 10.1177/1363460708094269.

LGBTQ+

Berlant, L., Freeman, E. 1993. 'Queer Nationality.' In *Fear of a Queer Planet: Queer Politics and Social Theory*, edited by M. Warner, 193-229. University of Minnesota Press.

Shilts, Randy (1987). *And the Band Played On: Politics, People, and the AIDS Epidemic.* St. Martin's Press.

ed.

Balhorn, Mark. 2004. ‘The Rise of Epicene They.’ *Journal of English Linguistics* 32 (2): 79 – 104. DOI: 10.1177/0075424204265824.

惹かれ

Aromantic Spectrum Awareness Week [ASAW] [@AromanticSpectrumAwarenessWeek]. 2015, Jan 19. ‘Untitled Post’ . `https://arospecawarenessweek.tumblr.com/post/108521451012/idk-if-youre-still-interested-in-coined-terms`

Brake, Elizabeth. 2018. “Do Subversive Weddings Challenge Amatonormativity? Polyamorous Weddings and Romantic Love Ideals.” *Analyze*, no. 11: 61 – 84.

Decker, Julie Sondra. 2015. *The Invisible Orientation: An Introduction to Asexuality.* Skyhorse.[デッカー, ジュリー・ソンドラ（著）, 上田勢子（訳）. 2019.『見えない性的指向　アセクシュアルのすべて』. 明石書房.]

meloukhia. 2010, December 25. Ok, I am now referring to these kinds of relationships as zucchini. [Comment on the blog post ‘A/romanticism.’ by kaz, posted on December 24 2010.] *Kaz’s Scribblings.* `https://kaz.dreamwidth.org/238564.html`

Luna [@confused_moon]. 2021, May 27. ‘Pitching an Alternative Term for Tertiary Attraction.’ *Confused Babbles about the Aspec.* `https://confused-moon.tumblr.com/post/652342361711591425/pitching-an-alternative-term-for-tertiary`

夜のそら. 2019a, 8 月 18 日.「A セクシュアルは何でないか」.『夜のそら：A セク情報室』. note. `https://note.com/asexualnight/n/nb55c22503425`.

夜のそら. 2019b, 8 月 30 日.「A セク入門（1）A セクの定義」.『夜のそら：A セク情報室』. note. `https://note.com/asexualnight/n/n02fd8ebc108b`.

夜のそら. 2020, 2 月 12 日.「恋愛伴侶規範（amatonormativity）とは」.『夜のそら：A セク情報室』. note. `https://note.com/asexualnight/n/ndb5d61122c96`.

クィア

Anonymous Queers. 1990. ‘QUEERS READ THIS.’ [New York City Gay Pride Parade. にて配布されたパンフレット].

Butler, Judith. 1993. ‘Critically Queer.’ *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 1

ジェンダー表現

人称代名詞

Austin, John Langshaw. 1975. *How to Do Things with Words.* Oxford University Press. [. オースティン, J.L (著), 坂本百大 (訳). 1978.『言語と行為』. 大修館書店.]

Butler, Judith. 2013. *Excitable Speech: A Politics of the Performative.* Routledge. [バトラー, ジュディス (著), 竹村 和子 (訳). 2015.『触発する言葉——言語・権力・行為体』. 岩波書店.]

Conrod, K. 2020. 'Pronouns and Gender in Language.' In *The Oxford Handbook of Language and Sexuality*, edited by K. Hall and R. Barrett. 1st ed. Oxford University Press.

Cordoba, Sebastian. 2022. *Non-Binary Gender Identities.* 1st ed. Taylor & Francis Group. DOI: 10.4324/9781003120360.

Dembroff, Robin, and Daniel Wodak. 2018. 'He/She/They/Ze.' *Ergo, an Open Access Journal of Philosophy* 5 (20101214). DOI: 10.3998/ergo.12405314.0005.014.

Legman, Gershon. 2006. *The Language of Homosexuality: An American Glossary.* 1st ed. By Deborah Cameron and Don Kulick. Routledge.

Mathiot, Madeleine, and Marjorie Roberts. 1979. 'Sex Roles as Revealed through Referential Gender in American English.' In *Ethnolinguistics: Boas, Sapir and Whorf Revisited*, edited by Madeleine Mathiot, 1 – 47. Contributions to the Sociology of Language [CSL] 27. De Gruyter Mouton. DOI: 10.1515/9783110804157.

McLemore, Kevin A. 2014. 'Experiences with Misgendering: Identity Misclassification of Transgender Spectrum Individuals.' *Self and Identity* 14 (1): 51 – 74. DOI: 10.1080/15298868.2014.950691.

Smaal, Yorick. 2014. *Sex, Soldiers and the South Pacific, 1939 – 45.* 1st ed. 2015. Palgrave Macmillan.

本田由紀. 2011.『学校の「空気」』. 岩波書店.

単数の they

American Psychological Association [APA]. 2020. *Concise Guide to APA Style.* 7th

Perspectives in Biology and Medicine, 50(4), 535 – 543.

Richardson, Sarah S. 2015. *Sex Itself*. Reprint ed. University of Chicago Press.

インターセックス

Blackless, Melanie, Anthony Charuvastra, Amanda Derryck, Anne Fausto-Sterling, Karl Lauzanne, and Ellen Lee. 2000. 'How Sexually Dimorphic Are We? Review and Synthesis.' *American Journal of Human Biology: The Official Journal of the Human Biology Council* 12 (2): 151 – 66. DOI: 10.1002/(SICI)1520-6300(200003/04)12:2<151::AID-AJHB1>3.0.CO;2-F.

Fausto-Sterling, Anne 2000. *Sexing the Body: Gender Politics and the Construction of Sexuality*. New York: Basic Books.

interACT. 2018. 'Policies Supporting Intersex Youth.' `https://interactadvocates.org/policies-supporting-intersex-youth/`

interACT. 2025. 'The Fight Must Include Intersex Rights.' `https://interactadvocates.org/wp-content/uploads/2025/05/FOR-DIGITAL-THE-FIGHT-MUST-INCLUDE-INTERSEX-RIGHTS.pdf`

ISNA (n.d.). 'What's the history behind the intersex rights movement?' `https://isna.org/faq/history`

United Nations for LGBT Equality (2017). 'United Nations FACT SHEET Intersex.' `https://www.unfe.org/wp-content/uploads/2017/05/UNFE-Intersex.pdf`.

ジェンダー・モダリティ

Ashley, Florence. 2022. ''Trans' Is My Gender Modality: A Modest Terminological Proposal.' In *Trans Bodies, Trans Selves: A Resource by and for Transgender Communities*, 2nd ed., edited by Laura Erickson-Schroth, 22. Oxford University Press.

Pease, M., Williams, N. D., Iwamoto, D. K., and Salerno, J. P. 2022. 'Minority Stressors and Their Associations with Severe Psychological Distress among Gender-Diverse People.' *American Journal of Orthopsychiatry* 92 (5): 578 – 589. DOI: 10.1037/ort0000635.

Cambridge University Press.
夜のそら. 2020, 11 月 17 日.「A ジェンダー・マニフェスト(2020)」.『夜のそら: A セク情報室』. note. https://note.com/asexualnight/n/n02fd8ebc108b.

セックス

Ainsworth, Claire. 2015. 'Sex Redefined.' *Nature* 518 (7539): 288 – 291. DOI: 10.1038/518288a.
Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity.* Routledge. [バトラー, ジュディス(著), 竹村和子(訳). 1999.『ジェンダー・トラブル : フェミニズムとアイデンティティの攪乱』. 青土社.]
Fausto-Sterling, Anne. 2000. *Sexing the Body: Gender Politics and the Construction of Sexuality.* 1st ed. Basic Books.
Koyama, Emi. 2004. 'Adding the 'I' to LGBT.' *Intersex Initiative.* http://www.intersexinitiative.org/articles/lgbti.html. [Emi Koyama (著)、ひびのまこと(訳). 2005「「LGBT」に「I」を付けくわえること:インターセックスは LGBT 運動の一員なのか?」. 日本インターセックス・イニシアティヴ. http://www.intersexinitiative.org/japan/lgbti.html .]
Laqueur, Thomas. 1990. *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud.* Cambridge, MA: Harvard University Press. [ラカー, トマス(著), 高井宏子, 細谷等(訳). 1998.『セックスの発明—性差の観念史と解剖学のアポリア』. 工作舎.]
Lee, P. A., Houk, C. P., Ahmed, S. F., & Hughes, I. A. (2006). 'Consensus statement on management of intersex disorders. In collaboration with the participants in the international consensus conference on intersex organized by the Lawson Wilkins Pediatric Endocrine Society the European Society for Paediatric Endocrinology.' *Pediatrics*, 118(2), e488 – e500.
Montañez, Amanda. 2020. 'Beyond XX and XY.' *Scientific American* 29 (1): 50. DOI: 10.1038/scientificamerican0917-50.
Orgogozo, V., A. E. Peluffo, and B. Morizot. 2016. 'Chapter One - the 'Mendelian Gene' and the 'Molecular Gene': Two Relevant Concepts of Genetic Units.' In *Genes and Evolution*, edited by Virginie Orgogozo. Academic Press.
Preves, S. E. 2003. *Intersex and Identity: The Contested Self.* Rutgers University Press.
Reis, E. (2007). 'Divergence or disorder? The politics of naming intersex.'

参考文献

ジェンダー

anarchist_neko. 2025.「「2025 年 8 月の私のアナキズム」宣言」.『a.n.: a ZINE by anarchist_neko REDUX EDITION』.

Scott, Joan Wallach. 1988. *Gender and the Politics of History.* Columbia University Press. [スコット, ジョーン・ W. (著), 荻野美穂(訳). 1992.『ジェンダーと歴史学』. 平凡社.]

ジェンダー・アイデンティティ

anarchist_neko. 2022, October 15.「ジェンダーを図示する」.『a.n.: anarchism is for everybody』. wordpress. `https://anarchistneko.wordpress.com/2022/10/15/visualising_gender/`

Baaphomett. 2014, June 24. 'Untitled Post.' `http://baaphomett.tumblr.com/post/89738557605/ive-done-a-lot-of-thinking-about-identity-and`.

Butler, Judith. 1993. 'Critically Queer.' *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 1 (1): 17 – 32. DOI: 10.1215/10642684-1-1-17.

Haslanger, Sally. 2000. 'Gender and Race: (What) Are They? (What) Do We Want Them To Be?' *Noûs* 34 (1): 31 – 55. DOI: 10.1111/0029-4624.00201. [ハスランガー, サリー(著), 木下頌子(訳). 2022.「ジェンダーと人種——ジェンダーと人種とは何か？　私たちはそれらが何であってほしいのか？」.『分析フェミニズム基本論文集』, 3 – 44. 木下頌子, 渡辺一暁, 飯塚理恵, 小草泰(編訳). 慶應義塾大学出版会]

Jenkins, Katharine. 2016. 'Amelioration and Inclusion: Gender Identity and the Concept of Woman.' *Ethics* 126 (2): 394 – 421. DOI: 10.1086/683535. [ジェンキンス, キャサリン(著), 渡辺一暁(訳). 2022.「改良して包摂する——ジェンダー・アイデンティティと女性という概念」.『分析フェミニズム基本論文集』, 45 – 84. 木下頌子, 渡辺一暁, 飯塚理恵, 小草泰(編訳). 慶應義塾大学出版会.]

Stone, Alison. 2006. *Luce Irigaray and the Philosophy of Sexual Difference.* 1st ed.

最後に：You are valid!

Valid とは「正しい」「妥当だ」などを意味する英語です。どのような性別も、惹かれのあり方も、探求も、全て valid です。それは誰にも侵害されるべきでないあなた固有の経験であり、実践であり、事実です。性別や惹かれのあり方を根拠に周縁化されたり、差別されたり、暴力の被害にあったりして良い社会や運動など、私たちには不要です。

本記事の原案は、a.n. が 2022 年に書いたものです。一部のひとやあり方が valid であるということを断定的に否定する「LGBTQ+」の説明を数多く見たのが、きっかけとなってうまれました。あれから 2 年半以上経った今も、現状が変わったとは正直思えません。

この文章は、あくまで私たちが現時点においてどのように理解しているかを表しているだけです。ですので、もしこの文章であなたが valid であることが否定されていれば、それはこの文章が誤っているのであり、あなたが誤っているのではありません。LGBTQ+運動、クィア運動とは、全てのひとが valid であるという前提のもと、全ての者の解放と平等と正義を求める運動です。少なくとも私が賛同し参加しているそれはこのようなものですし、このようなものであるために日々努力を繰り返すものです[21]。

[21] 本稿は、おともだちの「からし」と「おもち」にコメントを頂きました。ありがとう！

Rodwell らが発起人です。ストーンウォールの革命やそれ以降の運動でも、Marsha P. Johnson や Sylvia Rivera といったトランス女性は中心的な役割を担っていました。また、上述の Queer Nation も、AIDS の流行やこれを阻止するために始まった団体 ACT UP と密接に関わっています（Berlant and Freeman 1993）。

「LGBTQ+」は、だから、ただ「レズビアン」、「ゲイ」、「バイセクシャル」、「トランスジェンダー」、「クィア」、「クェスチョニング」の略語ではありません。これは、私たちに対する抑圧とそれへの抵抗を前提とした、コミュニティと実践、そして連帯を表す標語なのです。それぞれの文字で表されているコミュニティや運動を、それらがどう交差している／しうるのかを説明せずに、「LGBTQ+」を説明するのは、喩えるのならば、意味を知らない単語を暗記カードに書いているようなものだと私たちは考えています。これまでに書かれた聞き慣れない表現を「よくわからない横文字」と脇に追いやるのではなく、ひとつひとつがこの抑圧的な社会の中で試行錯誤の末に提案された表現であることを、どうか忘れないでください。

抵抗し、エスカレートしました。これを受けて、Gay Liberation Front(ゲイ解放戦線) の結成や全国各地でのデモなど、LGBTQ+の権利のための運動が盛んになっていきました。ただし、初期は白人でシスジェンダーのゲイ男性のみが中心の運動であったという批判もあります。

LGBTQ+

以上を踏まえたうえで、初めて「**LGBTQ+**」という語の意味を伝えることができると、私たちは考えています。たしかに「**L** はレズビアンの L、**G** はゲイの ‘G’、**B** はバイセクシャルの ‘B’、**T** はトランスジェンダーの ‘T’、**Q** はクエスチョニングやクィアの ‘Q’、＋はそれ以外」という説明のみでも、誤ってはいません。ですが、それぞれの文字で表されているコミュニティは独立しているわけでも真空の中にあるわけでもありません。各々が経験する抑圧もそれに対する抵抗も、決してバラバラに切り離すことはできません。そして、このことを「LGBTQ+」という表現から切り離すこともまた、不可能なのです。

例えば、‘L’ が ‘G’ の前にあるのも、AIDS クライシス[19]の際にレズビアンの活動家が率先してゲイ男性の支援を行った歴史を踏まえてです。クィアという表現を肯定的に使い始めた初期の例である『クィアよ、これを読め！』が配布されたニューヨーク・ゲイ・プライド・マーチは、1969 年のストーンウォールの革命 (Stonewall Revolution)[20]に参加した Craig

[19]70 年代から 90 年代、HIV や AIDS の知識が不十分だったアメリカにおいて、AIDS がゲイ・コミュニティやドラッグ使用者を中心に爆発的に流行しました。この流行（エピデミック）およびその際生じた社会的パニックを「AIDS クライシス」と言います。AIDS の流行や AIDS クライシスに対するレーガン大統領の一連の政策は、ゲイ差別的側面も強かったと指摘されています (Shilts 1987)。

[20]ストーンウォールの反乱 (Stonewall Riots) とも。1969 年 6 月 28 日の深夜に起こった、ゲイバー Stonewall In への強制捜査とそれへの抵抗から始まった一連の抵抗運動。トランス女性や「ブッチ」のレズビアン、ドラァグクイーンやその他クロスドレスしている (とみなされた) 方の逮捕が目的でしたが、バーの客や集まった見物人が警察に

は、ここまで見てきたどの用語でも十分に表せないあり方の全て。そして、三つ目は、社会的な期待に反する／抵抗することを積極的に受け入れた当事者ら。

> われわれのいう Queer（大文字 Q であることに注意せよ）は、その抵抗の力で定義される ——〈普通らしさ normalcy〉に挑戦するすべてへと仕掛けられた戦のなかで鍛え上げられた、その力に。〈普通らしさ〉は、白人至上主義であり、資本主義であり、allo シスヘテロ規範であり、家父長制であり、単数愛制であり、able-bodied である。Queer とは、これら以外のすべてである 。
>
> anonymous from Reclaim Pride Brighton. 2021（a.n. 訳）.

この第三の意味でのクィアは、常に開かれた、流動的で、自己更新的な政治的実践です（Butler 1993 など）。私たちは、このような意味で自分たちを「クィア」と表現しています。

クィア

クィア（Queer）は、元来は特にゲイの男性へ向けられた差別語として用いられていた言葉です。すでに 19 世紀末には、性的な「逸脱」をあらわし、フェミニンな男性や男性と性的関係をもつ男性を指す蔑称として用いられていました（Robb 2004）。しかし、Queer Nation が 1990 年に配布した『クィアよ、これを読め！ *QUEERS READ THIS!*』などを受けて、現在は LGBTQ+の連帯や抵抗の象徴的な表現として広く**奪回**（**リクレイム**；reclaim）されたと考えられています（Scherrer 2008 など）。

> まあ、確かに「ゲイ」は良い言葉だ。適している場面もある。だが、我々レズビアンやゲイ男性の多くは、朝、目を覚ますとき、怒りと嫌悪を覚えている。決してゲイ（陽気）ではない。だから我々は自らを「クィア」と呼ぶことにした。世界からどのように見られているかを忘れないために。同時に、ストレートに支配された社会で、自らの生活を隠し周縁化させたまま、面白くて魅力的な人間である必要などないと言うために。[...] そうだ、「クィア」は確かに荒々しい言葉でもある。だが、ホモフォーブの手から奪い取り向け返すことのできる、冴えた皮肉な武器ともなりうるのだ。
>
> 『クィアよ、これを読め！』1990.（sykality 訳）.

現在、「クィア」という語には少なくとも三つの意味があります。まず、allo シスヘテロでない全てのひとまたは彼人らのコミュニティ。もう一つ

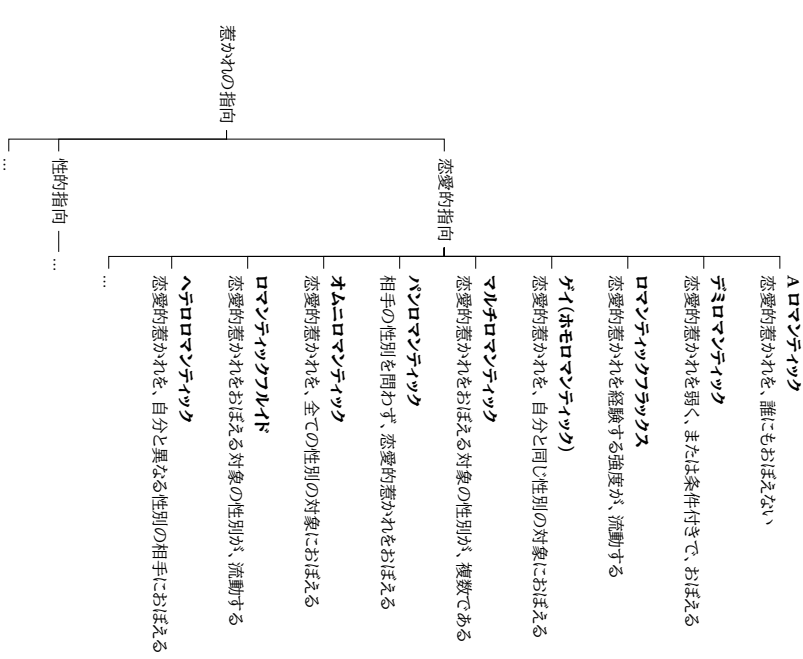


図 5: さまざまな惹かれの指向（例）

性のみを表すことが多いですが、英語圏では性別を問わず、ヘテロロマンティックかつヘテロセクシャルでない惹かれの総称としても、一般的です。

女性寄りのひとに惹かれをおぼえる女性寄りのひとを中心に、**レズビアン**という表現も使われます[17]。性的・恋愛的対象が複数の性別であるレズビアンを **M-spec レズビアン**と言います[18]。

さらに、マルチロマンティック（／マルチセクシャル）の方のうち、惹かれを経験する対象の性別が二つであるひとを中心に、**バイセクシャル**（／**バイロマンティック**）と言います。ただし、「惹かれを経験する対象の性別が二つ以上」と拡張されて理解されることもあり、この拡張的な面を強調して **Bi+**と表記されることもあります。

また、先ほど出てきた**クエスチョニング**は、惹かれの指向にも用いられます。ここでまとめて再度説明すると、クエスチョニングとは、現在自分のラベルがわからなかったり、探求、学習、または実験したりしているひと、さらには「わからない」というあり方を積極的に受け入れたひとの総称です。

[17] ここで「中心に」と書いているのは、ノンバイナリーの方やトランス男性の一部もレズビアンであるからです。

[18] ただし、この概念はコミュニティ内でも激しい議論があり、レズビアンではなくバイセクシャルやパンセクシャル等の一部と考えるべきだという意見もあります。私個人の見解はあるものの、ここでは脚注として言及するだけにとどめます。

シャルであるからといって allo ロマンティックであるとは限らないし、A セクシャルであるからといって（例えば）美的惹かれを経験しないとは必ずしも言えないという点です。

社会の多くでは、allo セクシャルかつ allo ロマンティックの方以外が周縁化されています。「すべてのひとがひとりのひとと恋愛的かつ性的な愛情に基づいた関係性を求めており、これによって幸福となるという規範的な期待」（Brake 2018:abstract）を**恋愛伴侶規範**[15]（amatonormativity）と言います。

6.2　惹かれの指向

私たちは「**惹かれの指向**（attraction orientation）」という概念を提唱しています。これは、惹かれをおぼえる相手の性別と自分の性別との関係を表す概念です。代表的な惹かれの指向には、「恋愛的指向」、「性的指向」があります。恋愛的指向を例にしたものが、図 5 となります[16]。

「**ゲイ**」という表現は、恋愛的指向に限らず、性的指向を表すこともあります。似た意味のことばとして「ホモセクシャル」もありますが、特殊な場を除いては、この語の差別的な歴史を踏まえて避けられることが一般的です。また、ゲイは特に日本語圏では男性に惹かれをおぼえる男

[15]夜のそら（2020）の提案した訳語に基づきます。夜のそらは、恋愛伴侶規範を「「一人の特別な人に恋愛をして、その人と結婚して、ずっとその人だけを大切にすることが、人間の最高の幸せ」という考え方、あるいは、そういった考えに基づく圧力」として説明しています。

[16]A セクシュアルや A ロマンティックを「指向」の一種とするか（「見えない指向」（Decker 2015））、惹かれる対象がいない以上「指向」という概念で理解すべきでないと考えるかは、いくつかの議論があります。ここでは夜のそらに従って、「指向」の一種tpそて。図 5 内に示します。

6.1 A ロマンティック、A セクシャル

惹かれはすべてのひとが経験するわけではありません。恋愛的惹かれを例に取ると、これを経験しない、または、経験してもとても弱いことを **A ロマンティック**（aromantic；読み方：「アロマンティック」や「エーロマンティック」）と呼び、経験することを**ロマンティック**（romantic）や **allo ロマンティック**（alloromantic；読み方「アロロマンティック」）と呼びます[13]。

性的惹かれについても同様に、これを経験しないことを **A セクシャル**（asexual；読み方：「アセクシャル」や「エーセクシャル」）[14]、経験することを**セクシャル**（sexual）や **allo セクシャル**（allosexual）と言います。A ロマンティックは **aro**（読み方：「アロ」）、A セクシャルは **ace**（読み方：「エース」）と略されることも多いです。さらに、性的惹かれを弱く、または条件付きで経験することを**デミセクシャル**（demisexual）と言います。恋愛的惹かれについても同様に、**デミロマンティック**（demiromantic）と言います。恋愛的（／性的）惹かれを経験する強度が変化することを、**ロマンティックフラックス**（／**セクシャルフラックス**）や**アロフラックス**（／**エースフラックス**）と言います。

実際には、恋愛的惹かれや性的惹かれの間に関係がある方もいるため、**スプリット・アトラクション・モデル**（split attraction model [SAM]）と呼ばれるこのモデルには異議もあるのですが、大切なのは、allo セク

[13] allomantic や allosexual は、カタカナで書くと一文字違いの「アロマンティック」や「アセクシュアル」と見間違えられることも多いため、allo の部分をアルファベットで書くようにしています。夜のそら（2019a）なども、この表記を採用しています

[14] 日本語圏では、一切性的惹かれを経験しないことを特に**ノンセクシャル**として区別することもあります。なお、A セクシャルは惹かれに関する概念であり、性行為をしないという意味でも、性的欲求がないという意味でもありません（夜のそら 2019b）。

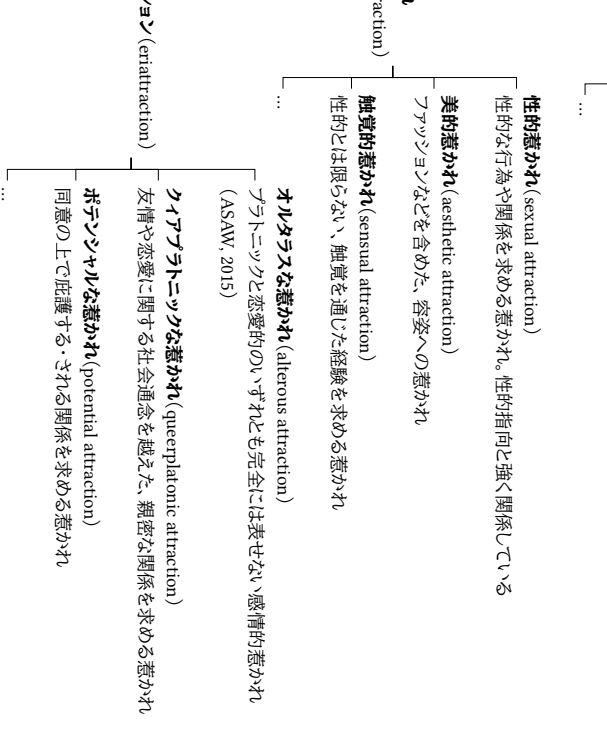


図 4: さまざまな惹かれの分類（例）

惹かれ

さて、ひとりまたはそれ以上の他者と親密な関係を築いたり、そうすることを望んだりする方がいます。このような欲求を**惹かれ**（attraction）と言います。惹かれの一部には名前がつけられています。代表的なものとして、「恋愛的惹かれ（romantic attraction）」や「性的惹かれ（sexual attraction）」があります。前者はより大きく、「感情的惹かれ（emotional attraction）」、後者は「身体的惹かれ（physical attraction）」の一部であるとされます。惹かれをどのように図で表すかは複数のモデルが有るのですが、例として、私たちの理解を図 4 として示します。

惹かれに基づいた関係にいる相手に対する特別な呼称もあります。たとえば、クィアプラトニックな惹かれに基づいたパートナーを**ズッキーニ**（zucchini）とも呼びます（kaz 2010）。

また、惹かれを経験する対象は、ひとりとは限りません。複数の相手に惹かれを経験することを**ポリアモラス**（polyamorous）と言い、ポリアモラスな関係を**ポリアモリー**（polyamory）と呼びます。対して、ひとりのみに惹かれることを**モノアモラス**（monoamorous）と言い、モノアモラスな関係を**モノアモリー**（monoamory）と呼びます。現代の多くの社会制度は、婚姻制度をはじめとしてモノアモリーを前提としており、そのような規範を「**モノアモリー規範**」と言います。

5.2　単数の *they*

They は複数のひとを表すこともありますが、ひとりを表す場合もあります。後者の *they* を**単数の *they***（singular *they*）と呼びます。単数の *they* の活用や動詞のかたちは、複数の *they* と基本的には変わりません[12]。

例：

Nia は *they*/*them* です。Nia は嬉しそうにコーヒーを飲んでいます。

*Nia is drinking coffee. They *is* happy.（誤）

Nia is drinking coffee. They *are* happy.（正）

単数の *they* は、新しく出てきた用法ではなく、14 世紀以降広く使われ続けています（Balhorn 2004）。英語母語話者でも、単数形の *they* を不自然だと主張する者が、それを主張するなかで単数形の *they* を意識せずに使ってしまう例がしばしば見受けられるほどです。アカデミック・ライティングなどの場でも、例えば APA 第七版からは単数の *they* の使用が推奨されています（APA 2020:45）。

[12]ただし、*themselves* ではなく *themself* とすることが多いです。

2014)、深刻な精神的苦痛を引き起こしたり(Cordoba 2022)、そのひとにとって居心地の悪い環境をつくることを正当化してしまったりする(Dembroff and Wodak 2018)働きもあります。

そのため、相手を正しく言及する代名詞を用いることが大切です。人称代名詞は多くの場合対象の性別と一致するものの、必ずしもそうであるとは限りません(Conrod 2020。本 ZINE の「「日本語版ジェンダー調査 2023」調査結果」も参照してください。)。例えば、*he* の女性や *she* の男性などもいます(Legman 2006 や Smaal 2014 Mathiot and Roberts 1979 など)し、一人称が「ぼく」の女性もいます(本田 2011)。モノジェンダー(ジェンダー・アイデンティティがひとつ)の方であっても、複数の人称代名詞の方もいます。相手の人称代名詞がわからない場合は尋ねるか、ジェンダー・ニュートラルなものを使用しましょう。勝手に予想してはいけません。ただし、本人が共有していない相手に勝手に共有することはアウティングになりうるので、気をつけてくださいね。

英語における人称代名詞に着目しますと、「伝統的」とされるものは、女性寄りを指す *she*、多くの場合男性寄りを指す *he*、そして(ノンバイナリーではなく)ジェンダー・ニュートラルな(単数の) *they* の三種類とされます。これらを**旧代名詞**(protopronouns)と言います。旧代名詞以外の人称代名詞を**新代名詞**(neopronouns)と言い、例えば *xe* などが含まれます。聞き慣れないものや難しいものは調べてみたり、相手を尊重しながら尋ねたりしてください。

ジェンダー表現

ジェンダー表現（gender expression）とは、ジェンダー・アイデンティティに関わらず、服装や喋り方、人称代名詞などと結び付けられたジェンダー・ラベルです。ここで注意して欲しいのは、トランジションの際に取られるかもしれないジェンダー表現の変化はあくまで過程の一部であり、トランジションの理由でも目的でも全員が経験することでもないという点です。

5.1　人称代名詞

人称代名詞について少しお話ししましょう。**人称代名詞**（personal pronouns）とは、主にひとを指す際に使われる代名詞のことです。英語では *I* や *you*、*she* など、日本語では「ぼく」や「あなた」、「彼女」などがこれに当たります。人称代名詞の一部には、ジェンダーに関する示唆が全く含まないジェンダー・ニュートラルなものもありますが、性別化されているものもあります。

人称代名詞は、ただひとを指したり外的な世界を反映したりするのみでなく、われわれの存在する世界を「構築」するはたらきもあります（Austin 1975; Butler 2013 なども参照のこと）。また、相手の望まぬ代名詞を使用することはセルフスティグマ[11]につながったり（McLemore

[11]社会における偏見や差別的価値観を内面化し、自分自身に向けてしまうこと。

ンダーの方の一部は**トランジション**[10]（transition）します。トランジションには、抗ホルモン剤という可塑性のある薬剤の使用や、ホルモン補充療法（HRT; Hormone Replacement Therapy）、身体違和解消手術などを通じた医学的なもの（「医学的トランジション（medical transition）」）と、人称代名詞や名前の変更、服装の変化、使用する場所の変化といった社会的交流のあり方の変化を通じたもの（社会的トランジション（social transition））、そして戸籍やパスポート上の名前や法的な「性」の更新などに関わる法的トランジション（legal transition）との三種類に大きく分かれます（これらは独立しているのではなく、交差しています）。一方で、経済的要因を含めたさまざまな理由により、トランジションしない方やできない方もいます (本 ZINE の「「日本語版ジェンダー調査 2023」調査結果」も参照してください）。

[10]「**性別移行**」とも言います。ただし、私の認識としては自らのアイデンティティに合うように他のものを変化させるというのがトランジションであり、「性別移行」は性別自体を移行しているように誤って受け止められがちなため、この訳語に消極的です。

ジェンダー・モダリティ

出生時に割り当てられたジェンダーとジェンダー・アイデンティティとの関係を**性別の様式**（ジェンダー・モダリティ；gender modality）と呼びます（Ashley 2022）。ジェンダー・アイデンティティが出生時に割り当てられたジェンダーと一致するないしは非常に近い場合、**シスジェンダー**と言います。一方、一致しない場合、（広義の）**トランスジェンダー**と言います。女性のうち出生時に割り当てられたジェンダーが「男性」であったひとのことを**トランス女性**、男性のうち出生時に割り当てられたジェンダーが「女性」であったひとのことを**トランス男性**と言います。

この説明のみではノンバイナリーや A ジェンダーの方はトランスジェンダーであると思われてしまうかもしれませんが、「トランスジェンダー」「シスジェンダー」という理解の枠組みのみでは十分に説明できないあり方の方もいます。「（広義の）トランスジェンダー」の説明に合うからといって、必ずしもそのひとがトランスジェンダーであると自己認識しているとは限りません（私もそのひとりです。本 ZINE の「「日本語版ジェンダー調査 2023」調査結果」も参照してください）。

トランスジェンダー（トランス）やノンバイナリー、A ジェンダーの方の一部は、自分のアイデンティティと合致する性別として扱ってもらえなかったりセルフイメージと身体が乖離していたりすることによって、激しい違和・不合を経験します（Pease et al. 2022 など）。そのため、トランスジェ

妊娠能、さらにはウェル・ビーイングの低下などの副作用をもたらすこともあります。interACT などの当事者団体や国際連合や WHO は、こういった不要な手術等は人権侵害であると宣言しています[9]。また、同時に、トランス差別的な法令等の影響を受けて、インターセックスの方も必要な医薬品や手術等へのアクセスを制限されています（interACT 2025）。LGBTQ+運動はインターセックス・コミュニティとの連帯が不可欠であると、私たちは考えています。

[9] interACT（2018）に賛同団体等のリストあり。

3.1　インターセックス

インターセックスについて、もう少しお話します。約 2%のひとにインターセックスの特徴があると考えられています（Blackless et al. 2000）が、そのなかには遺伝子検査等をしないとわからない方もいれば、日々の生活に困難を抱える症状を経験している方もいます。また、インターセックスの特徴は、出生時のほか、成長してから確認される場合もあります（United Nations for LGBT Equality 2017）。トランスジェンダー（後述）のインターセックス当事者もいれば、シスジェンダー（後述）の当事者もいます。

インターセックスの方に対する暴力的な慣習として、1950 年代以降広まった小児手術の強制があります。この手術は、これが不要であることを示唆するデータを無視した（ISNA n.d.）John Money によって発展させられました。Money は、彼の信じる「女 female」または「男 male」の身体となるように、インターセックスのこどもたちへ強制的にホルモン補充療法や外科手術を行いました（Fausto-Sterling 2000）。さらに、ペニスを形成する手術が困難であるという理由で、強制的に女性を割り当てられることも少なくありませんでしたが、多くの事例では、当事者の合意はとられず、その保護者にも十分な説明はなされていませんでした（ISNA n.d.）。この結果、自死してしまった方もいました（“John/Joan 事件”）。

インターセックスの方々は、現在もなお、性別二元論に基づいた外科手術等を強要されています。性ホルモンの分泌腺や生殖器に不必要な不可逆施術を行うこともあります。このような手術等は、性的機能や

ずれの端でもないセックスに関するとされる特徴や生殖に関する解剖学的構造のある方たちのことを広くあらわす表現です。このスペクトラムのいずれかの端に近いセックスの方を**ペリセックス**（perisex）や**ノン・インターセックス**（non-intersex）と表現します[6]。

社会的には、多くのひとは染色体等の検査なく主に外性器の形状に基づいて出生時に性を「判別」され、これを法的に登録されます（**法的な「性」**[7]（legal sex））。2025 年現在の日本では、この「判別」は「女」または「男」の二元論に基づいて[8]行われます。そして、多くの家庭や社会では、この登録などに基づいて出生時からジェンダー・カテゴリーを割り当てられ（**割り当てられたジェンダー**）、おもちゃからランドセルの色、「家族」における役割、さらには恋愛や婚姻に至るまで、さまざまな場面で繰り返し規範に従うことを期待されることとなります。

[6] LGBTQ+にインターセックスの “I” を足し、「**LGBTIQ+**」等という表現をすることもありますが、議論もあります。ここでは Koyama（2004）で提示されている問題意識を真摯に受け止め、あえて「LGBTQ+」と表記します。

[7] これを「**出生時に割り当てられたジェンダー**」（AGAB; Gender Assigned at Birth）と呼ぶこともあります。ややこしいですが、「**出生時に割り当てられたセックス**」と呼ぶほうが正確だと考えています。いずれにせよ、ここではこれらの用語を採用しません。また、本稿では別の意味で「割り当てられたジェンダー」という語を用いています。

[8] ただし、決定が困難と判断された場合は、追完を前提として一時的に戸籍上空白とすることがあります。また、オーストラリアなど、「X」などのカテゴリーが存在する制度を採用している国家もあります

セックス（sex）とは、社会的枠組みとしてのジェンダーを参照しながら身体の一部を解釈した結果の総称です（Laqueur 1990; Butler 1990 など）。二元的なジェンダーの理解を「自然」なものであると主張するために用いられることもあります（Butler 1990）。

私たちは指の長さのように外見的にわかるものから、検査をしなければわからないような一塩基レベルの差異（silent SNPs など）まで、さまざまな身体的・遺伝学的差異をもって生まれてきます。セックスの判別はその一部を恣意的に強調して行われます。このとき着目される「身体の一部」は、*SRY* 遺伝子の有無[4]から、その発現量、染色体型、いわゆる性ホルモンの割合や血中濃度、産生する（ことが期待される）配偶子の大きさ、外性器の形状など、文脈や目的に応じて異なります（Ainsworth 2015; Fausto-Sterling 2000 2012; Richardson 2015 も参照のこと）。

医学的・生物学的には、セックスは決してふたつではなく、複数の要素から決定される連続的な線分など（Montañez 2020 など）として説明することが正確です。**インターセックス**[5]（intersex）とは、この線分のい

[4]遺伝子についての補足。遺伝子とは、現代的には機能的な RNA を産生する DNA 上の領域を意味します（Orgogozo Peluffo and Morizot 2016）。あるひとつの遺伝子がある／ないからと言って、必ずしも観察可能な差異とが表れるとは言えません。例えば、遺伝子は転写や翻訳のプロセスのなかで、プロモーター領域や転写調節因子、さらにはエピゲノムなどの調節や制御を受けます。また、遺伝子生産物自体も、体内においては他の遺伝子生産物等と相互作用し、場合によっては他の遺伝子（産物）が「代わり」をしたり「無効化」されたりすることもあります。

[5]特に医学的な特徴に着目した、**DSDs**（Diversities in Sexual Development（性分化に関する多様性）、または Disorders in Sexual Development（性分化疾患））という言い方もあります（Lee et al 2006）。なお、「インターセックス」という語はかつて差別的な意味があり、現在でも使用を避ける方がいる一方、奪回（リクレイム）した使用も広まっています (Lee et al 2006; Preves 2003; Reis 2007)。ここでは、リクレイムされたものとして使用します。

セックス

さて、ジェンダー・アイデンティティはこのように多様ですが、「男女」などという表現にみられるように、我々の社会では依然として、すべてを「女（性）」と「男（性）」のふたつに区別して、さまざまなジェンダー規範を適用しようとする傾向があります。この思想を**性別二元論**と呼び、これに基づく社会的制度を**性別二元制**と言います。性別二元制において、もっとも暴力的でもっとも大切とされている行為の一つが、出生時におけるセックスの判別と法的登録でしょう。

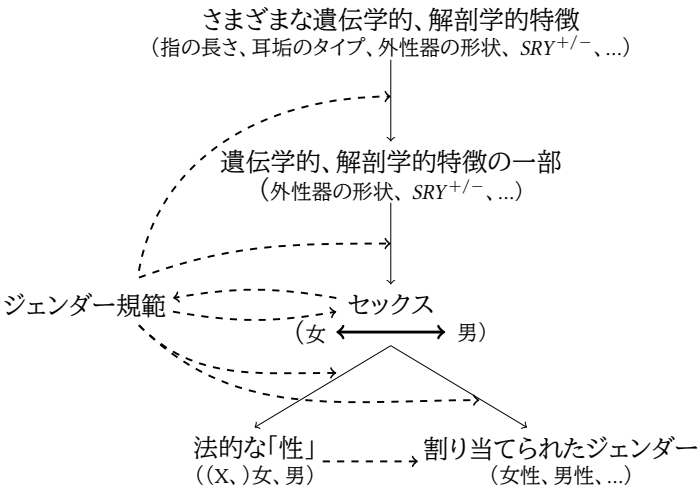


図 3: セックスとジェンダー

ティティが流動するひともおり、そのような方やあり方を**ジェンダーフルイド**（genderfluid）と呼びます。

もちろん、「わからない」や「模索中」もありです。それがLGBTQ+の「Q」で表されているものの一つ、**クエスチョニング**（Qのもう一つの意味は「**クィア**」です。これはあとで説明します）です。模索するのは何歳からでも問題ないし、何年続けていても問題ありません。また、「わからない」ということを積極的に受け入れ、自らのあり方をそう説明する方もいます。

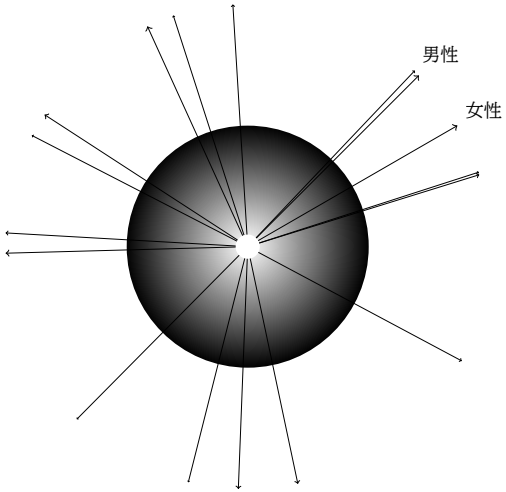


図 2: ガンガゼ・モデルの断面図（例）

る方を総称して、**ゼノジェンダー**（xenogender）と呼びます（Baaphomet 2014）。

ご自身のジェンダー・アイデンティティを、ぜひ図にしてみてください。あなたのジェンダー・アイデンティティやそれのないことを表すための領域は、一つであるとも小さい点であるとも限りません。**ポリジェンダー**（polygender）や**マルチジェンダー**（multi-gender）として説明される方は、複数のジェンダー・アイデンティティを経験します。特に、経験するジェンダーが二つのみの場合、**バイジェンダー**（bigender）と呼びます。バイジェンダーの方には「女性」と「男性」を同時にアイデンティティとしてもつ方もいますし、そうでない方もいます。また、ジェンダー・アイデン

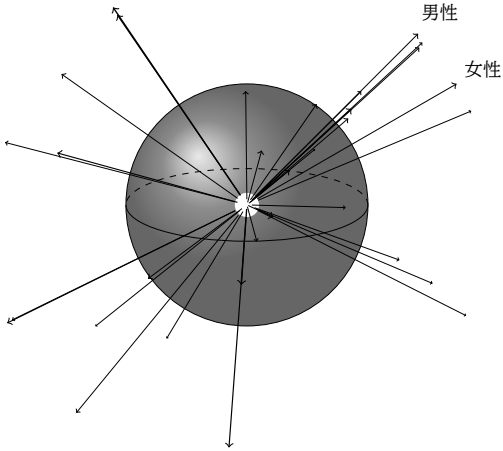


図 1: ガンガゼ・モデル

らです。

個々のアイデンティティは、このガンガゼのなかのさまざまな領域として表されます。各「トゲ」の先の方であるほど、ジェンダーに関する実感の強度は強く、また、各「トゲ」から離れるほど、そのジェンダー・カテゴリーの中心的な経験から離れていくとして理解されます。領域の位置や大きさや個数はひとによりますし、位置や大きさ等が変化することもあります。

図 2 では「女性」と「男性」という二本の「トゲ」を通る切り方をしましたが、そうでない切り方もできますよね。そのような切断面上にも、同じようにいくつもの「トゲ」があります。一部の方は「女性」や「男性」などでは表せないこれらの「トゲ」上に、またはその周辺にアイデンティティがあります。そのような方のうち、特に他生物や概念を用いて理解・説明す

ほしいのは、A ジェンダーの方の多くは、「『ジェンダーがない』というジェンダーがある」わけではなく、そういった説明は誤っているということです。

A ジェンダーのうち、ジェンダー・アイデンティティを経験するが、強度が弱かったり、条件付きであったりする方を**デミジェンダー**（demigender）と呼びます[3]。さらに、ときとしてジェンダー・アイデンティティを経験したり、常に経験していてもその強度が変化したりする方もおり、そのような方を**ジェンダーフラックス**（genderflux）と呼びます。

ジェンダー・アイデンティティのあり方は多様です。わかりやすく図示することは難しいし、やや無理のあることでもあるのですが、ここでは私たちが提唱した「**ガンガゼ・モデル**」を採用しましょう（anarchist_neko 2022. 本 ZINE の「ジェンダーを図示する」も参照してください）。

ガンガゼとは、ウニの一種です。「ガンガゼ・モデル」では、ガンガゼのように無数の「トゲ」がある「球」としてジェンダーを捉えます。この大量に生えたトゲが、さまざまなジェンダーのカテゴリーです。女性や男性は、多種多様な「トゲ」の二本にすぎません。女性か男性かという二択、すなわち、「バイナリー」では答えにくい性別の全てが、（広義の）**ノンバイナリー／非バイナリー**なジェンダーです。

ガンガゼの断面図をみてみます（図 2）。中心部はジェンダーがない状態を表します。真っ白なのは、この状態は図の中に表現しきれないか

[3]ただし、デミジェンダーは、他にも意味があります。A ジェンダーと交差する場合に限らず、「完全に〇〇というジェンダーでは表せない」という方を「デミ〇〇」と呼び、そういった方の総称として「デミジェンダー」という語を用いることもあります

ジェンダー・アイデンティティ

私たちは、例えば挨拶一つから、教育、服装や仕事（ここでの「仕事」は、労働の対価としてお金を受け取る「賃金労働」以外も含まれます）に至るさまざまな社会的交流を繰り返して、この社会におけるジェンダーを理解し、内面化し、これに基づいて、あるいは反発しながら、生活していくこととなります。そのような交流を通じて、私たちはさまざまなジェンダー・カテゴリーやカテゴリーの方、運動などに類縁性をおぼえたり距離を実感したりしていきます。自分のアイデンティティのうちジェンダーに関する一部を説明するものとして、もっとも強く類縁性をおぼえたり、意識的に、無意識的に、あるいは「戦略的」に[1]受け入れたり標榜したりしたカテゴリーを、**ジェンダー・アイデンティティ**[2]（gender identity）と呼びます（Jenkins（2016）、夜のそら（2020）も参照のこと）。

どのカテゴリーやカテゴリーに関するラベルを拒絶したり類縁性を一切おぼえなかったり、あるいはおぼえても希薄だったりする方もいます。そうった方やあり方を総称して、（広義の）**A ジェンダー**（agender；読み方：「アジェンダー」や「エージェンダー」）と呼びます。このとき注意して

[1]Butler（1993）や Haslanger（2000）など。イリガライやスピヴァクの「戦略的本質主義」とのつながりは、Stone（2006）を参照のこと。

[2]「性自認」や「性同一性」とも言います。しかし、「性自認」は「自らの認識」に限定されるという誤解を生じやすく（その結果、主にトランス差別的な論者から「性他認」という用語が登場したりしました）、また、「性同一性」は「性同一性障害」（Gender Identity Disorder; GID）という今は使われていない「病名」との結びつきが強いため、これらの訳語の使用には、あまり賛同していません。

ジェンダー

この社会にはさまざまな規範や理解、知識、言説があります。その中の一種に、生殖や「家族」、労働、さらには服装や容姿に至るまでへの期待を身体的特徴（後述します）の一部と結びつけるものがあります。この枠組みを、**ジェンダー**（gender）と呼びます（Scott(1988) など。anarchist_neko（2022）も参照のこと）。このジェンダーのシステムのなかには、「**女性**」や「**男性**」、（実際には周縁化／透明化されがちですが）「**ノンバイナリー**」など、さまざまなジェンダーに関するカテゴリー（**ジェンダー・カテゴリー**）があります。そして、どのカテゴリーに属する／属さないとみなされるかによって、例えば「女性」であればひとりの「男性」と恋愛し、婚姻して子を産み、育児と家事労働に勤しむべきといった、期待される／押しつけられる役割が異なります。現状、「女性」であるとみなされることによって押しつけられる立場は、「男性」とみなされるひとに押しつけられる立場に隷属することを期待したり性暴力や経済的な搾取の対象となりやすかったりするものが多く、この社会体制を**家父長制**と呼びます。

LGBTQ+ってなに？ に対する
私たちなりの文章

Queer な生を奪回せよ！ **157**

1 存在は抵抗 158

2 クソみたいな現状について 162

3 Queer Unity 166

4 奪回 170

「We Are Here, We Are Queer」 **176**

初出一覧 **177**

「rakugaki」 **68**

ペドフィリアは LGBTQ+に含まれるのか **71**

注意 72

1 用語の定義 73

2 誤った問 74

3 同意のない欲望 75

4 欲望と性暴力 76

5 「性的嗜好」と「性的指向」 77

6 本当に問題にすべきこと 79

追記 81

「日本語版ジェンダー調査 2023」調査結果 **83**

1 はじめに 84

2 回答者の属性 87

3 ジェンダー／性別を表す表現 89

4 一人称代名詞 98

5 三人称代名詞 100

6 敬称 105

7 差別 110

8 トランジション 112

9 結論 116

10 付録 119

目次 i

LGBTQ+ってなに？ に対する、私たちなりの文章 1

1 ジェンダー 2
2 ジェンダー・アイデンティティ 3
3 セックス 8
4 ジェンダー・モダリティ 13
5 ジェンダー表現 15
6 惹かれ 18
7 クィア 24
8 LGBTQ+ 26
9 最後に：You are valid! 28
参考文献 29
索引 35

ジェンダーを図示する 39

1 目標 40
2 既存のモデルの検討 42
3 モデルの模索 57
4 提案：ガンガゼ・モデル 59
5 まとめ 62
6 参考文献 64

目次

LGBTQ+ってなに？　に対する、
私たちなりのZINE

sykality × a.n.